

INTERNATIONAL JOURNAL AND INFORMATION SERVICE FOR THE DISABLED

REHABILITATION GAZETTE

リハビリテーション  
ギャゼット

四肢麻痺者のための会報

6





# REHABILITATION GAZETTE

INTERNATIONAL JOURNAL AND INFORMATION SERVICE FOR THE DISABLED

## 「リハビリテーション ギャゼット」について

本誌は障害を持つ人々と、障害を持つ人ともにあゆむ人々のための情報提供誌です。教育・雇用・法律・住宅・レクリエーション（旅行など）・補助具・読書案内など障害者に関連するさまざまな分野の情報を掲載しています。

本誌はアメリカで出版されている「REHABILITATION GAZETTE」(国際版)の記事が大きな部分を占めています。「REHABILITATION GAZETTE」誌には世界中の障害者からの最新の情報が掲載されているからです。さらに本誌には、日本国内の情報も入っています。

“障害者が自信と誇りを持って前向きに生きていくこと”が本誌の目標です。そのため障害者の自立生活に関する情報に重点が置かれています。

本誌の経費はすべて寄付に頼っており、翻訳・編集は障害者および非障害者のボランティアにより行なわれています。読者のみなさまには、1部につき障害のある方は500円、障害のない方は800円のご協力をお願いしています。

リハビリテーション ギャゼット  
編集委員会

## 追悼 八田知成先生



前専修大学商学部助教授八田知成先生は去る昭和54年2月呼吸器障害のため急逝されました。

先生は、ご自身の障害と永年闘い、四肢マヒの人にも深い理解をおもちでした。

先生の生前の献身と功績をしのんで、ご遺族から当誌へ多大なご寄付をいただきました。

謹んでご報告いたしますと共に、ご冥福を心よりお祈りいたします。





1958年「私は借り物のタイプライターと、辞書と、ノートと、身障の友人をボランティアのスタッフとして、機関誌を始めました。」



1978年「私の機関誌の事務所は、過去28年間にわたって集められた、専門的な出版物とデータの図書及び情報サービスのセンターです。」

## 第6号の序

国際障害者リハビリテーション協会—RI—社会委員

小川 孟

ちょっとナウな感じのするこの「リハビリテーション ギャゼット」が発刊されてからもう7年になるという。ここまで続けてこられたボランティアの方がたの働きには敬服のほかはない。

近頃でこそ障害者に関する出版物もいろいろ出ているが、それでもこの“ギャゼット”ほど豊富な内容を持ったものは見当たらない。おそらくこの本の読者は、日本にいながら、もっとも新しく幅広い情報を得ていることになるだろう。

かくいう私も、この本で紹介されるさまざまな職業についている障害者、とくに車椅子の障害者について教えられることが少なくない。“ギャゼット”5号の特集には、米国連邦政府の公務員、写真家、病院の受付、細胞検査技師、言語治療士、コンピュータープログラマー、図書館員、弁護士、牧師、会計士、会社社長、人事部長、事務員、大学教授、小・中高校の教師、その他、実に広い分野で活

躍している四肢麻痺の人たちのいきいきとした姿が紹介されている。

すでにご承知のように、わが国でも障害者の雇用対策はここ数年急速に充実されてきている。しかし、車椅子の障害者については、住宅、交通、職場環境など、本人の職業的能力以外の障害がネックになって、雇用に結びつかない例が少なくないのは残念である。

もう10年以上昔のことであるが、私が米国グッドウィル・インダストリーズの研修生として、各地のグッドウィルで勉強したとき、オハイオ州デイトンの所長のデスクの横には、いつも盲導犬がおとなしく座っていたし、インディアナポリスの所長秘書は車椅子に乗ったチャーミングなお嬢さんであったことを思い出す。

1981年の国際障害者年を契機として、わが国でもより多くの障害者が社会で活躍する姿が見られるようになることを期待したい。



# リハビリテーション

日本語版 **ギャゼット**

## No.6 目次

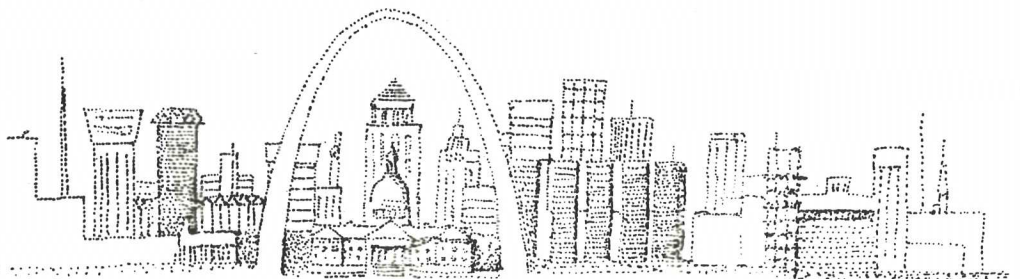
「リハビリテーション ギャゼット」について  
第6号の序／小川 孟

### ◀第1特集

25人の女性身障者の雇用経験 .....	6
芸術家 .....	7
主婦 .....	8
オフィス管理者／労働者 .....	10
リハビリテーションを職業として .....	10
小売店での販売 .....	14
在宅サービス .....	17
教師 .....	18
ボランティア .....	24
作家 .....	25

### ◀第2特集

機関誌の家における20年間 .....	30
英国における四肢マヒ者の雇用 .....	38
旅 行 .....	40
オーストラリアの芸術家スウェーデンへ行く .....	40
氷河と氷原 .....	41



安全な移動 .....	43
車椅子のヨーロッパ旅行 .....	44
とんでる車椅子 .....	45

世界の友達 .....	47
-------------	----

自助具・装具／読者のアイデア .....	56
----------------------	----

車椅子用リフト .....	56
自分で自動車の設計をしよう .....	57
人工呼吸器 .....	59
読者のアイデア集 .....	62

## フォトニュース

### ◀ 第3特集

#### 日本の情報——リハビリテーション

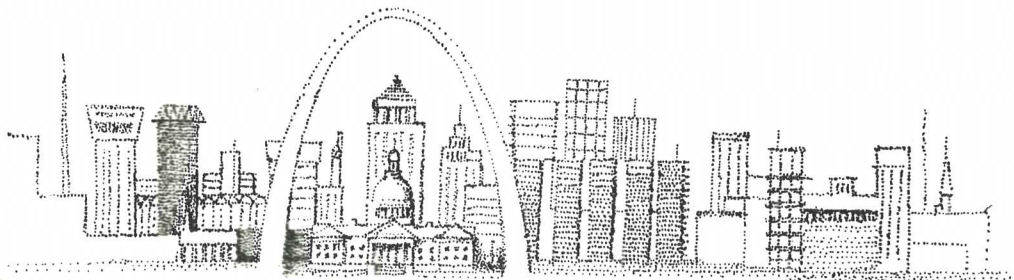
交流セミナー'78, '79より .....70

I. 重度障害者の独立生活 (司会)永井昌夫 .....70

II. 障害者の大学教育 (司会)小島蓉子 .....78

III. 調査報告——障害者団体のニード 村田 稔 .....88

編集後記...95 日本語版スタッフ...95





## 第1特集

# 25人の 女性身障者の雇用経験

Gini Laurie

ギャゼットは以前にも雇用経験の特集を掲載したことがあります。今回は女性に絞りました。しかし職業区分は以前と同じですから、前の号と関連させて読むことができます。

ここにご紹介する25人は素晴らしい人々です。そして万華鏡のようにさまざまな背景、教育、趣味、経験、感情、才能、職業、趣味、人となり、物事への取り組み方を持っています。

登場人物の1人である Clair Jo Schnitz は次のように皆の考えを要約しています。「今日の身障女性は2つの世界から選べるという利点を持っています。1つは身体的な依存からくる、他人に依存した女性的な役割を選ぶことです。もう一つは平等を求めて闘っている時代の女性として独立を選びとることです。あるいはこの2つの世界の間で満足すべきバランスを見出すことができるかもしれません」

1977年にヒューストンで開催された国際婦人年会議には身障者の代表も出席し、障害女性の状況の向上をめざす決議案を提出しました。決議案の大部分は1973年に制定されたりハビリテーション法504項と障害者のためのホワイトハウス会議から引き出されたものです。付け加えていえば、すべての障害をもった女性を含む行動計画が制定され、建築上およびコミュニケーションの障害が取り除かれることになりました。

「独立を選択した」女性障害者は、障害の

ない女性と地域的なレベルで結びつき、自分たちの要求と権利をすべての女性のための草の根レベルの計画の一部にしてもらわなければなりません。

女性障害者は健常女性と同じ問題に直面しなければなりません。しかしながら女性障害者は女性であるということと障害者であるということとの二重の重荷を負っていることとなります。一緒に働くことによつてのみ、女性である人々の問題は解決されるのです。

すべての女性障害者は、他の女性がしていることや考えていることを読むことにより、自分たちの権利や可能性について知らされているべきです。この記事の終りに、大変有益な本のリストがあります。これはオハイオ州の Twinsburg 公立図書館の司書で、ギャゼットの昔からのヴォランティアである Judy Raymond によって集められたものです。Judy は「私はコチコチの女性主義者のアプローチのものや純粋哲学は避けました。ですから実際的な本がほとんどです」と語っています。(訳注：リスト省略)

多くの州は有益なガイドブックを発行しています。例えばミズーリ州では女性に関する法律やサービス、機関について書かれている A Handbook on Women and the Law in Missouri (ミズーリ州の法律と女性に関するハンドブック) という64ページの刊行物が1

ドル25セントで入手できます。申し込みは Missouri Public Interest Research Group Foundation P. O. Box 8276, St. Louis, Missouri 63156 U. S. A.

性的問題や選択、感情、身障者の技術に関する大部分の研究や刊行物は男性向に書かれています。しかし時代は変わりつつあります。ジョージ・ワシントン大学の態度、法律、レジャー障壁に関する地域リハビリテーション研究所は女性障害者と性に関する最近の文学作品のリストを1977年8月の“Reserch”というニュースに掲載しました。同研究所は性に関する広範囲の注釈付の図書目録を用意しています。申し込みは

Regional Rehabilitation Research Institute  
on Attitudal, Legal, and Leisure Barriers  
George Washington University  
1828 L. Street, NW, Suite 704  
Washington, DC 20036 U. S. A.

政府刊行物の中にも興味深いものがいくつかあります。申し込みは

U. S. Printing Office  
Superintendent of Documents  
Washington, DC 20402 U. S. A.

もしこの記事が、世界中の他の読者に女性としての経験を書いてみようという気をおこさせたとしたら、私たちは喜んで次号に掲載するでありましょう。

---

## 芸術家

芸術家及び正看護婦（1954年、28歳の時に多発性硬化症が原因で四肢マヒ）「多発性硬化症を持つ人間としての人間性の拡がりを通して、確実に過去に根ざし、現在に生き、偉大なる将来を計画しています。」 Patricia Karn, 正看護婦, 4575 Niagara Avenue, San Diego, California 92107

「1947年に私は正看護婦の資格を取り、方々の基地の看護団で短期間ずつ働き、韓国へ向う米海軍病院船ベネボレンスに乗船を命じ

られました。1950年8月の大揺れの航海中、他の船が我々の船に衝突し、20分もたたない内に沈没しました。私は2人の命を救ったことで表彰され、メダルをもらいました。4～6ヵ月後、もう一つの病院船、米海軍病院船レポーズに乗船し、韓国に向け出発しました。海上での仕事が終了し、San Diegoの海軍病院で働くようにとの命を受けました。」

「1954年4月に複視を経験し神経科医に診てもらいました。医者は20分もたたないうちに多発性硬化症と診断しました。私は、医師会が私の立場を決定するまで病院に入れられました。医師会は私の不具を一時的なものに見なし、以後5年間、毎年診察を受けるよう命じました。」

「恐るべき不安にもかかわらず、そして時々症状に見舞われながら私はSan Diegoで大学の学士プログラムを始めました。生活の急激な変化と共に、ものの価値をもう一度見直すことになりました。私は、科学より芸術の方が重要だと感じました。身の回りの隠れた調和をデザインし、創り、開拓することによって審美的な問題を解決してみると看護婦をしていた時に完全を求めたひとつひとつのことがいっそう鮮明に浮かび上がってきました。1959年に大学を卒業し、医師会の最初の決定をはねつけて、完全に退職しました。

続く11年間は、青少年ホールで郡の看護婦としてパートタイムで働き、家や庭の手入れをしたり、社会的な活動をしました。」

「1970年に、San Diegoのコミュニティ・カレッジが後援した多発性硬化症の患者のための講義に出よう呼びかけがありました。車椅子にも慣れ、私自身もその気になっていた時だったので良いタイミングでした。私はそのグループに参加し、障害者の新しい社会を知るようになりました。私達はお互い、非常に違った人々のグループですが、ユーモア、愛、生きることの喜びを共通の言葉としています。実際的なもの、哲学的なもの、幻想的なものを共にします。多発性硬化症を持つ人間としての人間性の拡大を通して確実に過去に根づき、現在に生き偉大なる将来を計画し



ています。私は1人の私自身なのです。」

「私はひとりですが孤独ではありません。母の他に、現在の成長した私の強力なきずなである友人がいます。友人は仕事や、社会復帰の活動を加速度的に助けてくれます。今、私は体の機能に合わせた車を運転し、芸術を愛し、楽しんでいます。これは他の人の助けによるものです。私は家を身体に合うよう直すための補助金を待っており、もっと多くの事を再び自分自身で出来るようになりたいと思います。」

「今私は54歳で、私の残りの人生をかけるリハビリテーション活動を始めたばかりです。国際的ネットワークを持つ『リハビリテーションギャゼット』は、何が大切かを知るのに良い情報源です。私達はお互いに最高の可能性を知り合うことが大切です。」

(訳 井上久美子)

## 主婦

[編集者の注：米国のリハセンターは主婦の社会的、経済的重要性を認識し、台所で仕事ができるように、障害のある主婦を援助しています。援助の中には器具の購入や改造のための資金も含まれています。]

### 主婦／芸術家

(1954年16歳の時、ソリの事故によりC-4の四肢マヒとなる)

「私は、法律は重度障害者に対し、障害者が必要としていること及びケアを提供すべきだと思います。特に既婚女性は法律的な援助を切実に求めています。」 Patti Burke, 386 Gardiners Avenue, Levittown, New York 11756

「ニューヨークにあるIPMRベルビュー病院に2年間入院した後、ロングアイランドの家に帰り、両親と暮らしました。絶望的に思われた私の未来が変わりはじめたのは、そのすぐ後でした。」

「地方紙が私の誕生日を祝ってほしいという呼びかけを記事にしました。主人と私はこんな風にして出会いました。結婚までのプロセスは普通の人と少しもかわりませんでした。ドライブ・イン・ムービー、ストックカーレース、ブロードウェイのショーなどワクワクするようなデートを重ねました。ジョー(主人)と私は1958年に結婚しました。主人が空軍にいる間、私はHofstra大学に通いました。」

「大学の勉強は短期間で中断されました。というのは社会福祉の単位のかわりに、母親の単位をとることになったからです。1959年6月にジョー・ジュニアが生まれました。時をへるにしたがって、PTAやボーイスカウトのデン・マザー、その他の家族的な行事に携わりました。」

「息子が大きくなるにつれて、趣味に時間がさけるようになりました。筆を口にくわえて絵を描きはじめ、この地方の高校の成人教育課程で油絵の勉強をしました。今では宝石に色をつけたり、ミニチュア画を描いたり、陶器に絵付けをして楽しんでいます。」

「過去5年間、週に1度私の家で聖書の勉強会をしました。盲人のために聖書を読みました。私は電動車イスであちこち動き回り、棒を口にくわえてタイプを打ちます。主人と私はスクラブル(アメリカの文字ゲーム)狂です。私達は旅行が好きでバンを買いたいと思っています。」

「愛する家族、友人、そして神への強い信仰に恵まれ、新たな日々チャレンジ精神をもって立ち向っています。でも私は、法律は重度障害者に対し、障害者が必要としていること及びケアを提供すべきだと思います。特に既婚女性は法律的な援助を切実に求めています。」

### 主婦／ボランティア

(1954年26歳の時から、ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ)

「私はまだ首から下がマヒしていて、ロッキングベッドに横になっていますが、23と半年の年月を神に感謝しています。」 Kathy

Alcorn, 1235 West 20th Street, Merced, California

「Merced 郡の病院とランチョロスアミゴス病院で1年間入院した後、家に帰り故郷のエルクス・クラブのメンバーが特別に作ってくれた部屋で、主人と2人の子供と一緒に生活にもどりました。長男のビル・ジュニアは29歳で結婚して2軒先に妻と娘と暮らしています。次男は25歳で一緒に暮らしています。」

「数年の間、10セント行進（身障者救済運動）の共同議長をしていました。グリーンティングカードを売って、わずかのお小づかいをかせいだこともあります。本を読んだり、テレビを見たりします。友達と会ったり、電話で話したりします。コーヒークップとソーサーや小さなお皿を集めています。あまり外には出ません。出るのは皆が手助けしようとしてくれ、私が必要で特別な人であると思わせるような特別の時だけです。」

「私はカトリックの教義を2年間教えました。何年にもわたって、看護婦がダイヤルしてくれ、私が電話に出て教区民のために牧師さんの約束をとりつけました。私は教えることも牧師さんの約束をとることも価値あることだと思います。というのはこの仕事を通じて老若の永続きする友達を得たからです。」

「月曜の夜は長老教会の男性が2人きて、ナビゲーターバイブルの勉強をします。水曜の夜はカトリック教会から人がきて、ロザリオを共に唱えます。土曜の夜はたいていメソナイト教会の人がきます。」

「いまだにロッキングベッドに居て首から下がマヒしていますが、神にこの23½の年月を感謝しています。私に多くの祝福をお与えくださいました。」

### 主婦

(1956年以来、ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ)

「幸運なことに、私は快適な家と美しい庭とやさしい夫を持っています。」 Shirley Means, 1808 South Eagleson Road, Boise, Idaho 83705

「しっかりした2本の足以外は動きません。私はマウススティックを使って本を読んだり、タイプしたり、書いたり、電話をかけたりします。そして足先で絵を描きます。1日中呼吸器を使います。夜は胸だけのポータブル呼吸器を使い、日中はロッキングベッドと足で動かす陽圧のふいごを車椅子にとりつけています。短期間歩く時には G. P. 呼吸器が私を支えてくれます。」

「足で動かす陽圧ふいごは器用な作業療法士と物理学者である彼女の夫が私のために作ってくれたものです。ふいごのアイデアは以前失敗したので、はじめは拒否されました。しかし、私があまりうるさく言ったもので、医者も許してくれました。私の最も貴重な進展は、呼吸器や車椅子のモーターから私を自由にしてくれた、このことなのです。」

「私の住んでいる地域には歩道がなく、道は非常に悪いので、車椅子で出かけた時にはすべてのナットやボルトやスクリューが震動し、歯が落ちてしまうのではないかと思われる程です。また私の車椅子はシートの下に取り付けてあるふいごのためにおりたたむことができないので、セダンやタクシーに乗ることができません。」

「私は生活保護も受けていないし、街の特定の地域にも住んでいないので、車椅子の交通機関であるバスのサービスを受ける資格がありません。幸い私は快適な家と美しい庭とどうしても逃れられない用事のために仕事を休んでバンで連れていってくれるやさしい夫を持っています。」

「賃金の上昇につれて付きそいを雇える時間は減っていきます。交通の手段がないのでこの地方の作業療法士に会うことが出来ません。郡のOTの計画は途中で折りました。プライベートの療法士さがしは失敗続きです。」

「貯金箱へわずかな金を加えようとタイプをやりましたが、毎日一時間も打つとあごはガクガクになり、間違いだらけになってしまいました。芸術家の才能もないし、事業を始める想像力や自信もないので、私は赤面しつつ、他の人がやったり、したりするのを見て



楽しむばかりです。」 (訳 山本恭子)

## オフィス管理者／労働者

会計係で大学に通う (生まれながらのウェルドニッチ・ホフマン症による四肢マヒ)

「私が方々のキャンプ場でつりをしたり泳いだり、単に休息したり戸外生活を楽しんだりしているのを一般の人々が見るのは、私達身障者も一般の人たちと同じように生活を楽しんでいるのだということを理解してもらう助けになると思います。」 Bethany S. Ladd, 11431 SW 83 Terrace, Miami, Florida 33173

「私はマイアミ・デイド・コミュニティカレッジの南キャンパスに通い中央会計事務所です。夜間と昼休みに講義に出ていましたが、今は朝7時から8時の講義に出て8時から夕方4時半まで働いています。あと3単位で准学士になりますが、経営学の学士号を取ることを計画しています。」

「大学と地域社会における建築上、および態度姿勢の障壁を取除くために私は委員会の書記に選ばれました。」

「私の趣味はキャンピングです。この夏両親と共に、車椅子用に特別にデザインされたモビルハウスでマイアミからカナダまで素晴らしい旅行をしました。私が方々のキャンプ場でつりをしたり、泳いだり単に休息したり、戸外生活を楽しんだりしているのを一般の人々が見るのは、私達身障者もまた皆と同じように『良い生活』を楽しんでいるというのを理解するたすけになると思います。」

「私が勉強やキャンプで忙しくしていない時にはいつもオルガンを弾いたり、色々なものを手作りしたり、蒐集のための切手や絵葉書を整理したり、競馬を見に行ったりしています。」

「電動車椅子がある程度の独立を与えてはくれますが、私は両親と暮し、今だに身の回りの世話のかなりの部分を両親に頼っています。そして今までのところ付添いで話相手に

なってくれる人が見つかりません。話相手を見つけることと学士号を取ることが目下の目標です。」 (訳 井上久美子)

## リハビリテーション を職業として

ソーシャル・ワーカー／芸術教育の博士課程在学中 (1949年12歳からポリオによる四肢マヒ、インシュリンにたよる糖尿病患者)

「私達は手足を自由に動かすことが出来ないということが他の人達と違っているのです。自由に動かせないという不自由さにもかかわらず私達は笑いもし、泣きもし、恋愛もします。」 Bev Baer, Apt. 3, 445 West 8th Avenue, Columbus, Ohio 43201

「車いすで暮す一人の女性として、将来のことに思いをはせることは、私にとってむづかしいのです。というのは、今まで一度も女性だからということ念頭に置いて、物事を考えたことがないからなのです。」

「子供の頃を振りかえる時、両親は私を賢明に育ててくれたにちがいないという印象があります。どうしてかというと、私はいわゆる女の子といわれるようなタイプの子ではなかったのです。私は一つだけ人形を持っていましたが、それが魔法使いの人形だからとても気に入っていたのです。私の好きな遊び道具は、化学的なものとか、建築に関するものだったのです。伝統的に女の子というものは、ねずみ、ひきがえる、へびなどこわがるものですが、私にとっては貴重な動物のペットの一部にしかすぎなかったのです。12歳の時私は獣医かコンサート・ピアニストになりたいという夢を持っていました。」

「その年、私はポリオにかかり以来両手と筋肉のマヒになりました。肉体的なマヒは私の人生に測りしれない影響を与えました。もしも病気がポリオでなかったとしたら、私は完全に非社会的になっていたでしょう。もし障害から来る肉体的欠陥を気にしていたとしたら、私はソロー (注: Thoreau: Henry

David Thoreau〔1817～62〕米国の随筆家、詩人)のような生活をしていただろうと思うのです。』

「私は又インシュリン常用の糖尿病患者なのです。複数の障害を持っていることがどんなことなのか他の人にわかってもらうのはむずかしいことです。四肢マヒ者という言葉も、私を完全にいい表わしたものでないし、又、糖尿病患者というのでも十分に私の状態を説明したものでないのです。肉体的状況をいろいろの角度からみるということは不愉快なことですから最小限にしか考えないようにしています。インシュリンの注射、尿検査、十分にバランスのとれたカロリーのある食事のことや、一度かかると治りにくい床ずれになるのを防ぐために身体の位置に気をつけたりというような事を考えるよりは、仕事の事を考える時の方が充実しています。』

「女の子だから、両親は私に対して過保護になる可能性もあったのですが、そうではなかったのです。私が心ゆくまで暮し、皆と同じようなことをすることを、両親が私に対して期待してくれているということは本当にありがたいことです。“Accessible”という言葉が一般的になるずっと前、1950年代に私は公立の高校、大学に行きました。私の級友たちは私の車いすを一階から三階まである教室の、どこにでも運び上げ、運び下げてくれました。そしてルームメイトのいる寮に入っていました。』

「当時から今日までの日々は心暖まる体験、ぶつかり合い、あぶなかったことや、災難に近いようなこともありましたが、とても素晴らしく、挑戦にみちたものでした。やめてしまいたいと思ったことも数えきれない程ありましたが、私はどんなものともこの体験をとりかえないでしょう。というのはこれらの日々はユニークで発展的で豊かなものだからです。「主張の時代」以前には車いすで暮す一人の女性が従ったり真似したりする基本的ルールは何もありませんでした。そのため私は自由な精神にならざるを得ませんでした。』

「二つの障害を持って生きることは、さも

なければとてもできなかったようなことをできるようにしたと思います。私の状態は時には非常にたえがたいものとなり、生きつづけるために宇宙的真実、神、スター・ウォーズの力とか、何かそのようなより高いレベルの存在のものを、求めざるを得ない時もあります。』

「百万年生きていたとしても選ばなかったようなそして今となってはどんなものとも交換しようとは思わない一つの職業を、私自身も気がつかないうちに選んだのはこの逆境のためなのでしょう。実のところ私が人生について疑問に思っていたいろいろ沢山の事柄が一つにまとまりかけて来たのはほんの去年ぐらいからなのです。3年間私はオハイオ州立大学癌リハビリテーションプロジェクトでソーシャルワーカーとして働いて来ましたが報酬がないこともあり6月にやめました。冬の学期からオハイオ州立大学で芸術教育の博士課程の勉強を始めようと思っています。オハイオ職業リハビリテーション局からは奨学金がおりなかったのですが、オハイオ州立大が私の出費のほとんどをカバーする特別研究員の地位をくれたので本当に喜んでます。私の最終目的は癌の患者や家族のためにある一つのプログラムを作ることで、その中でソーシャル・ワーカーとしての技術と、患者の回復と、自己表現能力を身につけるための訓練治療技術を生かして行きたいと思っています。この仕事に興味ばかりでなく喜びをみ出すことの出来る私は本当に幸せだと思っています。』

「私が女性としてしてきたことを批判したい気持です。というのは、私は女性としてと同じく身障者として社会によって描かれたイメージを投影する役割を代表してきたからです。障害者である私達にとって、恐怖や心配、抑制をのりこえ、ぬけ出して生活して行くことはとても大切なことだと信じています。そうすれば私達の障害は最少限になり、私たちの例は、皆と全く同じもので私達は成り立っているのだということを社会に教えることになるでしょう。私達は手足を自由に動かすこ

とが出来ないという点だけが他の人達と違っているのです。自由に動くことが出来ないという不便さにもかかわらず、私達は笑いもし、泣きもし、恋もするのです。私達は希望も向上心もあり成功も失敗もするのです。私達は学校へ行き、働き、休暇をとり家族を育て社会へ貢献もしているのです」

労働調整相談員（生まれた時からの遺伝による神経障害）「私は、可能性に到達する過程に満足を見出しています」 Sharon Claunch, 4220 - A, Galliano Lane, St. Louis, Missouri, 63129,

「私はコロンビアにあるミシシッピ大学でリハビリテーション・サービスの理学士をとりました。今はグッドウィル工業の労働調整相談員として働いています。ロジャーと結婚して、1年半すぎ、今私は26歳です」

「私は身体障害の女性ですが恋をし、そして相手も私を愛してくれたことは幸せでした」

「私達の間では、たがいの成長を妨げる様な障害は認めないことにしています。このことは、仲たがいから愛することに至るまで私達が経験するすべてのことにユニークな見通しを与えてくれていると思います」

「私は障害をもった女性ですが、自分の可能性に到達しようとする努力の過程を楽しんでいます。この事に私は喜びと誇りを感じています」

リハビリテーション・ワークショップのカウンセラー（1955年6歳以来皮膚筋炎による四肢マヒ）Victoria Conley, 2230 Marquette, Alton, Illinois 62002,

「大学に行っていた時、私は仲間の一人と同じように幸福を追求する権利があるという事に気づいたので。障害者の一人として、多くの人々が感じているのと同じ責任を感じたのです。私は自分自身の成長と創造性に責任を持っています。私はより大きな愛と思いやりを求め続けたいと思っています」

「私は1949年に生まれました。6歳の時、皮膚筋炎という骨と筋肉のバランスの悪くな



新しく改造された車いすを動かしている、ビクトリア・コンレーさん。「私自身の成長と創造性は私の責任だと思っています」

る病気にかかりました。12歳の時に歩くことが出来なくなり以後車いすを使っています」

「1974年人文科学の学士号をとりました。専攻はスペイン語で副専攻は芸術とイタリア語です。1976年カウンセリングで修士をとり、現在私はカウンセラーとしてアルトン市にある特殊サービス部門で働いています。ここは知能障害者、身体障害者、情緒障害者のためのワークショップです」

「私は大学に行くまで内向的で辛抱強かったのです。私は自分の存在が皆の重荷になっていると思っていたからです。でも大学に行くようになり、私も仲間の一人として幸福を追求する権利があるのだと気がついたのです」

「私が“障害者の運動”に関心を持ったのも大学に行っている間のことでした。エドワードビルにある南イリノイ大学に4年間通いひどい建築上の不備にがまんした末、とうとう私は声を大にして文句をいうことに決めたのでした。私は他の学生と共に障害者学生同盟を作りました。私達は行政機関に働きかけ南イリノイ大学を米国で最も車いすで動きやすい学園の一つに作りかえました」

「卒業後障害者の権利を守るためのマディ



ソン郡委員会の議長になりました。私達は新しい法律の提案者であり又、監視人でもあります。建築上の障壁についての講演もしています」

「私が女性であり障害者であることは明らかかなことであり疑う余地もない事実なのです。でも女性であり障害者であることは、ただの名称にすぎず、これは私のほんの一部を表しているにすぎません」

「私は私自身であり、多くの名称を持っているのです。例えば、独身、カウンセラー、運転手、娘、姉妹、おば、友人、同僚、女権拡張論者、内気、独断的だし、教育もうけ（もっと勉強しなければいけないのですが）そして女性であり障害者なのです。このような言葉も私に関する一部にすぎません」

「私自身性別がないとは思っていないし、性別を意識していないという風にけなされることは許すことができません。障害者の中には彼ら自身をそう認めたり、あるいは社会の人々がそういう風にもみるかもしれないという理由で性別がない、いわゆる無性になった気持でいる人もいますが、私自身、この感情、つまり自分自身性別がなくなってしまったような気持になる感情を克服して行きたいと思っています」

「障害者の一人として他の人達が感じている同じ責任を感じるのです。私は自分自身の成長と創造性に責任を持っています。私は私をとりまく人々へのよりよい理解とより深い感受性を探しています。そして、私の愛する人へのより大きな愛と思いやりを求めています」

「その他、いろいろの事柄が私を作り上げているのです。女性であり、障害者であるということは私の多くの肩書きの中の二つにすぎないのです」

ナーシングホームのソーシャルワーカー、  
コンサルタント（中学生であった1952年以來ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ）Carole Ann Parsons, Elmwood Terrace, Apt. 106, 1270 Wisconsin Street, Lake Geneva,

Wisconsin 53147,

「四肢マヒであるということ自体は悲劇ではありません。建築上の障壁とか人々の態度から引き起される果てしない不自由さが悲劇なのです」

「1970年、ウイソコンシン大学で心理学の学位をうけ、1972年同大学でソーシャルワーカーの修士を得ました。帰郷後、ウイソコンシン大学の職業指導課から紹介された、郷里の高校で学生相談員をして実習期間を終了しました」

「次の年、近くのナーシングホームでソーシャルワーカーとして奉仕をしました。1977年2月からは、ジェネバ湖ナーシングホーム（The Lake Geneva Nursing Home）でソーシャルワーカー、コンサルタントとして働いています。そこで仕事をするようになってから、老人と私の間にある種の相関関係があることに気がつきました。人が年をとっているからとか障害者であるという理由だけで人生は終わってしまうのではない、ということです。私は身体障害に直面しているとしても、通常の過程をへて年をとったにしても「生きていることは美しい」と非常に力強く、はっきりと、熱烈に思います」

「私は両親と共に住んでいます。呼吸のための器具やその他の器具には、ロッキングベッド、電動補装具、食事補助装具、マウススティックなどが含まれています。私の趣味は水彩画や詩を書く事です。1975年身障芸術家によるシスターケニイ国際芸術展覧会で、私の作品は等外佳作に選ばれ、最近、初めての個展を開きました。同じ年に私は最初の本『涙をこえて』を自費出版しました」

「身体障害者についての私の基本的な考え方は、四肢マヒであること自体は悲劇ではなく、建築上の障壁や人々の態度から生じる果てしない不自由さが悲劇なのだ、ということです」

身障学生のサービス機関のディレクター  
（筋ジストロフィーによる四肢マヒ）「生きていることは私にとって楽しいことです。身

体的障害は克服出来ない障壁をつくり出すものではなく、知られていない努力への道を開いてくれるものです。」Tedde (Kast) Scharf, 1925 Montview Drive, Greeley, Colorado 80631,

「私の両親は、私の障害や、人々や私がいつか出会うであろうすべての状況に対して、常に創造的で積極的な態度をとることを奨励していました。ですから私の人生は一連の冒険でもありおどろきでもあったし、今もそうなのです。私は公立の高校、大学に進みました。私はついにニューヨーク市の服飾工科大学の織物デザインの芸術院会員になりました。特別教育の学士であり、北コロラド大学のコンサルティングの修士でもあります」

「経験した仕事は次のようにいろいろあります。ニューヨーク市での織物デザイン、フリーの芸術家、エステス・パーク・トレイル新聞の週刊コラムニスト、北コロラド大学の身障学生相談所ディレクターなどです。（この仕事は1974年から現在までやっています。）」

「私の現在の仕事は大学にいる約120人ぐらいの障害のある学生に対しサービスを調整し相談相手になることです。相談は入学のこと、経済面のこと、家の設備のこと、キャンパス内の車椅子の可動性、学科面への忠告、個人的又は職業に関する相談、トレーニングの課程における設備の問題、特別科目の活動など3人のフルタイムのスタッフと共にこなしています」

「1973年～1976年の4年間、私は障害者のコロラド州知事助言委員会役員として活躍してきました。1975年からは「障害者に関するコロラド・ホワイト・ハウス委員会」の副ディレクターをしています。1976年からは米国筋ジストロフィー協会の副委員長もつとめています」

「1973年には、次の年9月に私の夫となったダニエル・スカーフに会いました。ダンには1968年に脊髄をけがし四肢マヒになったのです。私達は新しい冒険を二人で続けています。ダンには最近、心理学とカウンセリングにおける教育学の博士号をとり、北コロラド大学で

実習を終え、現在グレイリー市の障害者市民事務所でカウンセラーとして働いています」

「私達は共に障害者、健常者を含む地域の活動に積極的に参加しています。私たちは旅行、ダンス、コンサート、お客さまを呼ぶことなどが大好きです。私達は時々、いろいろな市民グループや教育グループから障害者の社会的、心理学的、性的問題に関し講演をたのまれます」

「余暇には、料理、読書、オルガンを弾いて楽しんでいます。オルガンを弾く時には、天井からつり下げたくさりで手がキイ・ボードの上に固定されるよう工夫しています」

「私達は、ジョニーとロイド・スペンサーという若い夫婦を雇い、ベッドに入れてもらうこと、起してもらうこと、身仕度、入浴、家の中の用事、洗濯、運転などしてもらっています。個人的な身仕度などの外は、車いすで全く自由に何でも出来ます。台所は私達が自分で料理したり後片づけしたり出来るように工夫してあります。だから私達にとって生きることが楽しいのは当然のことでしょう。身体障害は克服出来ない障壁をつくり出すものではなく、知られていない努力への道を開いてくれるものです」（訳 竹中滋子）

## 小売店での販売

玩具店店主（1954年発病。ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ）

「病院の車椅子での何年間ものうちひしがれた日々から、自分自身のおもちゃ屋を持つまでの23年間は、新しい発見の驚きにみちた長い長い旅でした。子どもたちも育ち上がり、30年の結婚生活もずっとつつが無く過ぎました。」 Mary Ann Hamilton, 1185 South Williams, Denver Col. 80210

『『空っぽの巣症候群』は、障害者の母親さえも家庭から外の世界へ出てゆく夢に駆り立てるようです。夫や4人の子どものために何年も色々な夢の筋書きを書いて来たので

すが、子どもたちが成長してしまった今、私と同年配の多くの女性同様、これまでとは全く違うであろう将来に直面しています」

「何年もの間コロラド総合病院で車椅子の生活をし、うちひしがれ、お先真つ暗な将来を思い悩んでいた時から（その病院では、亡くなった『ポリオの皇后陛下』Anna Brownに『なんで泣きはらしているのよ。あなたには、家に帰って欲しがってるご主人や4人のお子さんがあるじゃないの。』と諭されました。）自分のおもちゃ屋を持つに至る今日までの23年間というものは、新しい発見の驚きに満ちた長い長い旅でした」

「家族みんなが私と一緒に背負って来てくれたこのポリオ、この障害は、破滅に見せかけられた神の恵みなのだという確信を得たことはあたかも奥深く埋もれてた宝を発見したような驚きです。けれども、もし神様が雲を貫いてその指を指し示し、その轟く声で『子どもよ、よく聞け。今日はお前に良いことをしてあげよう、お前はポリオにかかるのだ。』とおっしゃるなら、私は誰よりも先に、『なんで私が』といやになるほど叫ぶでしょう」

「こうして生き抜いてきた今、この到達点から過去を振り返ってみると、夫や子どもたちと一緒に、何とか、多くの家庭を崩壊させた大変な時代を通り抜けてきたことが判ります。たぶん私の家族の場合は、私がポリオであることが緩衝装置として働き、また私がポリオであることがみんなの重大な関心事となって家族の間の接着剤となり、家族の団結を強め、重要なものは何か、それは簡単なことであるという考えを私たちに植えつけてきたので、みんなが生き抜き繁栄してこられたのだと思います」

「洋服の洗濯も、アイロンかけもできない、夕食も作れない、家もきれいにかたづけられない、という半人前の母親であることをもう何年も気に病んでいます。私はいわゆる逆さまのポリオ（上半身の方が強く冒される）のため、23年間というも家族のために何の役にも立ちませんでした。今思うと、骨折り仕事は何もやらなくていいわけですから、子ど



お孫さんと遊ぶ Mary Ann Hamilton さん。  
玩具店経営。「『空っぽの巣症候群』は障害者の母親さえも、色々な夢に駆り立てます」

もたちを見守り、話していることに耳を傾け、守り、導き、そして愛することにいつも一生懸命だったのです」

「子どもたちも育ち上がりましたし、この30年間結婚生活もずっとつつが無く過ぎていきます。妻として、母として落第だと嘆いては、どうしてあんなに涙をこぼしてばかりいたのでしょうか。一旦やる気になると、私の勇気を信じる必要のある者が私のまわりにいることに気がつきました。そのことに気づくと、もう自分を愛してくれている者たちをがっかりさせるようなまねなどできなくなりました」

「もし洗濯も服の糊付けも、失敗しかけたケーキを手早くやり直すこともできないとしたら『余った』時間でいったい何をしたらよいでしょう。かびがはえ、ほこりがたまってゆくのをずっと見ていると、そのうちにそんなことはどうでもよくなってきます。それで私はコンテストに出てみることにしました。

（美人コンテストではなくて、25語以内で書くコンテストです。）タイプをマウススティックで打ち、出したところ、副賞としてヨーロッパ旅行が当たり、息子を旅行させることが



できました。そのうちに、タイプを打ってコンテストに出すと郵便屋さんが褒美を運んで来るというのが毎度のことになりました」

「ある日、私たちの近所に住んでいる物を書いている方が、お骨折り下さって私を Monaghan 呼吸器と一緒に作家会議へ連れて行って下さいました。私はコンテストの方はやめにして、図書館中の文章の書き方についての本を読み漁りはじめました。はじめて私の書いた記事の原稿料が届いた時の達成感と言葉では言い表わせません。夫や子どもたちの目をみて、みんなが私がどう感じているかちゃんと知っていることが判りました。「えっへん！完璧なパイなんかやく必要はないわ」と、私はみんなを夕食に連れ出しました。「誰かに食べさせてもらわなくちゃならなくなっただかまわない。私は作家なんだわ」という歌が心の中で聞こえて来ました」

「月日は流れ、発見の驚きの旅も続きます。もしどなたかが私に長生きして子どもの順調な成長を見届けることができると言って下さっていたなら、また、どなたかが、3人の孫たち（もうすぐ4人になります。）を見るまで生きていて下さっていたなら、それ程一生懸命お祈りもせず、死んでしまっても埋葬されていたかもしれません。まだ赤ん坊の孫たちが、ぼちゃぼちゃした手でぐちゃぐちゃのクッキーを口に入れてくれるなんて何と嬉しいことでしょう。でも、この子たちの髪のもつれたおつむに触わりたくても触われないときには、心がじわじわ痛んできます。けれども私は子守り歌を歌うこともできるし、孫たちも私のしわがれ声が好きです」

「もし年老いたポリオ患者の夫が死んで自動的に天国へ行かないとしたら、神様のどこかがおかしいと思います。私の夫は何年間も忍耐強く私の揺れ動く心を気もちよくがまんしてくれました。私のお金儲けの企ても、夜明けまで書こうとする私を咎めもしませんでした。私が夢を託す企ては、私にとって精神の萎縮を防ぐ精神の美容体操であり頭の体操だということに気づいています。朝ベッドの中に座って、誰かが来て私を『殻』からはず

して補装具に結びつけてくれるのを待ちながら事業のことを夢みて考えるとほんとうにくつろいだ気がします。巢が空っぽになったためにできた虚しさを埋めるための事業です」

「実際にはありそうもないことを夢みることに強い力があるに違いありません。私の思いついた事業は、今や現実となり、毎日忙しく、次々と色々なできごとで一杯の生活を送っています。去る4月に娘たちと一緒に、

『おばあちゃんのおもちゃ天国』という古物おもちゃ屋を開店しました。私たちは質の良いおもちゃを売買しています。孫たちが生まれはじめ、おもちゃがうなぎのぼりに高くなっていることがわかって、このことを思いついたのです」

「ほかの人々の経験の蔭から何年もの間世界を覗いてきた私にとって、家から外にでてビジネスの世界に入ることは、とても楽しいことです。今だに、娘の車が家のドライブウェイに止まっても、お弁当と Bantam 呼吸器を持って仕事に行くのだなどと信じられません」

「私の世界は、壊れやすくも美しい泡のように、広がってきました。これより良くなるとはとても思えません。家族がこれ程気を配ってくれているのに、たとえ障害のある妻であり母親であっても、この障害さえなければなどと泣いたりできるでしょうか。もちろん独立して一人で何でもやればよいでしょう。けれども、私にはこれがあるのだからとそんな望みはすぐ捨ててしまいます。私には、破滅から出てきた純粋な愛情で団結した家族があるのです」

「8月30日に、エドと私は30回目の結婚記念日を祝いました。頂いた贈り物やカードの中に、これまでに頂いた何にも勝るカードに書かれたことばがありました。それは子どもたちから『お父さん、お母さん30周年記念日おめでとうございます。私たちはお父さんとお母さんが大好きです。ほんとうにおめでとうございます。私たちをこれまで何年も暖かい気持ちで励まして下さったことを感謝します。愛をこめて。お父さんとお母さんのクル

一より。』と書いてありました。』

「歌の文句のとおり、『これ以上のことを誰が望むことができるでしょうか。』」

## 在宅サービス

所得税に関するサービス（1955年16歳以来ポリオによる四肢マヒ。）

「絶対できないことについては、私はくどくど言ったりしません。ただ折にふれ、そういうことについてできる可能性があるかどうか考えはしますけれども。時代は変わるし、10年間にはとても考えられなかったことが今日では可能です。これから10年、何が起こるか誰にもわからないのです。』 Toni Gaffney, 1407, North Hewett Street, Neillsville, Wisconsin 54456

「高校は2年間家庭教師について勉強して終え、それから法律の通信教育の3年コースを2年間やりました。H & R Blockの税務コースもやりました。現在、結婚式の招待状を売り、所得税の申告準備サービスをしています。母と一緒に暮らし、家で仕事をしています。』

「私はボランティアとして社会奉仕サンタクロース・ショップの会計係もやっていますが、これはこの国の恵まれな子どもたちにクリスマス・プレゼントを送る団体です。私はまた、ウイソコンシン・ウォービック連合活動クラブの会員にもなっています。』

「私は車椅子、手の装具、食事補助具、手の開閉のため足で操作できる電線装置、それにマウススティックを使っています。流しの水を出したり閉めたりは、蛇口についた特別装置でできます。手紙は、電池式開封器で開封できます。アマチュア無線のボタンは、マウススティックで押して、つけたり消したりします。』

「電話をかけるときは、第3の腕と呼んでいる動く腕を持っているので、それが受話器を適当な高さに支えます。ボタンの上の装置

で受話器を取り上げたり、切ったりできます。ダイヤルを回すのは短いマウススティックでやります。』

「タイプは、マウススティックと左手の補助具で1分間に20ないし25ワード打ちます。マウススティックと左手をちょっと使って自分で用紙をセットします。テレビをつけたり消したりもマウススティックでやります。アンテナは床の上に置いてあるので足で操作します。電気をつけるときは足で、消すときはマウススティックでやります。表のドアの開閉は、近頃手に入れたばかりのドアの取手につけた装置 Dow-Knob を使います。』

「香水のスプレーはあごで押しますし、髪をとかしたり、顔を洗ったり、クリームをつけたり拭き取ったりも自分でします。におい袋や香水も使います。』

「今挙げたことが、だいたい自分でできることです。大きなことも、小さなことも、自分のできることを書いてみて我ながら驚いています。器具がなければ、今挙げたことのどれ一つもできないわけで、こうやって色々できることをとても嬉しく思っています。正しい器具を使えばどんなことができるかお解りになるでしょう。私には腕や手の筋肉はほんの僅かしかありませんし、あまり役にも立ちませんが、実際には筋肉はそう色々なくてもいいのです。』

「私のできることをもつと良く考えてみると同時に、私のできる範囲内で物事のやり方の工夫をしてみたいと思います。絶対できないことについてはくどくど考えません。ただ折にふれては、できないことができるようになる可能性はどうか考えることはします。時代は変わり、10年前にはだれも考えなかったことが今では可能です。これからの10年、何が起こるか誰にもわからないのです。』

電話インタビュー／テレビ・モニター（幼児期に発病。リウマチ性関節炎。）

「成人障害者の問題に関する専門家への問い合わせはかなり消極的なものがあります。』  
Joan Younger, 3939 Roland Avenue, Apt.

517, Baltimore, Maryland 21211

「7歳から12歳まで病院にいましたが、自分を不幸に感じ、混乱を増すばかりでした。家族との生活では、常に『追いたてられる』以外の何ものでもありませんでした。」

「高校卒業後、私はビジネス・スクールへ行きました。移動が大変になるまでは、事務員やキャッシャーとして働きました。」

「身体障害者のカウンセリングと照会のサービスを行なうためアメリカ身体障害者協会という会社をつくりました。その後ボルティモアに移り、アパートで一人暮らしをしました。そして保険業者のところで働きましたが、その2年後に自動車クラブで働く障害者の人と結婚しました。」

「私は皮膚潰瘍のため在宅の仕事を見つけることを余儀なくされるまで、職業訓練師とインタビュアーとして働きました。これまでのどの仕事も自分で捜したものです。というのは、ここの職業リハビリテーション局は、家庭でできる仕事についての紹介サービスはしていませんから。私はいっしょにインタビューとモニターの仕事ができるように、他の在宅障害者も訓練しました。」

「時として、成人障害者の問題についての専門家への問い合わせは大変消極的なものがあります。あまり気にしないようにと言われるだけです。というのは、専門家の方は、私が何とかするだろうと思っていらっしゃるせいでしょうが、せいぜい注意深く聞き、問題をはっきりさせただけで行ってしまわれるのです。そんな時には私は彼らに論文の材料を提供しただけのような気がし、うんざりした感じだけが残ります。」（訳 安藤幸枝）

## 教 師

美術教師／相談サービス係（1944年24歳の時以来ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ）

「過去20年間は素晴らしい年月でした。創造する事で人生を耐えぬいて来られました。

芸術療法はもっと重要視されるべきだと思います。今こそ私達も他の世界に参加する時です。」 Theda A. Carle, (531 Bellevue East, #107, Seattle, Washington 98102)

「本誌ギャゼットとの20年間は、私の人生の中で最高の20年でした。その前の10年間は病院の鉄の肺の中で過しました。

その次の3年間は、夫は無く息子二人と、旧式な呼吸装置、それに無一文という困難な生活でした。

過去20年間は、お金はありませんでしたが素晴らしいものでした。息子達が大学を終えた時、私は普通の美術の道を変えて、商業美術をもう一度勉強しはじめました。でも商売の世界ではとてもたちうち出来ないと分かったので、その代り縫ったり、紡いだり、織ったり、又それを人に教えたりしました。この創造する喜びのおかげで、人生を耐えて来ることが出来ました。私は芸術療法は重要視されるべきだと思います。私は今年の国際司会者クラブ(International Toastmistress Clubs)の相談サービス係になりました。

私は他の人達の問題についていろいろ考えてあげることが出来ます。私は、婦人身体障害者を援護する会(Task Force on Concerns of Physically Disabled Women)によって編集されている、「力を合わせて大きく伸びよう」(Toward Intimacy and Within Reach)という本でインタビューされました。それと、教育テレビ番組の「都会の顔」(Faces of the City)というシリーズの、一人住いという中で主題にされました。

私は家事手伝いとして作業療法研究生に手伝ってもらっています。それによって私はとても助けられますし、その人達もいろいろ認識を深めてくれます。私は一日に10~12時間ハックスレー呼吸器とトムソン呼吸器を使用します。そして車椅子を使用しますが、少しは立つ練習もします。

延髄ポリオの私達は、障害者の独立生活のためと、高齢の障害者のためのホームとして、グループホームを作ることを積極的に考えています。





Theda Carle, 美術教師

「創造するということで、生きることに耐えて来られました。」

医学校や準医学校がこの方面で大きな助けになることが出来ると思います。アメリカ西北部では、障害者とのいろいろな運動が盛んです。今こそ私達も他の世界に加わる時だと思えます。」

州立刑務所の聖書研究教師（リュウマチ性関節炎のため1942年以來の障害者）

「3年以上前に私はキリストを受け入れました。そして2年程前、キリストは私に夫を授けてくれました。」 Hannah Clark, (2175 Liberty Street, N.E., Salem, Oregon 97303)

「私はちょうど両股関節と片方の膝の関節を取り換えてもらったところです。私は車椅子と、歩行補助具と、足の補装具を使用しています。腕は弱いのですが、今歩けるように努力しているところです。」

私は高校教育を受けた後、両親の助けを借りて大学に行きました。そしてウイラメット大学でドイツ語と哲学の学士号を貰いました。

3年以上前に、私はキリストを受け入れました。そして2年程前、キリストは私に夫を授けてくれました。ケニーと私は、ある聖書研究会で会いました。彼はオレゴン州立刑務所の電気技師でしたが、今は障害のため引退

しています。私達は自分達の持家に住んでいます。

今私達は神につくしたいと思っています。州立刑務所の聖書研究会で教え、そこで私達は相談所も持っていますし、又私達の行く教会の日曜学校でも教えています。

私達は二人共、戸外でのいろいろな楽しみを持ち、自然を愛し、石集めや写真を撮ったりして喜びを共にしています。私は又、読書や絵画も楽しんでます。」

美術／刺繍教師（1950年25歳以来、ポリオによる下肢マヒ）

「私は49歳の障害を持つ女性が車椅子に乗って、どのように男性とデートをしてきたかを「車椅子の性」という話にまとめて書きはじめました。」 Ursula G. Day, (Route 2, Box 478, Buckeye, Arizona 85326)

「私は1924年ドイツのベルリンで生まれました。父は強烈な反ナチ、反共産主義者でした。父は社会民主党員でした。私は第二次世界大戦の中を何とか生きのびました。私は青少年ナチ党に入党することを拒否したので一年間労働キャンプで過しました。キャンプを出て私は軍属として空軍に徴用されました。」

1944年に骨髄炎のため6ヵ月入院しました。そして両足の手術を受けましたが、その時危うく右足を失うところでした。米軍の占領期間中に会った男性が、1947年に私をドイツ人戦争花嫁としてアメリカに呼びよせてくれました。3年後に私は小児マヒにかかり障害者になってしまいました。その時25歳で2歳の娘がいました。1957年、夫が心臓マヒで亡くなりました。私は車椅子の身で、お金もなく、抵当に入った家と、育てなければならない9歳の娘を抱えてとり残されてしまいました。」

社会保険と軍人恩給でぎりぎりの生活でしたが何とか切り抜ける事が出来ました。偶然成人教育プログラムで美術と刺繍を教えるパートタイムの仕事が見つかりました。学校内の建築上の障壁は大変なことでしたが、教えるという事は、私にとって神の救いでした。

次の10年間は自分の仕事と娘を大学までや



Ursula G. Day, 美術／刺繍教師

「『車椅子にのってのデート』を説明するために『車椅子の性』という題で本を書きはじめました。」

ることに全精力をつくしました。その間私は希望はあったのですが実際にデートをする機会は全くありませんでした。障害を持つ女性は閉鎖的な態度も災いして、望ましい男性とめぐり会うことはとてもむずかしいことだと分かりました。

1970年、私はカリフォルニアの国際障害者大会に代表として行きました。その頃までには自分の相手を探すことなど諦めていました。ですから私はアリゾナのフェニックスから来たという魅力的な年配の車椅子の男性に会うまでは、自分の生活だけのことを考えていました。私はすっかり彼に惹かれてしまいました。その年の秋、10日間彼の所を訪れ、そして私達は婚約しました。娘はミネソタの大学を卒業する予定で、そしてすぐ結婚するつもりでした。娘のことは安心でしたし、私はこれで親としての務めも果したので自分のやりたいことをしてもいいと思いました。

しかし、私達の結婚はいくつかの理由のため、とても悲しいことには、心に深い傷手を残して1974年離婚に終わってしまいました。

今や私には切り拓いて行かなければならない人生が待っていました。私は一人でアパー

トに住むようになりました。自分の身の不運を嘆き悲しみながら、年寄りと身障者のためのアパートの一室でしばらくじっと座っていた後、私は地域のお見合いグループに入りました。そして離婚問題調整クラスに出たり、アリゾナ州立大学で対人関係のコミュニケーション研究コースをとって勉強しました。私は49歳の障害を持つ女性が車椅子でデートし、いかに生きて来たかを説明するために『車椅子の性』という題で、自分の話を書きはじめました。

やはり、デート無しの日々、そして老いて行くということは、時にはとても恐ろしいことでしたし、又時には大変学ぶことの多い日々でした。とにかく、その繰り返しの毎日毎日がすべて勉強でした。それから私は、ある男性と親密な間柄になりました。しかし彼の致命的な心臓発作と、宗教上の理由で私達の関係も終りとなり、私はもとの逆戻りで又新しい生活を探しはじめました。

1975年の7月になる迄私は、初めての経験だから車椅子の女性を誘ってみたいという男性ではなく、デートの相手として私を連れて出かけてくれる素適で誠実な男性を見つけることなどほとんど諦めていました。その頃、私はもの静かで、背が高く、やせて足のひょろ長い男性に会いました。私達は始めから普通とはちょっと変わった関係でした。彼は町から遠く離れた砂漠に10代の息子と娘と一緒に住んでいました。家には何の設備もなく、テレビも電話もないし、近くには人影も見えない所でした。でもまわりは自然と平和が満ちあふれていました。

私は週末をここで過ごすようになりました。そして去年の11月、私の心臓発作以来ずっとここで過しています。彼の息子は引越しました。リーと私は毎日町へ仕事に行きます。週末には家の仕事をします。健康上の理由で私は引退しなければなりません。人里離れた砂漠の中で、私はいくらか自分の力をとり戻すことが出来たようです。それにやっと心の平和も。

本当にいろいろな事が起った半世紀に亘る

人生でした！

私の一番大きな問題は、実行家だということです。他の人達がぐずぐずしているのをじっと座って待っていなければならないとか、私の考え方からは全部だめになってしまうと思われることを人がやるのを見ていなければならない時等、私は入り込んで行って、やってしまいたくなります。

小児マヒになる前は、自分の余分なエネルギーや欲求不満は、たくさん歩きまわったり、一生懸命働いたり、自分自身を消耗することで発散していました。私の熱情的な性格は、自分の中にある余分なエネルギーから来ていると思います。どうやってそのエネルギーを消すか、又は小さくしたらよいか、私には分かりません。他の障害者の人達はどうかやって自分の余分なエネルギーを使い、消耗し、発散したり、救いを見出したりしているのでしょうか。どうぞ教えて下さい」

パートタイムの英語教師／ボランティア  
(1954年、9歳の時以来小児マヒによる四肢マヒ)

「私はパートタイムで教えることだけでは自分の生活を維持することが出来ません。しかし、何かの扶助金を貰うには多すぎる給料をもらっているのです。もしも働かなければ、扶助金だけではやはり生活が出来ません……しかしある公共の施設に入れば、生活に充分なお金がもらえるのです。」 Cass Irvin, (1604 Beechwood Avenue, Louisville, Kentucky 40204)

「私は1968年、英語の学士号をとりました。1973年、両親の家から出て、住込みの介添人と一緒に住むようになりました。1974年に英語の修士号をもらい、ジェファーソン職業学校でパートタイムの教師として今の仕事を始めました。

1975年の夏に私は、積極的に障害者問題にとり組む決心をしました。私は自分がどんなに一生懸命働いても、経済的には決して自活できないということが分かりはじめたからです。私は体力的にスタミナがないので、自活

出来るだけの分を稼ぐために必要な時間を働くことが出来ないし、自分にかかる費用（例えば、介添人、特別な交通輸送、器具その他）全部を稼ぐことは出来ません。私の家族はいつも私に来る請求書の多くを支払わなくてはなりませんでしたし、両親亡きあとの私の経済的保証を用意してくれようとしています。

これらすべてに私は腹が立って来ました。それに私の独立生活を営むための唯一の解決策である住込みの介添人を探すことがとても大変で時間がかかることを考えると腹立たしくなります。(独立するというこのために自分の生活のすべてを他人に頼らなくてはならないとは何と奇妙なことでしょう！)

私は車椅子でものぼれる古いアパートに住むことが出来、それにやさしくて親切な介添人に恵まれて幸運でした。経済的独立（これは両親のおかげで）と社会的独立（これは自分の努力の結果）を得て身を落ち着けた私は、何か他の方法で扶助金を貰えないかと探し出すことにしました。父はちょうど引退しようとしていましたし、私を養って行くことは出来るといっても、生涯を通しての扶養ということはやさしいことではありません。私の運は傾いて来ました。私はパートタイムで教えるだけでは自活出来ないことが分かりました。でも何かの扶助金を貰うには多すぎる給料をとっているのです。しかし私が調べて分かったことは、公共の施設に入れば充分な生活費が貰えるということでした。

このような矛盾したことは私にはどうしても不合理だと思えましたので、何か道理のはっきりした答を見つけようと思いました。又同時に、この問題解決について一緒に働いてくれる人を探しました。この問題は、掛かり合えば合うほど不合理なことだらけだということが分かりました。例えば、たった4ブロック先の仕事場へ行くのに巡回バスは市内を一時間半もかかって廻り、やっと送り届けてくれるとか、又（住込介添人を手助けするための）家事手伝いの人には一時間6ドルもかかるし、障害者専門の相談員のいる州の職業安定所には、車椅子では入れないお手洗いしか



ありませんでした。

私はこの問題に真剣に取り組むことを決心しました。私は、成人障害者活動連盟 (Action League for Handicapped Adults-ALPHA, Inc.) の役員になりました。でも、障害者の市民としての権利に関してはもっといろいろな手がうたれなくてはいけないのに、連盟があまりたくさん仕事を引き受けすぎて役立たずになってしまっているのを見て私は常に不満でしたので、結局役員を辞めてしまいました。

私はここルイビルで、体験者として、身体障害者の問題に焦点をあてている、障害者運動発起人会 (Prime Movers, Inc.) という相談機関で、プランや企画準備などを手伝っています。私は今役員会の副会長です。私達は今、共同生活体の計画や決定のために皆が集って検討出来る場所として総合情報図書館を作りはじめようとしています。

私はジェファーソン職業学校 (Jefferson Community College) の大学公開講座で“目につかないアメリカ人、又は障害者運動の必要性”という題で講義をしました。

不幸つづきのあげくの果に、私は、結局戦いは自分のものであり、戦いの理由は正当なものだということを確認しました。なぜならば、もし障害者が差別待遇されることがあるとするならば、他の誰であるにしろ、例えば背の高い人、低い人、肥った人、やせた人、子供を七人持っている人達にも何らかの差別があるはずで、それは自由と平等と正義のこの国において、何と不合理なことでしょう。だから私は、積極的にこの問題と戦っているのです。簡単に云えば、もし自分が問題解決に一つの道を開かなければ、私はただ問題の一つでしかないのではないのでしょうか。まず自分自身が問題解決に乗り出さなければならぬということですよ。

大学講師 (1954年11歳以来ポリオによる呼吸器と四肢のマヒ)

「障害を持つ女性として、自分の生活体験と自分自身の確認についていえば、私は何と

なくあいまいで自分自身の気持がはっきりと分からないのです。」 Clair Jo Schnitz, (2114 Arizona Avenue, El Paso, Texas 79930)

「私は人生のほとんどを呼吸補助器を胸に乗せ、又リクライニングの車椅子に支えられて過ごして来ました。この身体的に限られた状態は時折りいらだたしい感情障害をひきおこしました。でもそれは私の精神や感情、そして理性の発達に対しては本当の意味での制約ではありませんでした—ただ愚かにも自分でその限界を認めてしまった時以外は。

ヒューストンでの約一年の入院とリハビリ訓練の後、私は、自分の身体の状態に慣れるようにそして在宅学習で初等教育と中等教育を受けるために、又、私が兄姉達との遊びの中で成長出来るために家に帰って来ました。私の生涯で最も輝かしい功績である高校の卒業証書を手にして、私は自分の小さなひと隅に閉じこもり、空想にふけり、本に没頭し、そして世界が私の方へやって来てくれるのを待ちました。そのようにして私は8年間も無駄に過してしまいました。

幸い、私の事を心配してくれたりリハビリテーション・カウンセラーが私を活動するようにと、やさしく誘い出してくれました。

1966年私はやっと自分の殻から這い出しはじめました (勿論、比喩的にですが)。私は電話によるテレビの調査の仕事をはじめました。この仕事を2~3年した後、私は小さい子供達を教えるための勉強をすることを決心しました。それで、通話装置付電話で大学の勉強をはじめました。最初は、ここの学区の教員名簿に自分の名前を載せる資格をとるのに十分な単位時間数をとる考えでした。

私はこの決定を9年前にしたのです。そして現在の私があるのです。—英語の学位をとるのにあと6単位を残すだけになりました。最後の何コースかに全力を注いでいる間にも私は又、英語 (主として作文能力) の家庭教師もしています。生徒のほとんどは、大学の1年か2年生です。英語を教えながら、私は他の科目も教えるようになりました。例えば、英語を母国語とする人達にスペイン語を教え

たり、読み方に問題がある人達に読書矯正指導をしたりします。

私は両親と住んでいて、ここ2～3年は常時住み込みの介添人がいます。(父がその人達の給料を払ってくれました。)ここではスペイン語を話す家事手伝人を探すのは簡単です。私はオースティンのテキサス大学の通信講座でスペイン語を勉強し、今ではほとんど2カ国語を話すことができます。

介添人の世話のおかげで私は成長し、精神的にもとても大きくなりました。今迄の長い長い期間、私の素晴らしい母は自分で私の面倒を見てくれ、全て私のことは責任を持ってやってくれました。今は私がそれを引き受けてやっているのです。実際に私はいろいろな種類の新しい独立を発見しました。そして自分の変化によって、私と両親との関係ももっと素晴らしいものになってきました。

勉強と、教える仕事に加えて私は最近口で水彩画を描くことをはじめました。とても面白いのですが今のところは、ばらの小枝位に限られています。それから、これはとてもむずかしい事なのですが、私は又、書くこともはじめました。書くことは肉体的にも精神的にもとても疲れる仕事で、しかも売れないで返されて来た時はとてもがっかりしてしまいます。

おかしく思われるかも知れませんが、この2～3年の間で私が一番自慢出来る事は登録された自分の小切手を持っていて、誰かに頼まなくても自分でサインして(独学で)全て支払いが出来るようになったことです。私は銀行の手続きは全部電話か郵便でします。買物をする時は、銀行を通して自分の信用で買うことができますし、どこでも使えるクレジットカードも持っています。

障害を持つ女性として、自分の生活体験や自分自身の確認について述べれば、私は何となくあいまいで自分の気持ちがはっきり分からないのです。身体的に頼らなければならないということは、特に私をかばいすぎる傾向のある両親との間では、多くの問題をひき起します。でもこれは、打ち破れない障害だとは



Clair Jo Schnitz, 大学講師

「今日、障害を持つ女性は、女の世界の中にある二つの道のうち、どちらかを選ぶ自由を持っていると思います。」

思いません。私は時々年上の男性生徒から反抗されることがありますが、それは障害者だからというのではなく、むしろ女性だからだと思っています。そのような教える時の障害は簡単にすぐ克服してしまいます。

率直に云って、今日、障害を持つ女性は、女の世界の中の二つのタイプのうちの一つを選べる自由を持っていると思います。一つには、身体的に絶対頼らなければならないという現実を受け入れて、女らしく生きるか、女性も平等を勝ち取るために戦っている時代に生きる者として自立を目指して生きるか、のどちらかです。又は、その両方の中間に、自分で満足出来る調和を見出して生きて行くかです。」 (訳 染矢朝子)

## ボランティア

秘書/事務官 (1918年、13歳の時トランボリンの事故でC4-5の四肢マヒ) 「ある

がままの人生と事実と直面すること、そして、残されている能力で最善を尽くすことが、非常に重要な事だと思うのです。」 Chantal Fouche, 112 Fifth Street, LINDEN 2195, Johannesburg, Republic of South Africa

「四肢マヒ者として生活して行くことは、時として困難なこともあります。「受容」という言葉は、私にとって存在しないと思っています。けれどあるがままの人生と事実を認め、残された能力で最善を尽くすことが大切なことだと思います。」

「私は現在、南アフリカの四肢マヒ協会の渉外事務官をしています。又季刊新聞の編集をうけつつ広報小委員会の役員でもあります。この協会の会員数は、400人の健常者と200人の四肢マヒ者です。」

ボランティア担当事務官（脳性マヒによる下肢マヒ）Lois Sachs Johnson (Mrs. R. W.), 328 Cumnor Avenue, Glen Ellyr, Illinois 60137, 「私の生涯を通じてのこの不自由さから、良い経験もいやな経験も味わっています。一番いやな経験は態度に関することです。」

「はっきりとした順序を作ってみれば、まず第一に私は私自身、Lois Sachs Johnsonなのです。次に娘、姉妹、妻、母、2つの学位を持った教授であり、時として怒っている女であり、騒々しい旅行者、音楽を愛する者、どん欲な読書家なのです。私は沢山たべます。だけどたばこはのみません。どうしてかという、どうやって煙を肺まで吸い込むのか判らないものですから。同情的なもの、官僚的なものを除いて、私はいつでも、何でも楽しんでます。他人の言葉をかりれば、私はCPという不自由な身なのです。」

「私達は結婚してからもう20年以上になります。当時生後8週間だった赤子を公認の施設から紹介してもらい養女にしました。今住んでいる所は3つのアパートと2つの家を改造したものです。私は成長するに伴い何でも適応出来ると思いますけど、主人は少しむづかしいのではないかと思います。」

「私は障害のある人々によって運営されて

いる組織には参加していません。ですが私は3つの異なった委員会には出席していますし又、州の知事議会の議長もつとめています。私は、ただ私が有効的に仕事が出来ると思う限りにおいて委員会や組織に参加することにしています。もしも私が働らくことが出来ないなら、彼等は私を必要としないでしょうから。」

「過去20年の間にテレビ、ラジオに出演しましたし、又、新聞社からのインタビューも受けています。少なくとも5人、多くて500人からの前でスピーチなどもしています。」

「現在、私はアディソンにいる障害者のためのレイグラハム委員会の役員でもあり、副議長もつとめていますので一つの組織を見つめ参加することの喜び、楽しみを味わっています。4年前に始めた時は、知恵遅れの人々に援助の手をさしのべるだけでしたが、今は発展していろいろなサービスの出来る組織になりました。つまり障害を持ったり、もしくは知恵遅れだったり、情緒障害のある赤ちゃん、子供、思春期の人たちを対象としています。このRGA (Ray Graham Association) は、1日およそ600人以上の人々に5~6時間から24時間に至るサービスをしています。1977年10月、私達にとって初めての独立生活を送れるセンターの着工を行ないました。そこは主として整形外科的障害のある大人のCPの人達が暮せる7つのアパートからなる建物になるはずですが。この計画を実行するに当たりHUD (住宅供給公社) からイリノイ建物建設本部 (Illinois Housing Development Authority) に許可があり、私立の代理店に責任が移されたために実現の運びとなったもので、アメリカでは初めてのものなのです。」

一生続く障害のために良い思いもいやな思いもしました。一番いやなものは態度に関するものです。私は専門職 (社会学, リハビリテーション, 管理学) としての仕事を持っていますが、又途方にくれることもあります。というのは私に「おどろかさなさい下さい」とか「判りますか」という人々に我慢しなければなりませんし、又人々の気持も理解出来



るからです。おそれをかくしている人は後でより大きな脅迫になりますし、又私や私達にとって危険な人物にもなっていくのです。扉を開き人々と会うのは私自身のやり方だし、又そうしなければいけないと思うのです。それは私の障害のためでなく、私か何であるか、何をして来たか、何が出来るかというためなのです。」

「医療的な職業は一つの事、つまり「治る」ということに方向づけられていると思うのです。治らない人、おびえる人をなくすためには団結を強くすることだと思ふのです。又、医療を受けた後、生活へ、自分自身へ、家庭へともどる時、保険や、書類によって、保障されない偏見なども、まだまだあります。障害者を雇おうとする時、テレビ・ラジオ方面や、大会社など含めまだまだ始めての分野もあります。いつの日かそれらすべての事がととのわなければならないと思うのです。」

「障害を持った女性であるが故に、いろいろの場所に、人より早く着くこともあります（ツタンカーメンの旅行しながらです）。例えば飛行機に早目にのせてくれたりします。5月には気狂いじみたホワイト・ハウス会議にもまき込まれました。障害を持った女性であることは同時に、欲求不満になることであり、時間がかかることであり、いらいらすることです。障害なしでやっていければ、その方がいいのです。」

ボランティア／子守りをする祖母（49歳の時外科的処置で四肢マヒ）「私は3年間娘と暮し、今は息子の家族の一員です。始めて私が参加したのは、私達の地方の健常者と障害者の組織（Able-Disabled Organization）でした。」Gag Lineberrg, RN, 2335 Dorn Road, Augusta, Georgia 30906,

私が四肢マヒ（不完全）になったのは、C-6を含むC-7からT-2にある二番目の良性腫瘍とのう腫を除去する3回目の手術をした時です。それまでは看護婦として働いていました。

私にはすばらしい子供達と4人の楽しい孫

たちがいます。私は3年間娘と暮し、今は息子の家族と暮しています。理解ある彼の妻は私の活動を応援してくれています。

当然子守は私の仕事で両方の家庭で楽しくやっています。読書、手紙書き、障害者としてたえず増大する興味は私を刺激します。12人の仲間と共に1973年に健常者と障害者の組織が発足しました。家族や他の人々の助けをかりて会のまとめ役や、議長を2回したり、活動的なこのグループのために今は新聞の編集をしています。この組織は今や300人になり4頁の月刊新聞も発行しています。編集の一員として、プログラムの責任者として発送係として忙がしくすごしています。

この組織はボランティアとして私にとって初めての参加でした。私達は建築上の障壁、態度に関する障壁も直して行こうとしています。私達のスローガンは障害者として考えないで、健常者—障害者（Able-Disabled）として考えて行こうということなのです。」

（訳 竹中滋子）

## 作 家

詩人（脳性まひにより30年間四肢まひ）

「人々がおまえを見るからといって気にはしてはいけない。おまえは皆と同じなのだよ。おまえは、おまえ自身であることに価値がある。たぶん皆はおまえを賞賛の眼差しでみているのだ。というのは、いままでおまえのように外出して他の人と同じように生活している人を見たことがないからだろう。」 Gabriela Brimmer, Alfonso Caso 36 Bis/Casa C, Antes:Las Flores, Tlacopac, San Angel, Mexico 20 D.F. MEXICO

「私達が旅行していて、食事のために立寄ったところで父が言った言葉を照れくさいながらも思い出します。レストランにいるだけもかれもが私を見ました。というのは私が車椅子に乗っており、自分で食べられないので食べさせてもらっていたためです。人々が好

奇心と同情の入り交った目で見ているのに気づいた時、私が思いつくことができたのは、食べるのをやめることでした。観察の鋭い父は私が食べるのをやめたことに気づいて、どうしたのか尋ねた後で、こういいました。『娘よ、人々がおまえを見るからとって気にしてはいけない。おまえは皆と同じなのだよ。おまえは、おまえ自身であることに価値がある。たぶん皆はおまえを賞賛の眼差しで見ているのだ。というのは、いままで一度もおまえのように外出して、他の人と同じように生活している人を見たことがないからだろう』父は私の頭をなでて、食事をするように促しました。』

「父の言葉はずっと私と共にあり、自信をなくした時にはいつも思い出しています。」

「私たち身障の女性にとって、生活は難しいものです。でも自分自身の徳と私達のまわりにいる人の徳とで、より不愉快でない、より困難でないものにするよう努力する必要があります。どうやって？生活に勇気を持って立ち向かうことで、他の人々と共に私達自身について考えることによって、家族の過保護によって制限されないようにすることによって、どんな小さなことでも自分に出来ることはすることによって、共通の利益のために他の身障者と連帯することによって、社会に私達の権利を知るように要請することによって、身障の女性は他のだれとも同じくらい重要であることを表明することによって。私は私自身の経験から、目的を達成しようとする前に時々、私達に課せられた制限のために失敗することがあることを知っています。しかし、こんなに制限を持っていない人がいるでしょうか。毎日の闘いは私達に榮譽を与えてくれます。貧乏とは何も戦うものがない人のことです。」

フリーの作家／引退したビジネスウーマン  
(1956年40歳のとき以来ポリオによる四肢マヒ)

「ポリオやその他の類似の障害をもたらす病気は悪いことばかりではありません。私は多くの慰めを見出ししてきました……人生の

外側に座っていると、人生というゲームについて、もっとよく観察することができます」

Enid de Groot P.O.Box2394, Bulawayo, Rhodesia

「私は新しいソークワクチンが導入される前の1956年、ローデシアで最年長で最後のポリオ脊髄炎にかかった人になるという有難くない特徴を持っています。Bulawayo 伝染病病院に危篤状態で入院して1カ月もたたないうちにワクチンの第一便が到着しました。私には間に合いませんでしたが、5人の子供たちには間に合ったようで、恐ろしい病気から逃がれることができました。夫は2年前に失くなり、私が子供たちの唯一の保護者でした。4人は学校に行っており、5番目はたった3歳で保育園へ行っていました。」

「私は尻と腰と右腕と左足のひどいまひになりました。あの頃は治療法はただ毎日30分のマッサージとBalkar 梁からつるしたキャンバス地のつり包帯の運動でした。歩く試みもなされましたが、片手しか働かないので松葉杖を使うのは不可能でした。」

「40歳の人にとって重度の障害に適応するのは難しいことです。私はしばしば6歳の子供がカリバスや松葉杖を楽しそうに使っているのを見て驚いたものです。片手しかできないので車椅子をこぐこともできません。そこで私は生活の外側にいることが多かったのです。」

「約6カ月の入院生活とその後の4カ月を家のベッドで過ごし、まるで怪我をしたカニのように動き回る苦勞の多い試みを短期間経験したのち、左手を使ってタイプを始めました。病気になる前に私は店のマネジャーの他にフリーのジャーナリストと短篇作家をしていました。そして私は何か役に立つことをしたいと切に願っていました。地域の福祉協会ばかりでなく数えきれない多くの良い友達が私の家庭がうまくいくように援助してくれました。しかし私は本当に再び独立して生計を立てたいと願っていたのです。」

「時間はすべて私のものでしたから、私は長篇を一冊書くことにしました。私は3カ月

かかって『私に起こるはずがないこと』という題でポリオの日々の話を陽気なタッチで書きました。その本は南アフリカで出版されましたが、出版者や私が希望したようなベストセラーにはなりません。一方私は地域の新聞に家でタイプをしますという広告を出し、まもなくプライベートな仕事がかかるようになりました。最初は骨が折れました。特にある顧客は各ページ5枚ずつカーボン紙でコピーをとることを要求してきたのです。片手でカーボン紙と紙の端をあわせてきちんとしようとするのはまったくの悪夢で、タイプライターの上に涙を流しました。しかし、そのうちに私もこつを覚えました。他のものと同じく、忍耐とやってみ続ける能力にかかっているのです」

「素敵な友達が複写機と謄写版をくれ、間もなく私は謄写刷の価格表や広告パンフレットの注文を地域の企業から頼まれるようになりました。この方がタイプよりもずっと利益が多く、やがて私はかなりの収入を得るようになりました。私は自分の家で小さいが繁盛する複写ビジネスを確立しました。」

「それまでは私は家で働いていました。私には善良で忠実な家政婦がいて、彼女が緊急の時にはトイレを手伝ってくれました。さもなくば、私はぼうこうを訓練して、長女が市内のオフィスから帰ってくるまでの6時間がまんするようになりました。数カ月のうちに仕事が多すぎて、Bulawayのビジネス街に移らねばならなくなりました。心配ながらも私は小さな店を借りて、窓に金文字で“Enid Foster Business Services”とかき、商売をはじめました。ますます多くの仕事に来、最初は同情からではないかと疑いましたが、私の仕事の水準が依頼がなくなったものであることがはっきりしてきました」

「しかし仕事がすべてではありません。私は5人の愛らしく、理解のある子供を持っていますが、心の中では私と同じ年代の仲間を求めています。私は主人がいないのを寂しく思いましたが、一方同時に彼がこのように完全な身障者となった私を見ないですんだこ

とを非常に感謝しました。私はまた娘を持った母親がしているあたりまえのこと、一緒に買物にいたり、趣味のよい服装をさせたり、服の手入れを手伝ったりすることができないことを寂しく思いました。次女が18歳の誕生日に結婚する時、私は自分がやってあげたいと思っていることを他の人がやっているのをすわって見ているという苦い経験を味わいました。それはウェディングパーティーの準備をすとか、ウェディングガウンの衣装合せに洋服屋に行くとか、そのほか娘の一生に一度の機会に母親が出来る楽しいこまごまとしたことです。」

「1960年に私はあらゆる意味で愛情溢れる力を持った男性に会い、結婚しました。彼が自分の仕事から引退したのち、コピーのビジネスに入ってきて、私達は共に価値あるビジネスを築きあげました。業務を拡張して石版印刷や写真製版もやりました。1975年に私達は事業を売って引退できましたので、遅まきながら私の第一の興味である著述業にもどりました。」

「身障者になって最も打撃を受けたことは何ですかと、よく聞かれます。つらいことはいくつかあります。最も悲しいことのひとつは、前にも書きましたように子供たちの成長を実質的にたすけることができない、ということです。音楽ができなくなったのもさみしいことです。私は地域のオーケストラのティンパニーと打楽器の奏者でした。亡くなった夫は首席クラリネット奏者で長女は第二トロンボーン奏者でした。週1回リハーサルのために3人でドライブするのは、本当に楽しいひとときでした。今やうちの家族でオーケストラに残っているのは17歳の娘だけです。」

「物理的にはトイレの問題が真に枷になっています。私は神が女性により良い器具を与えてくださるのを望んだものです。そして男性のまひ者をうらやみました。というのは男性のプロセスの方がずっと容易だろうと思うからです。」

「ところで、身障団体からの強い圧力により市議会は市の歩道にいくつかの斜路をつけ



ました。私たちはすべての道に斜路がつくことを望んでいます。」

「ポリオやその他類似の障害をもたらす病気は悪いことばかりではありません。私は多くの慰めを見出しています。たとえばポリオにならなければ1冊の本を書く時間を持たなかったでしょうし、自分で事業を始める勇気を持たなかったでしょう。人生の外側に座っていると、人生というゲームについて、もっと良く観察することができます。いやなことでもうれしいことでも平均的な普通の人は小さなことをあちこち騒ぎ回り、エネルギーを無駄に消費したあげく、恐慌状態に陥ってしまうのです。というのは普通の人は待つということや論理的な結論を得るまで考えるという忍耐がないからです。私たち、対まひや四肢まひの人が長年にわたって望むと望まざるとにかかわらず学んだひとつのこと、それは忍耐です。」

フリーの作家（多発性硬化症による下肢マヒ、1972年57歳のとき）

「私は自分の生活と友達さえも再評価しなければなりませんでした・・・友達よりも病気の方がうまく扱えるときもときどきありました」 Lucille Heckle（住所 1708 Arrowhead Trail NE Atlanta, Georgia 30345）は

「私が57歳のとき、ほぼ5年前に、バランスを失い、いくつかの筋肉が弱まり、協調運動ができなくなって多発性硬化症と診断されました。しかし私は6ヵ月間、法律家の秘書として働きつづけました。」

「眼は影響を受けませんし、私は情緒面でのスタミナとユーモアのセンスを持っています。1975年以来病状が悪化して、杖を離すことができなくなり、また壁や家具に頼っています。私はフリーの作家で、常に家にオフィスを持っています。私は一度に長くタイプすることはできません。というのは、指が機能しなくなるからです。」

「私は1人で住んで収支と同じく足を管理することを学んでいます。できるだけ長く家にとどまることができることを願っています。」

第1に世界が私を素通りしてしまうような気がします。そして私は自分の生活と友達さえも評価しなおさなければなりませんでした。というのはもっと活動的になりなさいという人と、より心配性の人々とがいたからです。友達よりも病気の方がうまく扱えることも時々ありました。」

「活動的な生活から強制された引退への変化はむづかしくはありませんでしたが、3つの決心をしなければなりませんでした。すなわち(1)幸福でいること。友達を心配させるようないかなる落胆も見せない態度をとりました。その結果、私はより幸福になりました。(2)いそがしくしていること。書くことは指や心にとって良い療法になりました。(3)現在にとどまり、過去を忘れ、未来を見つめること。大切なことは栄養に注意し、十分休養をとり、寒さや疲労を避け、湿気のある暖房を使うことです。」

「私は松葉杖——生きた松葉杖を持っています。それは姉（又は妹）です。彼女は私の後援者であり腹心の友です。私は常に彼女によりかかることができます。」

フリーの作家（1953年17歳以来呼吸性ポリオによる四肢マヒ）

「じっとして逃がれることができないということは、基本的なレベルで行動すべきことを教えられました・・・保護的、拒否的な態度を別にすれば、私のもっとも大きな問題は、必要とする仕事をしてもらう人すべてに支払うことができない、ということです。」

Donna McGwinn（故人）は

「身障女性としての私の最大の満足は、身障者のものと同じです。それは精神の目ざめと肉体的な能力と活動に頼っている私の個人的なごまかしの部分の死です。マヒによって独立と自己表現の多くを失わなければならないということは荒廃させるものですが、失ったもののプラス新しく得た考える力は私をして闘わしめそして、私自身であるようにしむけました。じっとしていなければならず、人々や状況から逃れることができないというこ

と、常にひまであるということは、人工的で理想的なレベルでなく、基本的で現世的で、正直なレベルで行動することを教えてくれました。女性の役割の変化と人間行動と人間関係に関する知識の継続的な発展は、たぶん私が健常者のままでいたとしても現在と同じ位置につれてきてくれたであろうと思います。障害は現在の位置へのただ一つの道ではなく、近道だったのです。

得るところの多い仕事を含む他の満足の中で、私が障害者にならなければ、しなかったことがあります。それは公式的で慣例的なことから解放されることです。」

「私の仕事はフリーで書くことです。必要な能力は働くことへの熱意とその他のいくつかの選択なしには、発見され、表に現れることがなかったでしょう。」

「新しい形の社会生活——招待した人やしない人が自由にやってくること及び呼吸器が止まるかもしれないという途方もない心配により、ほとんど家から出ないこと——は興味深い過程でした。私の新しい合理性によると社会的な慣習や交際の大部分は、私にとって興味のないものになりました。こういうものは素敵なものではありますが、失われ易いものです。私は公式的な社交の流れの外にあって気になりません。多くの障害者は気にしています。それは正しいことですし、理解できます。私は多くの社会的活動に参加しない言い訳を得られて満足しているのです。」

「他の注目すべき満足は、ヒマであるということが、圧力のない社交の楽しみを与えてくれたことです。人々は私がいつもどこにいるか知っていますし、たいいてい電話や訪問を受けられる状態です。こういうことは時間を

くいますが、だれかが私を必要とする時私がいるということ、訪ねて来た人たちが仕事を手伝ってくれたり、用を足してくれること、広い情報源を持つことは書くのが職業の人にとっては貴重なことであり満足を与えてくれます。つねにヒマであるということは、あらかじめセットされた訪問より、しばしば会うことができ人々の多くの面を知ることができます。」

「問題もあります、私にとって最も腹の立つことは、私が5級市民であるような、恩寄せがましい態度です。5級市民というのは、女性ということで2級、四肢マヒで3級ということ。しばしば人々は、だれが私の面倒をみるのか知りたがります（もちろん私が見るのです）。私にはロマンスもセックスもないと考えます（ないときもあります。でも健常者がそのようなことがない時があるのと同じ理由です）。私が座ったり寝ているだけで何もできないことを同情したり、うらやんだりします（私が売っている作品をだれが書いたと思っているのでしょうか。だれが私の家の機能を管理しているのでしょうか、だれが請求書を作ったり、支払いをしているのでしょうか。だれが私の身体が清潔で、着物をきて、保護されていることを確認しているのでしょうか）。さらに人々に物を頼むとって批判する人もいます（健常者のみがそのような権利があるのでしょうか）。保護的、拒否的な態度を別にすれば、私の最も大きな問題は、必要とする仕事をしてもらう人、個人的な世話や保護（私は24時間呼吸補助を使っています）その他の私の生活の表現の表われなど、すべての人に支払うことができないことです。」

（訳 齊藤明子）

## 第2特集

### *Twenty Years In The Gazette House*

# 機関誌の家における20年間

*Gini Laurie*

機関誌よ、20才の誕生日おめでとう！  
今年が機関誌の20年目、すなわち私たちの家が機関誌の家となって20年目にあたります。お祝いの年なのです。古い読者と共に過去をふりかえって回顧する時であり、新しい読者と共に順を追って話をする時なのです。

機関誌とは何でしょう。年月をかけてどのように発展してきたのでしょうか。経済的にはどのようになっているのでしょうか。著者たちは誰でしょう。職員は？誰がこれをおこしたのでしょうか。どのようにしてギャゼットは始まったのでしょうか。

機関誌の橋頭には「身体障害者のための国際的な雑誌及び情報サービス」とかかげられています。読者には、さらにそれ以上のものです。それは、重度の身体障害を持つ読者の想像力に富む、実際の、地についた生活体験の体現であり、反映なのです。読者にとってそれは、郵便によるグループ・セラピーの形式であり、他の人々によって試されて役に立つことがわかったアイデアや発明や改造の非常に貴重な源泉なのです。多くの人たちにとって、それは独特なクラブです。身体障害をもたない読者にとっては、参考資料であり障害者個人の興味やニードへの洞察の源泉となるものです。

ギャゼットはどのようにして始まったのでしょうか。直接的には、1958年に呼吸ポリオ・

センターにおける小さなニュース・レターとして始まったのですが、間接的には、私の生まれる前の年に、セント・ルイスで蔓延したポリオがわが家の4人の子供を襲った時に始まりました。2人の姉はその年の夏に死に、もう1人の姉は軽い障害になり、兄は非常に重い障害になりました。両親はすぐに、もう1人子供をもうけようとし、私があくる年の夏に生まれたのです。私の運動能力が発達してから、私は兄を補助する手足となりました。私は、兄がどんな障害に見えるかということに気がつきませんでした。兄がとびきり偉大に思えて、影のようにつき従っていたのです。

私が16才の時兄は21才で、肺炎で亡くなりました。重度の障害者と共に生活した経験は決して忘れられません。1949年に、Joeと私は仕事上の理由で、セント・ルイスからオハイオ州のクリーブランドに引っ越しました。私たちは、クリーブランドの東の郊外にあるChagrin Fallsという村に古い家を見つけてそれを改造し、庭を造り、郊外の生活をしました。しかしこれらの計画は遅れました。というのは、その年にクリーブランドで恐ろしい伝染病であるポリオが発生し、新聞には温湿布を学んで手助けをするヴォランティアを求める広告が、いっぱい出ていたからです。当然のことながら私はそのコースを取り、それ以来障害をもつ人々への奉仕をやめたこと

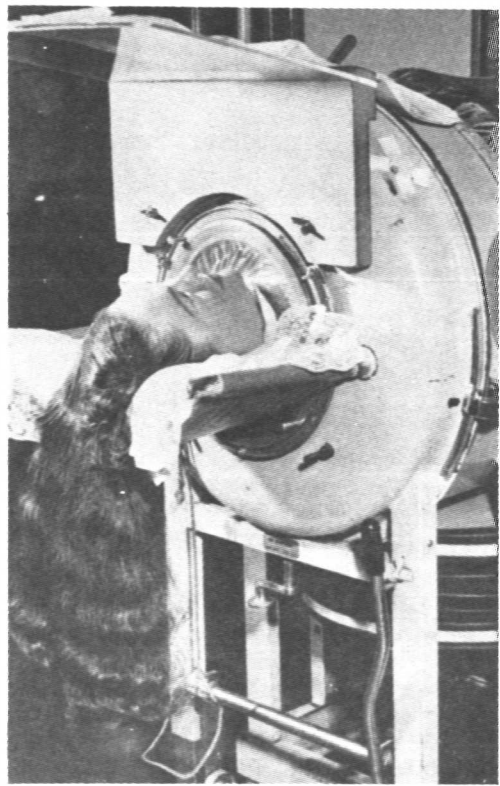


はありません。

続く10年間、私はクリーブランド市立病院の伝染病棟——後にToomey Pavilion という地域の呼吸ポリオ・センターになった——に週1～2回通いました。私は患者と一緒にいることが好きでした。彼らの家族や、問題や、楽しみも知るようになりました。彼らのために買物をしたり、使い走りをしたりしました。食事を食べさせたり、身体を洗ったり、衣服を着せたり、排泄をさせたり、洗髪をしたり、ひげをそったり、マニキュアをしてあげたり、読みかかせや代筆もしました。必要とされることは何でもやり、退屈しないように、誕生日パーティーや休日ごとに病棟を飾って、できるだけ生活を楽しむように努力しました。

Toomey Pavilion で過ごした何年間かの、最も強く暖かい思い出は、2つの大きな病棟で生活を共にし、又世話をした人々との親密な感情です。常時職員が不足しているために、定期的に訪れる家族どうしが互いに助け合い、そうしているうちに知り合いになって、互いに力づけあうようになったのです。患者たちも互いに世話をし合いました。だれかが大きい警報音—「ポンという栓ぬき音」のような音（気管切開して声が出なくなっても、舌を口蓋に打ちつけて鳴らす音）を出したら—その時声の出せる人は皆「看護婦さん！」と叫ぶのでした。私は鉄の肺のとどろきやポータブル呼吸器の振動も好きです。なぜならザブンという音や鼓動する音は多くの親しい友だちにつながっているからです。

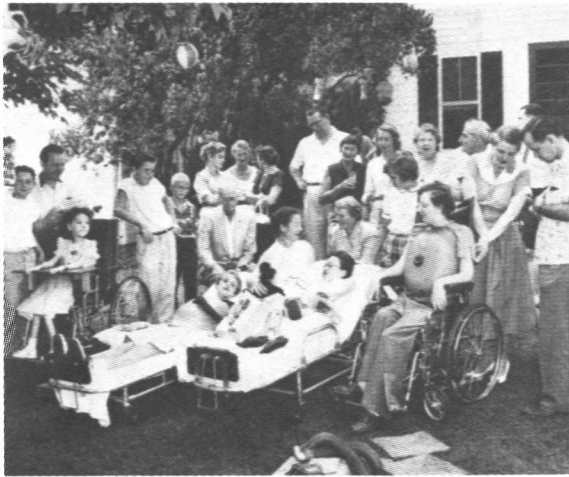
患者たちは病院を離れても、連絡を取りつづけていて、私たちの家でのパーティーにやってきました。私たちはたくさん親友を得ました。私たちは家に斜路を取り付け、水圧リフト付きの小さなプールをつくってちょうどよい温度に暖めました。とうとう年1回「Toomey同窓生ピクニック」を家で開くことになりました。ピクニックは、「旧来のポリオ患者」だけでなく、オハイオ州北東部にいるあらゆる障害をもった人々の集まりに成長していったのです。私たちは毎年L.S.D.



1949年「私は、鉄の肺につながれた人たちと共にボランティアとして仕事を始めました。それ以来ずっと、私は身障の人々と共にボランティアをしつづけています」

(Lick, Stick, and Dunk)パーティーを、郵便物を出す準備ができた時に開きました。切手をなめ、封筒を貼り、郵便物の山に投げ込むパーティーというわけです。

1958年までには、ソークとセイビンがポリオを駆逐し、病棟はからになり始め、ただ検査や、肺炎の発症期間や、分娩のために来る数名を残すのみとなりました。私は定期的な奉仕を続けました。私は同窓生の生活に何が起きているかを知らせて回る動くニュースレターになりました。彼らは互いのニュースをととても知りたがっており、たえず私や理事のRobert Eiben 医師に電話をしてきました。ついに彼は、私ともう一人の奉仕者Flora Seielstadに、病院外にいる患者と連絡をとって、小さな謄写版印刷のニュースレターを編集してくれるように頼みました。私たち



1955年「患者さんたちは退院した後も、連絡してきて、私たちの家のパーティーに来ました。そのうちの多くの人が、親しい友になりました。」

は、身障の友だちの中からスタッフをつのり彼らの他の“同窓生”が家で次のようなことをどのようにうまく処理しているのか、その様々な方法を報告してもらうことにしました。すなわち介添人や、子供、趣味のこと、家庭への適応、家事、家族、仕事、レクリエーション、学校、そして配偶者のこと等について、車椅子やロッキングベッド、胸あて式呼吸装置や鉄の肺の中から報告してもらうのです。

最初のスタッフは、Susan Armbrrecht, Ida Brinkman, Ruth Davis, Sally Russell, それにSue Williamsでした。数年後には2人の才能ある“同窓会”Mickie McGrawとDonna McGwinnが加わり、その後イリノイ州のBarbara Coryとアラバマ州のBob Tantonが加わり、さらにこの記事の最後にリストしてあるアメリカ中、世界中から沢山の貴重な人々が加わりました。

このようにして病院のスタッフとToomey-Paviliouの以前の患者のための小さな印刷物が始まりました。雑誌は前の理事長のJ.Toomey博士にちなんで、“Toomey j Gazette”と命名されました。それは合衆国の他の17の呼吸ポリオセンターに送られるほど、人気がありました。そのうち世界中の呼吸センターに送られるようになり、さらにあらゆるタイプの障害を含む雑誌へと発展しました。

第一号は病院で謄写版で印刷されました。部数がウナギ昇りになると、印刷しなければならなくなりました。不幸なことに、印刷するとなると、たとえ私の古いアンダーウッドでタイプしたものをオフセット印刷するという最も安上りの方法をとったにしても、お金がかかります。部数が伸びるにつれて、お金を集めるためのいくつかの大変ユニークな方法が発見されました。私はハーブ酢を作って売りました。私たちは余分なシャムの小猫をギャゼットに対する25ドルの寄付と交換しました。小猫たちの父親の種付け料も同様にしました。一時的にせよ、税金を控除された猫と種付け料によって支えられた印刷物は、世界でもギャゼットだけにちがいないと思います。

ギャゼットはタイプライターや宛名印刷機などの機械を購入するため、少数の家族基金と接触し、評議員会をもつ非営利団体になりました。購入できない人を除いて、無料配布もやめました。障害者からのわずかな寄付とそれよりやや多い非障害者からの寄付を要請しはじめました。このようにして私たちは継続しました。私たちのバックボーンは、少数の大変特別な非障害者の友と、多くの成功した障害者（仕事で或いは事業で）或いは非常に寛大な障害者、によって成り立っています。



「1960年代には、発送準備のためのL.S.D.  
(Lick・Stick・Dunk)パーティーを庭で開き  
ました」

私達の定期的な基金は障害者個人からとるドルの寄付と図書館、病院、大学、リハビリテーションセンター、医師、療法士、カウンセラー、看護婦からの5ドルの寄付によるものです。

零細資金によるギャゼットが独立の存在を続けられる秘密は2つあります。時たまパートタイムに払うほかは給料を払わないこと、そして原稿料を払わないことです。私たちの友——非障害者、Toomey 病棟の同窓生、その他の障害者個人——が、画家として、グラフィックデザイナーとして、海外特派員として、法律顧問として、ニュース集め人として、校正者として、タイピストとして、作家としての才能を無料で提供してくれているのです。

ギャゼットの最もエキサイティングな部分は、多くの人々が病気やケガをした最初の段階から出発して、前進していくのを見ることです。力と希望を結集して、仕事に戻ったり、仕事を変えたり、学校を終えたり、工学、精

神医学、医学、心理学、ソーシャルワークの博士号や医学博士号、修士をとったり、結婚したり、家や家庭を持ったり、生活したり！ちょうど世界中に友達の家族を持ったようなものです。！

ギャゼットの20年はリハビリテーションの歴史を映し出しています。社会保障の変化を記録してきました。障害者になった時、いかにして障害給付を得るか、いかにしてSSIを得るか説明してきました。職業リハビリテーション法の修正案も報告しましたし、503、504号の法案の提案にも足跡をのこしました。宣言をつくり権利を行使するための障害者の運動にも、国の内外で従いました。

1958年以来、住宅と身障者へのサービスに関して、独立生活センターに関しては1972年以来、その進展ぶりを報道してきました。住宅や独立生活に関する記事は単行本として編集され『身障者のための住宅と家庭サービス』として、1977年Harper & Row社から出版され





1971年「Joeが引退し、ボランティアとして私を助けてくれるようになりました。私たちはChagrin Fallsの家からセント・ルイス市内に戻ってきました」  
ました。

ギャゼットの20年は、常に革新的なものでした。1960年にギャゼットは1回目の国際身障芸術家展を組織しました。そしてケニー・インスティテュートで70人の参加者と共に開催するようになり、そのうちケニー・インスティテュートは国際身障芸術家展を核として、毎年独自の展覧会を開催するようになりました。ギャゼットはさらにトーキングブック法に視力障害者ばかりでなく身障者も含めることについて国会に影響を与えました。これはネブラスカの身障の読者Ruby Heineがギャゼットを通じて全国の読者に彼らの州の国会議員に自分たちの意見を知らせるよう呼びかけ、Cyrus S.Eaton夫人が議案の提出に関し影響力のある国会議員の注意を引いたためです。身障者と性についての最初の記事はこの問題が一般的となるずっと以前、1967年に掲載されました。

ギャゼットの20年は、読者のユニークな機具のアイデアを記録する“読者のアイデア”欄において、読者の発明の才と創造性を記録しつづけてきました。“グループ・セラピー”や“役割モデル”が世間で議論されるずっと

以前にギャゼットの読者は、彼ら自身のグループ・セラピーやモデルを必要から発明していました。個人的な生活体験や“世界の友だち”に掲載された短い手紙は、他の読者へのはげましになりました。「もし彼ができるなら、僕だってできる」「もし彼女ができるなら、私だってできる」という気持が紙面から読者へと流れていくのです。多くの人が今や、旅行し、遊び、趣味を楽しみ、独立した生活やさらに充実した生活を送っています。というのは他の身障者が予想していたよりずっと冒険してきたからです。ギャゼット以外のいったいどこでポータブルの鉄の肺の発明家は市場を見つけるのでしょうか。3台のロッキングベッドをもっている人をさがす旅行者、呼吸器付きの旅行についての専門的知識を持っている旅行業者は？ 脊髄空洞症とか、皮膚筋炎とか、シャルコー・マリー・トゥースなどのまれな診断名をもつ人と、経験を共にしたいと思う人々を、他のどこで見つけたらいいのでしょうか。歯で操作をする電報送信機は他にどこで見つけたらいいのでしょうか。病院の患者が所有しているレース用の馬は？ 足で操作するハンドルは？ カエル式呼吸法を習う方法は？ いくつものちがった種類のマウス・スティックは？ 「中庭の四肢マヒ者」と題した特別発行物は？ さかさまのポリオは、どこで見つかるのでしょうか。四肢マヒ者の数百もの雇用と人生経験は？ 絵かきやタイプや読者だけでなく、深海漁業、宝石製造、ハムラジオ、ドライブ等でマウス・スティックを使う人物は？

機関誌は、20年前に始まった謄写版印刷のページから、長い道のりを歩んできました。今やギャゼットは83カ国、数千の身障者や専門家の手に届いているのです。様々な発行物が日本語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、ドイツ語に訳されています。

途中で、スタッフはその名前をToomey j Gazette から Rehabilitation Gazette に変えました。ある読者はそれをかっさいし、他の読者はがっかりしました。

その時、名前と同様に家も変わりました。



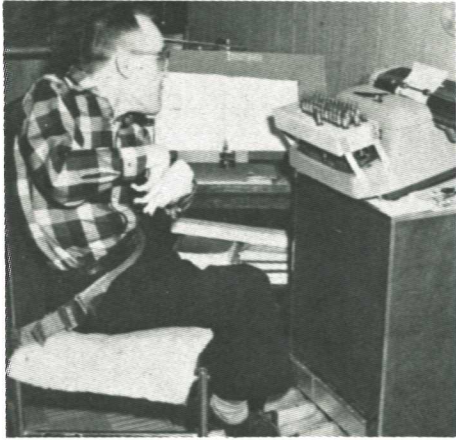
1967年に Joe が退職しました。1971年には、私たちは Chagrin Falls の雪をあとにして、故郷のセント・ルイスに戻りました。機関誌も共に持ち帰って、Joe がフルタイムの奉仕者として私と一緒にやるようになったのです。ここでもまた私たちは、校正とレイアウトを手伝ってくれる専門の年1回の奉仕者を見つけましたが、プールでひとあびする間に沢山の仕事をした Chagrin Falls での奉仕者のような、毎日のタイプや図書のことをやる人々は見つかりませんでした。

編集と調査はすべて今なお私たちの家が中心になっています。Joe と私で何とかその必要とするすべての仕事にたえ、毎日の郵便がうまく流れるようにやってきました。

私たちは歩き回る時間も見つけました。ヴァンを手に入れてから、多くの身障の友だちに会いました。ヴァンは、キャンプのために装備したもので、リラックスできて比較的安い旅行法を見出したわけです。National Paraplegia Foundation（国立対マヒ基金）と Presidents Committee on Employment of



機関誌は83カ国、数千もの身障者と専門職の人たちに届き、いくつかの発行物は5カ国語に訳されています。

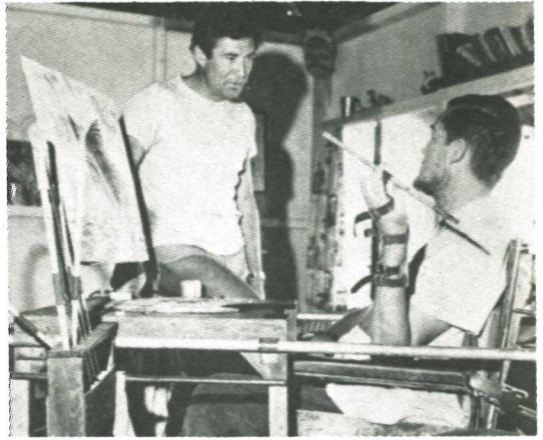


多くの人々が今や旅行をしたり、働いたり、遊んだり、趣味を楽しんだり、独立して生活したりしています。なぜなら他の身障の読者が予期される以上のことを思いきってやっているからです。

the Handicapped (身障者雇用に関する大統領の委員会)の年1回の会合、American Coalition of Citizens with Disabilities (アメリカの市民と身障者の提携)の評議員の会合、そして各種の他の会合への途上で、私たちは身障の友だちを訪問したり、住宅計画を研究したりしながら、アメリカ合衆国の大半、メキシコ、カナダをジグザグに進んだものでした。

私たちは専門の出版物や、定期刊行物や、通信、情報等の特別な図書をためて、今や書物で家もふくれあがっています。私たちは、世界を対象とした情報センターになったわけです。私たちは、障害をもって生きることに関する殆んどどんな質問にも蔵書や、発行物のバック・ナンバーで、あるいは特定の問題を解決した他の障害者に質問者を照会することによって、解答を見出すことができます。

米国国会図書館は、地方の図書館を通して入手可能な記録の抜粋を登記してあります。盲人及び視覚障害者のためのヨハンナ事務所は、新しい発行物をオープン・リールであれカセットであれ、テープにとってあり、盲人でも障害者でも依頼があればだれにでもそれを提供するようになっています。



どの発行物も重度の障害をもつ読者の想像力に富む、実用的で地についた人生経験を含んでいます。

機関誌の目的は昔を今も同じです。すなわち、「世界中の身障者に届き、情報を提供し、誇りを持たせること」です。私は今なお触媒のようなもの、風の中でわらをつかまえる者、事実の収集者兼提供者です。家は変わりましたが、あらゆる所から機関誌の友だちが訪問に立ち寄ってくれます。彼らはパーティーを口実にして、セント・ルイスにいる私たちの友だちに会いにくるのです。

20年たっても、私たちの家はなおもって機関誌の家なのです！ (訳 今村恵津子)





機関誌は身障者たちが、わが国においても外国においても、連携して権利を獲得する運動を励ましてきました。



機関誌は郵便によるグループ・セラピー（集団療法）の形態をもっており、他の人々によって便利だとわかったアイデアや発明や適応法の貴重な源泉なのです。



# 英国における四肢マヒ者の雇用

Roger Jefcoate

## バレエ振付け師

(25年以上呼吸器を使用)

Elizabeth Twistington Higgins 82 Patching Hall Lane, Chelmsford, Essex, England.

エリザベスは、歯の間にはさんだブラシで描いた素晴らしい絵で有名ですが、最近自分自身のバレエ団「Chelmsford Dancers」を創設しました。ポリオにかかる前はバレエダンサーでしたが、今はリモートコントロールのハイファイテーブルコーダーとポータブルの声のアンプを使って教えています。教会で踊る礼拝バレエの新しいテクニックでダンサーたちを訓練しています。彼女は日中、家では吸うことによって作動する環境コントロールを用い、夜は毎晩病院内にある同じような設備の鉄の肺に行きます。彼女の生涯は、ロンドンのMowbray社から出版された“Still Life”という自伝の中に詳説されています。英国で最も有名な身障者の1人として、エリザベスと彼女の仲間はいしばしばテレビに登場し、彼女の話はラジオで特別放送されました。

## コンピューター・プログラマー

(44才 痙直・不随意運動型CP)

Dick Boydell

Spastic Society's Further Education Centre, Oakwood, High Street, Kelvedon, Essex, England.

書かれた資格は何もありませんが、彼はたしかに英国のコンピュータープログラマーの草分けの1人であり、英国コンピューター協

会の正会員でありかつ名誉会員です。電動式リモートコントロール設備を使うはじめてのCPとして、彼はこの設備をすべて言葉のデータバンクに組みこまれた電動タイプライターによって操作しています。彼は事実1分間に十分50語以上打つことができます。車椅子に乗り、右足でうしろ向きに押すことにより動き回ります。彼の趣味はアマチュア無線です。彼の話はEducational Explorers Readingから出版されている“Despite Disability”(障害にもかかわらず)の1章に載っています。彼はフォード社のプログラムもやっています。

## コミュニケーション・コーディネーターおよび特殊教育アドバイザー

(28才、言語障害、痙直・不随運動型CP)

Glynn Vernon

23 Holderness Drive, Sheffield, South Yorkshire, England.

彼はユニークな英国市民大学(これは単位も授業もラジオとテレビと郵便によってなされる大学)を最初に卒業した身障者学生の1人です。妻のGillの助けを得て、彼は地方のテレタイプ連絡サービス(聴力障害者のための)を運営し、日中はRotherham地方当局の特殊教育アドバイザーをしています。身障者の教育はグリンの大きな関心事で、光のタイプライター(言語代替装置)によって彼はこの仕事をする事ができます。



Toby Churchill デザイナーであり「ライトライター」の製造者

## 器具会社のオーナー及びデザイナー

(30才、大学の学生の時に診断のつかないビルス性の重度マヒとなった)

Toby Churchill

Toby Churchill Limited,

20 Panton Street, Cambridge CB2 1HP,  
England.

トビーは言語障害になり、車椅子の身となりわずかに右手が使えるだけの身体になったため、友達3人と初めての真のポータブル言語代替装置「ライトライター」(光のタイプライター)を作りました。この機械は32の文字(半分は文章)を持ち、軽い手動タイプライターに似ています。キーの配置も標準と同じです。全電気式コントロールがユーザーのメッセージをコンピューターのようなディスプレイの上に表示します。トビーは彼自身の会社を運営しています。この会社は上に述べた製品と、その他の身障者のための設備を製造しています。

## 税理士

(32才、筋無力症によるマヒ)

Robert Bowell



Robert Bowell 所得税理士

Copper Beech, Parry's Close, Stoke  
Bishop Bristol, England.

ロバートは車椅子の使用者で、指や腕の力も弱く、体重は40ポンド以下です。数年前彼は所得税専門の税理士になりました。多くのそえ木のついたスイッチアSEMBリーを備えた電動タイプライターを使っています。スイッチアSEMBリーには彼の残された能力に合うように3次元のマイクロスイッチが注意深くとりつけられています。彼は英国政府からリモートコントロールの装置を与えられた、初めての身障プロフェッショナルです。

### 著者紹介

Roger Jefcoate

Willowbrook, Swanbourne Road, Mursley  
Milton Keynes, Bucks MK17 0JA, England.

英国政府、ニューヨーク市UCP, Spastics 協会の電動補助具に関するコンサルタントで身障児のための補助具と器具についてのコースを指揮している。

(訳 齊藤明子)



# 旅行

## オーストラリアの芸術家

### スウェーデンへ行く

*Erich HG Krell*

私が三年毎に開かれる口と足の芸術家協会の大会にオーストラリア代表としてスウェーデンに旅行した時は、全く災難続きだった。しかしまた機会を与えられたら私は旅行するだろう、そう、また旅行しよう！

私は二人の古い友人、この旅行を通してずっと“fun & games”に参加したElisabethと、途中で加わった看護の尼さんと一緒だった。まず最初の“ハイライト”は、ボンベイでスーツケースが一個失くなった事だった。これには我々は全く元気づけられた。たまたまボンベイに住んでいたMrs. Nimbkarのお世話で全インド医療リハビリテーション協会のディレクターのRama Rao博士にお会いする事が出来、博士は御親切にも私が自由に使えるようにと、その協会に一台しかない救急車を回して下さった。唯一つ思わぬ障害があった。私はたった5フィート10インチのそう身なのに、その車に乗れなかったのだ！しかし“不可能とは少しばかり時間がかかるだけの事だ”のモットーによって私は11½ストーンの弱体を救急車に押し込むことに成功した。インドの人達は全体としては、小さくてデリケートであるが救急車に私を押しこもうとし、私の体を4人が別々に違う方向に引っばったのでガリバーとはちょっとばかり異った気分を味わった。

他の人達の上に“かかけられて”救急車の

後に無事乗り、友達が私を起こしておくために両側からはさんでくれたので、私の視界は制限されて私はインドの歩道とかかかと、履物に関して博識になってしまった。その救急車の新しい運転手が一時間半程運転の練習をしてホテルに戻り——大した運転手だ！——ベッドに横になると、マヒには最もよくない水ぶくれが出来て完全につぶれているというおまけがついていた。そのお陰で、ベルリンでの最初の二週間はそれがかさぶたとなるまで、ベッドの中で過ごすこととなった。

ベルリンを訪問することは1972年以来脊損病棟で準備されていた。しかし我々が空路ボンベイから着いた時——14時間位かかった——誰も私が誰か、そして部屋を頼んでおいたのも知らなかった。結局の所、私はオーストラリア位から来ただけで何ということもなかったのだ。しかし皆大層親切だった。

かいつまんで言えば、ベッドも部屋もなく私はこの“初めての”訪問の準備がなされている5年もの間、ばかみたいに唯タイプライターを打っていたという訳なのだ。2、3時間後（1時間はほっておかれた）かかをと鳴らして敬意を表さないの、私に悪意をいだいたヒットラー帝国主義者みたいな事務員は、私が他の患者に悪影響を与えようと思ったらしく、第三次世界大戦をさけるには私に少しましな部屋を与えなければならぬということ



Erich HG Krell (C 4 - 5 四肢マヒ) 芸術家、作家。

になった。

私はホテルを取って経費を浮かす賢い方法はとらず、代りに——たった一度の人生なのだから——6週間も住むには町の中では彼等の所が最も適していると言う妹と夫の主張に同意してしまった。それは2階の2部屋続きのアパートで、リフトは無く、たった27段の階段をラバのようによじ昇っていけばすむのだった！——バンザイ！それからの3週間半というもの、ボンベイで痛めたひじの傷がこうじて寝たり起きたりし、2週間はひどい風邪にやられ、終にはわけのわからない病気で

会議に出発する5日前までベッドで寝ているはめになった。私が憶えていることと言えば突然40℃まで熱が上がり、意識が無くなり、目がはっきり見えなくなったことだけだった。

ふり返って見れば、私の仲間達と一緒に居ることは災難だということが分った。ボンベイはめっちゃめっちゃだったし、会議は恐ろしい位だった。我々の「幸運の」冒険談は慌ただしく準備した帰りの旅行でも続いた。まず、私の状態がよくなかったのでインドで過ごすはずだった二度目の休暇をキャンセルしたことだった。そして我々は向う見ずにも長い距離をひとつ飛びで帰国することにした。その為にロンドン経由で行かなければならなかった——London/Bombay/Perth/Adelaide——ところが管制官のストライキでパースからの飛行機が遅れ、接続するはずだったアデレード行の便を取り消すはめになった。

最終的に私達は再度変更した予定より2日遅れて帰国した。しかしそれでも最初の帰国予定より早かった。しかし、善人だけが早死するのであって、私はベルリン以来重症の胆のう炎、肺炎、肝臓障害、虫垂炎の可能性、腺熱をわずらっているだけだったのだ。私がかもし再度海外へ旅行するとすれば医者をつれて行くべきか、それとも誰がいいのであろうか。

ところがこんなごたごたした旅行中に、なんと私が婚約したのだ。

住所：Erich HG Krell, 11 Tester Drive, Blackwood, South Australia 5051, Australia.

## 氷河と氷原

*Peg Leonard*

7月半ばに2インチの積雪を見てからどの位たったでしょうか。Columbia氷原のあるAlbertaの北端に住むカナダ人にとってはこ

の様な光景はめずらしくはないでしょう。しかし夫のエドと一緒に、バンフとLake Louiseの北にあるJasper国立公園の中のAthabasca



カナディアン・ロッキーをキャンプで旅する  
PegとEd Leonard夫妻。

氷河の先端近くですごした夜は大変な冒険で、氷河公園とカナディアンロッキーでの2週間の中でも楽しい経験でした。

私達はこの2900マイルに及ぶ旅行をもっと楽しくする為、“初めて”の試みでしたが、長年やってみたく思っていたキャンピング・カーで旅行してみました。近所に住む友達のMarguerite Spracklen(彼女は私の介添人でもあります)と一緒に、やっと見つけた車椅子を乗せられるキャンピング・カー(26フィートのGMC Glenbrook)を借りて出発しました。

食事用のテーブルと椅子を2脚移動して、2個の120ボルト用コンセントにとどく横に、人工呼吸装置、バッテリー、充電器を置く場所を作りました。そばにはこのキャンピング・カーに特別に取りつけられた制御盤と、読み取り式ダイヤルをつけました。

Glenbrookの電気装置には予備の発電機(120ボルトAC)とバッテリーが付いていて、人工呼吸装置の電力がまかなえます。一般のキャンプ場を予約できた夜は、そのAC線を使いました。そのような施設を使えない時は、持って行った2個の12ボルトバッテリーを使いました。そのバッテリーは別々にでも使えますが、一緒にすると24ボルトDC(12ボル

トACに切換可能)の電源になりました。

26年前、小児マヒによって四肢まひになって以来、一日も人工呼吸装置を手離せないのが、私達はこの長期にわたる旅行中装置が動かなくなった場合を必要以上に用心したのかも知れません。幸いにも電力に関しては一瞬もそのような不安を感じたことはありませんでした。しかし、1200マイルの所で装置の一つが実際に止まってしまったことはありましたが、さいわい予備の装置で間に合いました。

家を離れる時は、私は“Chair bed”で寝ます。そのベッドは部品をつけて、背もたれの高い、完全にリクライニングするE&J車椅子で簡単に組立てられます。身の回りのことや着換えを容易にするために、車椅子のひじかけをはずして、部品をつけて昇降できるような携帯用リフトを作りました。

キャンピング・カーでの旅行は、装備さえ充分であれば、最も便利な方法だと言えます。まだモンタナ州とカナダの巨大な氷河を見ていない方に、この旅行を是非おすすめいたします。

住所：Peg Leonard (Mrs. E. G., Jr.)  
Box 681, Douglas, Wyoming 82633.

(訳 一方井許子)



# 安全な移動

Andrea Cappaert

友人のDale Annと私が、ミシガンの故郷の町を去る時が来たと気付いてから24時間のうちに、準備は出来ていました。衣類をナップサックに投げ入れ、Big Blue (両親から借りたバン型の車で、車椅子と人工呼吸装置用の補助バッテリーを乗せるスペースがある) に積み、鉄の肺を借りりのU-Haul (トレーラー様の運搬車) に積み、1200マイルの距離を共にしてくれる運転手を掲示板で探し、見知らぬニューオーリンズあたりに向って、出発しました。その後の2週間は、生き残る為に生き生きと奮闘しました。Airline, Highwayを18ドルのホテルから12ドルのホテルへ、そして、8ドルのホテルへと移動しました。いくらかでも安い宿をと思って探したのが、人が冗談に“宮殿”と呼んでいる下宿屋のほら穴まがいの地下室という事がありました。Dale Annは、その部屋の10年分もありそうなタバコの吸い殻を掃除して、借り賃の割り引きをしました。手元に残った50ドルで、遂にCarondelet Streetに一部屋借りました。

移動の度に、重さ800ポンド、長さ7フィート、幅3フィート、高さ5フィートの鉄の肺を動かす仕事がありました。移動に伴うこの一連の突飛な行為は、われらが屋外劇場のいつものくんだりでした。午前3時(いつ出発しても着くのは午前3時になりました)に、ホテルの駐車場に到着して、鉄の肺をトレーラーから部屋に移す為に必要な3人から5人の人手を見つけようとすると、長い間そこで待っていないかならぬ事がわかりました。

まず、最初の移動の時には、ホテルのバーから出てきた2人連れの紳士をつかまえて、失敗しました。3回目の移動をする頃には、

トラックの運転手が一番見込みがあるとの結論に達しました。トラックの運転手というのは、どんな時刻にもホテルに出入りがあるし、怪我をせずに重い機械を動かす術を知っているからです。

住居の問題が解決して、次の挑戦は、底をついたとおきのお金をとり戻すことでした。私達2人のうち、Dale Annの方がより手っとり早い仕事を見つけそうでした。彼女はバーボン・ストリートのヌードダンサーの仕事に興味がありました。驚いた事に、彼女が試しに出てみた初めてのめぐり酒場が、彼女を雇いました。

8時間勤務の仕事は、私達2人にとってジレンマとなりました。Dale Annを、四六時中、私の世話をする責任ある状態から解放する為にも、私の為にヘルパーを雇う現金が必要でした。しかし、ヘルパーを雇うにはお金が必要で、Dale Annが私から8時間フリーになってお金を稼ぐには、ヘルパーが必要だという悪循環は、一種の罠でした。

私達の借りた小さな部屋に、私が一人で居ない様にする事で意見は一致しました。一人で居ると、単調なだけでなく、私の場合は助けが必要な時に、外との連絡をとる事もできませんでした。Southern Bell電話会社の電話の保証金制度では、低所得の人々は、めったに電話を持てません。すると、2人あわせて74セントという財源では、私達は、まさに、こうした人達の範ちゅうに入ります。

私の気が狂わない様に、私達は、人工呼吸装置のプラグを差し込む電源が備わっていて、気楽に入れる公共の場所が必要でした。フレンチ・クォーターの半分は、ヨー

ロッパの電圧と同じです。私達には、電源が人工呼吸装置に合った電圧を供給しているかどうか分かりませんでした。いろいろな時間帯のパートタイムの仕事が必要でした。一時的にフラフラしているのは、フレンチ・クォーターではあたりまえですから、一緒に寝泊りしている人を見つけるのには好都合でした。故郷の町の浮浪者収容施設で働いた時に会った人々で、定職を持たず、ヒッピーの様な暮し振りの人々を思い出しました。電話帳で探すと、良く似た施設がニュー・オーリンズにもありました。幸い、私達は、Dumaine Streetにある、ぼろぼろの木賃宿に住む、正真正銘の住所不定の宿無しの一団と接触するようになりました。この木賃宿に流れ込んで

ゆく人々を観ていて、私は、はっとして、一時的なはかないものの中に安堵感を感じとりはじめました。そして、フラフラと街で過す日々が私にとって、一番ほっとする時でした。その訳が分りはじめました。安定した社会は、要求があっても、それがどれ程性急なものであるかを忘れてしまっています。でも、こうした街の様子は、きまりきった日常の暮らしを切り裂いて、その中から要求されているものを、引き出してはっきりと見せてくれます。それは丁度、山を切り開いて道を通すと、山肌が現れて、岩石の層が見えてくるのに似ています。

Address : Andrea Cappaert 839 Oakland,  
Ann Arbor, Michigan 48104

## 車椅子のヨーロッパ旅行

*Eileen Van Albert*

私は、5月29日に発って、7月28日に帰って来ました。ブラッセルで、フォルクス・ワーゲンのレンタカーを借りて、ベルギー、オランダ、西ドイツを旅行しました。(東ベルリン通過を組み込んだ3時間のバス旅行で、東ドイツを通してベルリンに行きました。)それからハンブルグ経由で、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、イギリスを回りました。

私に付き添ってくれた人がいました。彼女は背が高く、金髪で、しっかりしているうえに、その魅力的な容貌と振舞いのお陰で、男性の助けを色々受けました。

私達は、ストックホルムからゲーテボルグまでthe gata Canalの船旅をしました。2泊3日の旅で、これは是非お勧めします。普通は、一年前に予約するのですが、幸い、私達は、12日前でも予約が取れました。勿論、料金が高めの甲板船室を取らなければなりません。私の付添い人は、船室の外の車椅

子から、寝床まで、私をサツと運び込んでくれました。洗面所は遠かったので、屑籠を利用しました。

もう一つの旅は、バスとフェリーで、オスローからベルゲンに行き、ベルゲンで数日過ごし、それから汽車でオスローに戻るという旅でした。これは、かつてないドラマティックな旅でした。

私達は、ストックホルムまでは、ワーゲンを5週間借りました。ここでは、エイヴィス・レンタ・カーにしました。この次借りる時は、エッソ・レンタ・カーが良いと教えられました。エッソの方が、安上がりなうえに、エッソとオーケー・モテルなら、どこへ行っても必ず一部屋は、車椅子用の部屋が有るからです。

私はガダラハラで、身障者用の新しい旅館を開いています。男性も女性も使える予備室もあります。Kenの処にも空きは有りますが、

男性専用です。どなたか、こちらに滞在なさりたい方があれば、21-38-22番の私あてに予約して下さい。

Eileen Van Albert 住所: Apde.5-208  
Guadalajara, Jalisco, Mexico.

## とんでる車椅子

*Selma Z. Sack*

やった！ 遂にやった！ 3級の市民（車椅子の障害者の事を、世間では、よくこう呼びます。）風にはではなく、定期券で毎日通勤する人の気分で、バスに乗って行ったのです。

私は、多発性硬化症で、車椅子に乗っています。でも、家にこもりきりは、いやなのです。車が無いので、あちこち行きたい時は、タクシーに頼らなければなりません。私は、El Cajonに住んでいて、移動する時には、イエロー・タクシー会社を使います。

タクシーに乗る度に、色々な運転手に、よくこんな話をしました。「このタクシーは、サンディエゴの方まで行ってくれないから、とても残念だわ。見たいと思っている面白そうな処が沢山有るけど、車椅子じゃ、それも出来ないから。」「ほんとかね？車椅子を言い訳にしちゃいかんね。君が本当に一人で行きたいなら、とびきり努力しなくちゃ！ でも、出来る筈だよ、その気なら！」一人の運転手が、こう言ってくれました。

1977年8月23日に、サンディエゴのバス会社に電話を掛けて、翌日の7番のバス路線に乗りたいと指定しました。（このバスには、車椅子用のリフトがあります）サンディエゴ69番街大学通りの始発の停留所で、翌日の午後1時に、そのバスを待つように言われました。

1977年8月24日午前11時45分に、イエロー・タクシー会社に電話を掛けて、ダイヤルA・タクシー会社のタクシーが、私を待つところ迄、連れて行ってくれるように頼みました。それからは、La mesaのダイヤルA・タクシ

ー会社のタクシーが、車椅子用リフトのついた特別仕立てのバスの出発点まで、私を運んでくれる事になっていました。

10分もすると、イエロー・タクシーが家の前に停まりました。タクシーに乗って、運転手に料金を出しました。（イエロータクシーの切符は1枚50セントです。）彼は、私の行先を操車係から聞いていました。10分でLa mesaに着くと、ダイヤルA・タクシーが私を待っていました。イエロー・タクシーの運転手が、ダイヤルA・タクシーの運転手に、車椅子がある事を話してくれました。私が動かないうちに、2台のタクシーは、お互いに近づいて停車して、私が楽に移動出来る様にしてくれました。2人の運転手が私の肘を支えてくれたので、私は2歩で、待っていたタクシーに簡単に乗り継ぐ事が出来ました。車椅子も、同じタクシーのトランクに移されました。

ダイヤルA・タクシーに乗って、料金を尋ねました。片道65セントだと言われました。しかし、彼は私に、バスに使える乗換切符をくれると言いました。バスの停留所に着くと、運転手は、すぐ戻らなければならないが、例のバスは、きっかり1時(40分すれば)にくるから、と言って立ち去りました。

バスが、到々やって来て、曲がり角に停まりました。バスの運転手が、ハンドルの近くのボタンを押すと、階段状のステップがおりました。（エスカレーターに似た物です。）もう一つ別に、ステップが飛び出し（引出しに似た物）、車椅子の私は、戸惑いがちに、こ



の小さなプラットフォームに乗りました。車椅子のブレーキを掛ける様に言われました。プラットフォームが、バスのフロアーの高さ迄持ち上がりました。ブレーキをはずして、車椅子用の席迄進みました。車椅子の後車輪が、バスの座席に固定され、シート・ベルトが私の腰にかけられました。さあ、出発です。この間の所要時間は3分間でした。

運転手に料金を尋ねると、先程のタクシーの運転手にもらった乗換切符が使えるから、お金は要らないと言われました。まったく、嘘みたいな話です。

幸い、濃いめのサングラスを掛けていたのので、涙を隠す事が出来ました。この10年で初めて、バスに乗る事が出来たのです。

バスの運転手に、動物園で停まる様に頼みました。私が降りる停留所で、バスは曲がり角に止まりました。運転手がボタンを押し、ステップがエレベーターになり、ここでも同じ段取りで、バスを降りました。真直ぐに2区画行くと、動物園の入口だと教えられました。

バスを降りると幸い、同じ方向に行く若いカップルに会いました。彼は「押しましようか?」と言ってくれました。「ええ、助かります。」と答えました。彼は入口迄押してくれて、私は入場料を払って入りました。

案内係が、観覧バスに乗れると教えてくれました。バスの停留所で、1ドル50セントの切符を買って、次のバスまで少し待ちました。バスが来て、普通のステップしか無いのを見て驚きました。入口の案内係の話では、乗り降りの心配は無いと言うので、坂道のように傾斜しているか、もしくはエレベーターの様な

乗降口を期待していたからです。2人の制服姿のガイドマンが、私を椅子からバスに運びあげて、窓の側の一番目の席に下ろしてくれました。車椅子は、私が戻る迄、折り畳んで、停留所の事務所に残されました。他にも2台車椅子が置いてあるのを見て、私の車椅子も大丈夫だと思いました。

動物園のバス見物は、とても面白いものでした。動物達の多くは、暑さのせいで、居眠りしていました。このバス見物は、40分かかります。バスを降りて、近くのトイレを覗いてみました。清潔で、車椅子用の大きな便座もありました。テーブルと椅子を外に置いた近くのスタンドで、お昼を食べました。ウェイトレスが、私の食事をテーブルに運んできました。私は、ゆっくりと食べ、あたりを眺め、くつろぎ、家路につきました。

帰りのバスは、たった15セントでした。バスの運転手が、事務所の操車係に電話をいれているのを見て驚きました。電話は、運転手の頭の上にあります。運転手は、私にタクシーが必要かどうか聞いてから、操車係に連絡をとっていました。バスが、69番街大学通りの停留所に戻ると、10分とたたないうちに、ダイヤル・Aタクシー会社のタクシーが現れました。

この日は猛烈な一日でしたが、それだけの価値がありました。これで、バスが使えると分かったので、これからは、何度も使うつもりです。

Mrs. Selma J. Sack, 住所: 1052  
Redwood Avenue, Apt. 6. E 1 Cajan,  
California.

(訳 橋詰美智子)

# 世 友 の 界 達

1978年の中頃から、妻と私はミンダナオで切断者やその他形成外科手術を受けた身障者へのサービスを向上させる仕事に従事する予定です。Philippine Band of Mercyという非営利団体の北部ミンダナオ支部の援助により、私たちはCagayande Oro市へ、補装具の製作をするために行きます。

1974年以来、私たちはこの仕事の準備をするため米国におります。また7年間は、バプアニューギニアで経済開発の分野の仕事に従事しておりました。私はニューオーリンズのDelgado大学で補装具の技術過程を最近修了したところです。そして現在、セントルイスのJ.E.Hanger, Inc.社で補装具製作技士として働いております。

妻のNorma Sihayは北部ミンダナオの町Jasaanの出身でLourdes 大学を卒業しております。彼女は米国に来る前は高校の教師でした。

ミンダナオへもどったら、私たちは一緒に働き、切断者を雇って、彼らに補装具製作上のいろんな技術を教え、身障者が自立して生きられるような職場をつくりたいと思います。最終的には製作機械を調達し、部品の製作をする予定ですが、それまでの間は、私たちの機関に寄付される廃品の補装具から使用できる部品を廃物利用しようと思います。全米では毎月何百という補装具が廃棄され、そのほとんどから利用できる部品がとれ、それは、推定4万人の切断者がいるフィリピンで利用できます。

「リハビリテーション世界募金」は、私たちに装具や備品を船便で送って協力してくれ

る予定です。私たちに協力して下さる方は、私の父を通して連絡をとって下さい。(Ralph F.Kienzle, Jr.)

連絡先 Mr.R.F.Keinzle, Sr, 133Bellerive Road, Springfield, Illinois 62704.

**私は32才になるCP(両マヒの)**で、世界中の身障者と文通したいと思っています。私はストックホルム移民局でソーシャルワーカーとギリシャ、スウェーデン語の通訳として働いています。その他に英語、ドイツ語ができ、それにフランス語も多少使えます。

Rosie Kihlblom, Valhallavägen 152B, S-115 24Stockholm, Sweden.

**私たちの協会**は、その会員に、障害者のリハビリテーションのあらゆる分野で必要とされるすべての情報を提供するために近年設立されました。会員の大部分は、けがや病気による脊髄損傷者および頸髄損傷者です。そのため、われわれはあらゆる関連情報に関心をもっています。

Association des Paraplegiques de Verdach, Gaillac-Toulza, 31550 Cintegabelle, France.

**オーストラリア身障者の会(ALPHA)**は、社会的および建築上の障壁を取り除くための統一的活動をする圧力団体になることを目的とした、新しくて活気にあふれた身障者の団体です。発足当時の会員の一人であるMax Rawsonが、ギャゼット誌をALPHAに届けてくれました。私たちはそれにとっても感

銘をうけ、かつ啓発されました。これまで、そんな雑誌のあることに気づきませんでした。これが世界中で読まれるようになれば、より大きなコミュニティが形成されることでしょう。

Miss Deanne Windmill, Secretary, A.L. P.H.A, 3 Burcote Street, North Blackburn, 3130, Victoria, Australia.

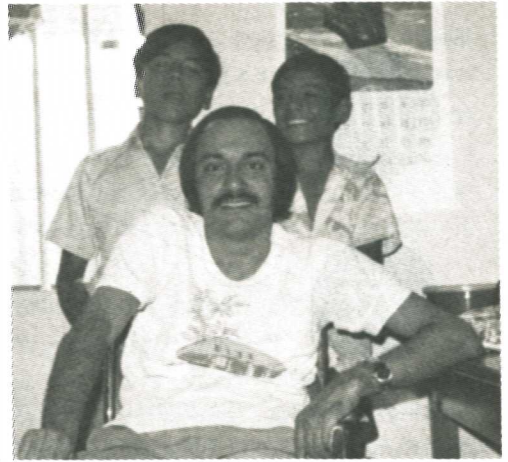
**私たちは、** 対マヒ者と四肢マヒ者のための資料館をつくらうとしています。

Miss Phyllis D. Aldridge, Welfare Officer, Bahamas Paraplegic Association, P.O. Box N4252, Nassau, Bahamas.

**4月に起った** おもしろい偶然の一致についてお伝えしようと思います。私は10年以上も文通を続けた末、チェコスロバキアのプラハに住むJosef Cada博士を訪問することができました。皆さんも御記憶かも知れませんが、'67年号のギャゼット誌で私たちは知り合いになりました。そして、私がプラハの夫妻の家に滞在中に、何と彼は'76年号のギャゼットを受けとったのでした……。私は車イスで完全に使える住宅を備え、障害者住民を完全雇傭するThe innercities (米国でいわれるのとは違い、ここでは望ましい住宅配置をめざす)の再建について、今秋から研究調査を計画しています。

Adolf Ratzka, Professorsslingan  
39/002, 10405 Stockholm, Sweden.

**1973年**、私たちは「対マヒ・四肢マヒ者協会」を設立しました。この協会はホステル・ワークショップ、体育館を総合した建物を建設すること、適切な看護が受けられなかったり、リハビリ用の新器機がないため在宅で寝たきりになっている人たちを援助することを目的としています…。わがフィジー島は、人口60万人で、推定対マヒ者180人、四肢マヒ者が20人がおります。身障者のスポーツ活動は奨励されており、昨年わが国はカナダのパラリンピックに4名の対マヒ者を送りました。



**Hari Kisun,** フィジー島対マヒ・四肢マヒ者協会事務局長と彼の友人2人。

建物建設のため寄付を募っていますのでよろしく……。グループで撮った写真がありませんので、私と友人2人の写真を送らせてもらいます。私はC-6の四肢マヒ者です。

Hari Kisun, Secretary, The Paraplegic and Quadriplegic Association, P.O.Box 249, Lautoka, Fiji Islands.

**ベトナム人民はいま**、リハビリテーションサービスを拡大することに努めています。ベトナムは事故や病気による身障者が何千人もいて、発展途上の問題をかかえている上に、この10年間の戦争で何万人もの戦傷者を生みしました。

われわれは、他の国ではどんな事がなされているのかももっともっと知りたいと思います。わが国のリハビリテーション局長官Nguyen Quy Hung博士は、医学全分野、特にリハビリテーションに関する最新の文献を強く要望しております。

専門家と医療関係者で、文献の収集に協力下さる方、ベトナムの関係者と連絡をとりたい方は下記へ。Ed Cooperman, Department of Physics, California State University, Fullerton, California 92634. 又はFrancoise d'Heurle, Spring Vally Road, Ossining, New York 10562.

障害者を含むその他の方で、出版物、設備



計画をお持ちの方や、ベトナムの現状で役立つ自助具の見本をお持ちの方は下記へ御連絡下さい。Albert Holloway 5580Woodsdale Road, Hanoverton, Ohio 44423.

**ギャゼット誌のブラジル版を発行する組織**のために働いており、1978年3、4月号を創刊号にしたいと思っています。私は今、大学に入るため一生けんめい勉強しています。A. A. C. D. リハビリテーションセンターの概略とリハビリテーション・カウンセラーのRomeo Sasaki氏からの雑報をお伝えします。

A. A. C. D.について——1944年Renato da Costa Bonfim博士が、米国のいくつものリハビリテーション・センターを訪問する機会を得ました。帰国後、彼はThe Associação de Assistência a Criança Defeituosa (A. A. C. D.)をサンパウロ市民の絶大な援助を得て設立しました。1973年、南米随一の現在のセンターが完成しました。1972年センターは拡張され、「国際リハビリテーション基金」から南米地区リハビリ専門職員養成センターの指定を受けました。同年、リハビリ終了者に就業の機会を与えるため、障害者職業指導・斡旋科が併設されました。リハビリテーション事業の進展はゆっくりしてはいますが、その理念は生かされ、同じような機関がブラジルの各州で発足しています。

リハビリテーション研究団体について——1973年来、全国各リハビリテーションセンターと大サンパウロ地区センターを代表して、ソーシャルワーカーが月に一回集まり、サービスの統一、法律の履行、雇傭者の関心、地域から寄せられる情報のデータシステム化を促進するために会議を開いています。

職業リハビリテーションについて——メルセデス・ベンツ社は、事故により身障になった社員に職業リハビリテーション・サービスを提供しております。

リハビリテーション・カウンセリング・プログラム——このプログラムは隔年、カウンセラー志望の、又は新しい知識や経験を求める各種専門家に提供されています。

建築上の障壁をなくすために——

リオデジャネイロ新国際空港は、建築上の障壁がないように設計されました。サンパウロ市の建築学科のある学生は、学位論文の一部として、建築上の障壁の除去についてのレポートをつくりました。

Marisa do Nascimento Paro, Rua Joao Remalho, 145, apto 102. Perdizes - 05008 - Sao Paulo, Brazil.

**私は毎号ギャゼットが届くたびに**どきどきします。その時、私のエゴイズムもびくつきます。なぜなら、他の障害者が何をし、どうしているかを読むたびに、私は自らを誠実に生きているかどうかを問われるからです。そうです、自分は自分に都合のよい評価をしているのです。それは謙遜さを育てるとてもよい訓練です。

Erich Krell, 15 Tester Drive Blackwood, South Australia 5051, Australia.

**私は使用済みのクリスマスカードと切手**を子供達とする作業に必要としています。

Father M.M. Mathew, S.J. Christ Hall, Calicut 673009, Kerala, India.

**私は、McCain監獄に在監中の理学療法士**です。ここへ来る前は中央監獄におり、手術2年、X線1年、理学療法士2年の経験があります。また高校卒業資格G. E. Dをとりました。私がかかっている患者は、対マヒ者9人、切断者3人、腰痛者1名です。これら患者は訓練プログラムに従っており、レクリエーションもあります。私は1日12~14時間、彼らの訓練に当たっています。2週間に1度指導計画を調べに来る理学療法士の助言を受けています。

残念ながら、私たちには十分な機材がありません。中古のものを寄付して下されば幸いです。特に必要としているものは、滑車付重錘運動器、医療体操用ボール、赤外線ランプ、もっと丈夫な平行棒、大きな渦流浴ですが、その他いただけるものならほとんどどんな器

機でも活用させます。

私は中央監獄の Central Tarhill Jaycees の中心メンバーで前にはその会長をしていました。現在は J. C. ニュースレターの編集員であり、また South Sandhills Jaycees 支部の支部長もしています。私は、絵画、重量あげ、水泳、訓練計画の管理、仲間と働くことを楽しみにしています。仮出獄許可が出たら、理学療法士を続けたいと思います。今何でもできることがあるなら、それは私にとって大きな意味があります。

James Lloyd Young, P.O. Box 58, McCain, North Carolina 28361.

**文通をしたい方は、私にお手紙下さい。**

Dick Dobs. 2525 North Broadway. #304, Fargo, North Dakota 58102.

**夫と私は二人とも。**生まれた時からの脊髄マヒ障害者です。Robert は Goodwill Industries の会計係をしており、私は家事専従です。私たちは1960年に結婚し、家族は1匹のブリタニー・スパニエルと私たちだけです。Robert は48才で165cm、私は42才で123cm、私たちの趣味は、音楽、ゲーム、読書、文通それに愉快地遊ぶことです。私は料理、パン焼き、料理研究が好きで刺しゅうもします。私たちはあまり外出しないので、とても孤独です。それで文通をして友人をつくりたいと切望しています。

Jimae Trantham, Jr, 1916 East Cole Avenue, Sherman, Texas 75090.

**補装具士であった Jack E. Conry** は長い闘病の末8月に亡くなりました。Jack は The Warm Springs Foundation, Rancho Los Amigos 病院と The Hot Springs リハビリテーションセンターで働いていました。彼の世話になった全国にいる障害者は、その静かでひかえ目で励ませてくれる彼のやり方を憶えていることでしょう。彼が製作した特殊な自助具で患者はより自立した生活ができるようになりました。

Sarah L. Gephardt, OTR, Chief, Occupational Therapist, Hot Springs Rehabilitation Center.

**私はニュージャージー州の身障者のために、**無料の月刊新聞を編集、出版しようと計画しています。この考えは、私の息子が脳損傷のこん睡でリハビリを受け始めた5年前に生まれました。一緒にやってくれる障害者の方を必要としています。

Dorothy Landvater, 77 Holly Glen Lane South, Berkeley Heights, New Jersey 07922.

**私は多発性硬化症の方や**その他の障害のある方と文通したいと思っています。それに電動ベッドを必要としています。製作費と送料は負担します。私は介助者の問題を、ベトナム人の一家を扶養することによって解決し、一緒に楽しく2年間を過しました。私の趣味はカタログ収集、中国式切り画、家具の装飾とマンガを描くことです。文通の相手を大勢ほしいと思います。

Anne Koontz. 58 West Highland, Sierra Madre, California 91024.

**すばらしい雑誌をありがとう。**この雑誌に捧げられた努力と愛に感謝します。この雑誌のあることを10年前に知っていたらと思います……私はポリオ、対マヒ、四肢マヒ者の方との文通を希望します。私はこの10年間に、カゴの中から動き回れる人間へと長い道をたどりました。体の骨をつつむブレース、片前腕に義手、左頭部にブレースを装着しています。大学院へ通うのには車イスを使っていますが、必要な時には杖で歩き回ることができます。

Jim Hentschel. P.O. Box 10534, Santa Ana California 92711.

**私は Emmett Miller 博士の "Selective Awareness"** という本で自己催眠術を体得しました。これは神経のケイレンに恐らく何よ



ボストンで開催された The National Paraplegia Foundation の1977年度年次総会でのハイライトは、私が子供の頃 San Antonio で治療してくれた Howard A. Rusk 博士と再会したことです。

りも効果のあるものだと思います（もちろん私もケイレンを静めるのに使っているのですが）これは時間もかかり、ずい分練習も積まなければなりません、でもそれだけのことはあります。博士の住所は Emmett Miller, M. D. 1230 University Drive, Menlo park California 94025.  
Frances Dickey, R. N. 3889 Middlefield Road, Palo Alto California 94303,

**"Housing and Home Services for the Disabled"** がようやく手に入りました。

予期した以上に良い本で、必読書であり、長く読みつがれることでしょう……。実践的で明解かつ常識的で、私の知らなかった情報がたくさんありました。索引と住所録が詳細、援助機関、販売所を知るためについています。身障関係の多くの本や雑誌は、感傷的でうんざりするものですが、この本には一言一句も無駄な言葉はありませんし、挿図はどれも飾りでなく情報になっています。この本を一語で表現するなら「有益である」「役立つ」

でしょう。この本とギャゼット誌があれば、あなたはだれよりもよくできると思います。

この本の恩恵をこうむった人々にかわり、「Gini ありがとう」と言わせて下さい。  
Ronald J. Dickson, P.O. Box 46-58, Taipei 104, Taiwan (Formosa) Republic of China.

**「どうやって時間をつぶすのか？」**という問いが私にふりかかってきたのは、私が C 5-6 の頸髄損傷患者として3ヵ月間をカルカッタの S. S. K. M. 病院で過した後、将来についてのはっきりとした考えもないままに故郷の町 Puralia へ帰ってきた時でした。将来のことを考えなければという考えが突然起りました。しかしそれは自分一人でしなければならないのです。

そこで私は、国内および外国でリハビリテーション過程にある人たちと文通することから始めました。Harper & Row 社の医学書部へ手紙を書き、出版社の人はそれをギャゼット誌の Mrs. Gini Laurie に転送してくれました。



そして国際リハビリテーション協会のような組織やギャゼット誌などの存在を知り、また身障者である永井昌夫博士、Mary Verghe-se 博士のような方と知り合いになりました。彼らは今でもその職にあり、リハビリテーション界で立派な業績をあげておられます。

ぱっとしない返事が多かった中で、一通だけよい返事が一人の紳士から返ってきました。その人の住所を私はギャゼット誌から知ったのですが、そうです、その人こそ世界リハビリテーション基金 (W. R. F) の所長 Howard A. Rusk 博士なのです。博士は私を W. R. F の特別会員にして下さり、そして私は M. Natarajan 教授を通して、マドラスの Government General 病院で T. K. Shanmugasundaran 教授、I. S. Shanmugan 教授、S. Soundar Pandian 教授、K. Janardhanam 教授のもとでのリハビリテーション計画をたててもらいました。

1978年10月には、この訓練プログラムを終える予定です。そのあと、インド中を旅行して、私のような人や障害者になったら死ぬより他に出口はないのだと思っているその家族の人たちに会ってみたいと思います。この科学の時代にあっては、「このプランでなければ」といきれないことを私は今知っています。私は今、車とお金を必要としています。この両面で私を援助してくれる組織か個人があればとても嬉しく感謝するのです。

現在、私の家族と友人がとても困っていることは確かです。彼らなしで、私はモラルを維持しつづけることも、また現在の健康状態になることもできなかったと思います。

それに、この文中で、以下の組織および人々に感謝の言葉を送らなければ片手落ちになるでしょう。それは、Puralia の Leprosy Mission、国際リハビリテーション協会、英国脊損者協会、Mr. Eugene J. Taylor, Mrs. Gini と Mr. Joe Laurie, M. Natarajan 教授、W. G. Rama Rao 博士、Mrs. Kamala V. Nimbkar、マドラス医科大学の校長、V. C. Jayram 博士とその家族の方々、Mr. Vasudevan とその家族、形成外科と理学療法科の尊

敬すべき教授陣、訓練での友人、そのスタッフそれに学生たちです。

Dr. Pradip Mumar Mallick, c/o Prof. I. S. Shanmugam, M. B., D. Orth, D. Phys, Med (Lond), Department of Physical Medicine and Rehabilitation, Government General Hospital Madras, 600003, India.

**ギャゼット誌のことを**Mallick 博士から聞き見せてもらいました。私は医学生ですが、事故にあい対マヒになりました。米国から電動車イスをとり寄せたいと思っています。でも私には輸入消費税を含めた費用を払う余裕がありません。どこか慈善団体もしくはライオンズクラブやロータリークラブのような社会奉仕団体でこれを援助してくれるところがないでしょうか。

M. Srinivasan, B. Sc., (M. B. B. S), 14, J. P. East Street. Kumbakonam 612001, India.

**シアトル在住の**Mrs. Ida Daly から Gini Laurie の本 "Housing and Home Services for the Disabled" を知り、ニューデリーで幸いそれを買って求めることができました。この本に敬意を表します。夫と私は、あらゆる種類の障害者を対象としたリハビリテーション研修会に参加しようとしていますが、これはのちにインドのどこかに新しいリハビリテーション・センターをつくることを目的にしています。

Mrs. Doris Ngodup-Widdra, c/o Library of Tibetan Works + Archives, Ganchen Kyishong, Dharamsala, Dist. Kangra, H. P., India.

**マニラ、香港への旅**から無事に帰ってきました。あちらでのギャゼット仲間の住所、氏名を教えて下さってありがとうございます。あなたのお返事は、前に私がヨーロッパ旅行した折に名前を覚えてもらった時と同じようにすぐに着きました。マニラで私は、Society Jesus の James B. Reuter 神父に劇場で会いました。彼はそこで障害者によるショー



を演出していました。香港では、Colin Chan, Jenny Lung と彼らの健常者の友人が空港まで出迎えてくれ、Colin はすべての手配をとってくれ、毎朝私のホテルまで迎えに来てくれました。彼はとてもすてきな人です。36才の学校の先生で、英会話が上手で、手動式のオースチンミニを運転し、すてきな奥さん Merlin と大勢の友人がいます。彼はとても私を歓待してくれました。また入院中の Mr. Chow Chin を見舞ってきました。

Naoyuki Ishizaka. Kanouzan - Jisshudai, Futtsu, Chiba 299-16, Japan.

**カナダ対マヒ者協会 (C.P.A.)** を引退した後も、拘束を受けない、いろいろな仕事で忙しくしております。エドモントンの支部は健在で、私がいた頃より発展しているので嬉しく思います。C.P.A. の The Old Guard も活動を続けています。呼吸器系ポリオの私の友人達も活動的な生活を続けています。Gary McPherson はまだカナダ車イス者スポーツ協会の会長をしており、女王がオタワに見えた折、拝謁しました。……コンピューターのプログラマーたちも活躍しており、The Pro-Data 社はその能力と品質で評判を得ています。……Henri Baril と Fred Kijek は今だに、「口と足で絵を描く芸術家の国際協会」の奨学金受領会員です。……The Associated Canadian Travellers の援助でエドモントンに障害者レクリエーション・センターが建設中です。……

最後に、8ヵ月前に日本人の障害者グループが当地を訪した答礼に、2月にエドモントンの人たち30人（内半数は身障者）が日本へ旅行しました。彼らはとても歓待され、旅行をととても楽しんできました。

Pierre Gariepy, 11910-87th Avenue, Edmonton, Alberta, Canada.

**ギャゼット誌** はリハビリテーションのための最上の情報源です。私はバングラデシュの友人にこの本を送りたいと思います。彼はその国で対マヒ者と四肢マヒ者のための唯一の



私は1969年のナイジェリア内戦で両足を失いました。……1974年から高校に通い始めたのですが……車イスが壊れてしまい学校へ行けません。家に閉じ込められ嘆いています。

Vincent Nwigwe, Champagneint House, Box 688, Uwani-Enugu, Anambra State, Nigeria.

プロジェクトに参画しています。

Ms. Valerie Taylor, Volunteer Services Overseas, P.O. Box 406, Dacca, Bangladesh.

Jill Jones, 1300 Oakland Road NE, # 1414, Cedar Rapids, Iowa 52402.

**私は切断者で28才**です。4年間公認会計士の勉強を続けています。障害者で会計検査官か公認会計士の方と文通したいのですが。

T. A. P. Varadakutti, Chartered Accountant, 107-A, Lake view Road, West Mambalam Madras 600033, India.

**私たちポリオの友人10人**は、この22年間ず

つと2つのRound Robin レター(回覧する手紙)で定期的な文通を続けています。それぞれの手紙は3, 4ヵ月毎に一回転し、ニュース、写真とお互いに関心のあることの切り抜きを仲間に運びます。これは古い友人と苦勞なくつき合いを続けていくよい方法です。

私がこの2つの通信に参加するようになったきっかけは、私が20代前半の時何ヵ月をも呼吸器系ポリオの2病院で過したからです。1952-54年デンバーのColorado General 病院, 1954-55年 Downey の Rancho Los Amigos 病院, 両病院での多くの友人達は、退院後文通し合うことに関心を示しました。このようにして、1955年6月、私がワイオミングの家へ帰った時、この2つのRound Robin レターを始める発起者になったのでした。

どちらのグループも、今では最初からのメンバーが全部そのまま残ってはいませんが、やめた人の後にはすぐに他の人が入ってきました。その人たちの中には、隣の病棟の入・退院患者、ボランティアの人がいます。各々の者が手紙の流れを止めてはいけなないと喜んで協力してくれているのです。

2つのグループの参加者は、一人を除きすべて在宅者です。彼らが施設収容から解放されたのは、1950年代に The March of Dimes の援助によってポリオの病後者を可能な場合、家に帰す特別プログラムが施行されてからです。

参加者の大部分は、家族や友人と普通の生活に近い暮しをしています。そのためこの手紙は普通、最近の家族の活動、たとえば週末や祭日のパーティーの報告とか、新しく生まれた孫の話だとかになります。私たちの手紙は退院後ずっと会っていない遠く離れた友人との友情を保たせてくれているのです。

Round Robin レターのやり方を知らない人のために説明しますと、まず参加したい人の住所付のリストを作ります。まずリストの最初にあげられた人が手紙を書き、それを次の人に送ります。Chain Letter と同じようなものですが、ただし金銭的な報酬やその他の幸運が見返りとしてあるわけではありません。Rou-

nd Robin がみんなに読まれ一周を終えると、最初に手紙を書いた人は自分の古い手紙を取り去り新しいのに入れかえます。そうしたら再びRound Robinは順路をめぐって送られるのです。私たち10人にとって、この文通方法はおつきあいを続けるとてもよい手殺となっています。これがなければ、一年に一回位しか手紙を出さないでしょうし、そんなたまたまの文通では友情もすぐにしばみ失われてしまうことでしょう。Round Robin についての話しをもっと聞きたい人は私に手紙を下さい。

Mrs. Edward G. Leonard, Jr, P.O. Box 681, Douglas, Wyoming 82633.

**私たちの文通の会** Friendship's Door の記事を76ギャザットに載せて下ってありがとうございます。たくさんの手紙が——とくに海外から——届きました。

Maxine Gabe, 2671 Emory Drive East, Apt L. West Palm Beach, Florida 33406.

**私は足の切断手術を受ける前に、**リハビリテーション看護を何年もやっていたとてもよかったですと今感じています。「何もできないんだ」と思っている切断者の方に何かお力になれればいいのですが。悩みをもたれる切断者の方からの手紙をお待ちしています。

Louise B. Quinn, R.N., 15 Ventosa Drive, Morristown, New Jersey 07960.

**私の症状**が神経科医により神経によるものと誤診され、精神科の診察を何年も受けた後で、私はそれが先天的なごく珍しい病氣、捻転痙攣症 (Ziehen-Oppenheim) だということを知りました。16才の時、歩いている時、右足がうまく動かなくなってこの病氣が始まりました。私は大学で心理学を専攻し、その後作業療法士の学校に通いました。……その間も私のびつこと他の症状はひどくなる一方でした。そしてD. M. D 診断法を考案したペンシルバニア大の数人の医師に会うまでに、何人もの神経科医に診てもらいました。その後コロンビア大の神経研究所に行き、それか

らBronxにある St. Barnadas 病院でD.M.D  
の専門医Irving S. Cooper 博士の診察を受け  
ました。D.M.Dについてもっと知りたい方は  
私に手紙を下さい。

Selma Ephross, 15Juniper Drive, Doyle-  
stown, Pennsylvania 18901.

# 自助具・装具／読者のアイデア

「ギャゼット誌」では宣伝は一切していません。ここに載せている補助具や自助具は読者の手紙やその他の情報をもとに、編集者が集めたものです。読者の皆様が、パンフレットや最近の価格を取り寄せ検討できるように

との考えから掲載しています。

「ギャゼット」誌は、いかなる製品も特別に推薦したりしませんし、又記されているおおよその価格についても責任は負いません。

## 車椅子用リフト

*Joe Laurie*

The Veterans Administration(退役軍人会本部)では車イス用リフトの品質管理の必要性を感じ、ニューメキシコ州立大のDean D. Duncan, テキサスA & M大学のMike McDermott, Jr. の両理学博士に車イス用リフトを試験するための基準作成を依頼しました。この基準が官報に掲載されれば、市販のリフトはこの基準に従ってテストされるようになるでしょう。VAが合格と認めたリフトのリストは、VA補装具センター(VA Prosthetics Center, 252 Seventh Avenue, New York, 10001)から1978年夏頃に発表される予定です。

1977年6月28日に「自動車用車イスリフト装置の安全性と品質に関するVAの提唱する形態およびテスト基準」という記事が発表されて以来、VA基準が最終的に決定されたなら、消費者にもっと安全なリフトが提供できるようになるということは明白でした。そうなれば、もしメーカーがVA基準に合わせないなら、その製品は消費者が使用する上でVAの保証を受けられないでしょう。

提唱された基準の中には、車イス用リフト

は2系統のバッテリーによって作動されるべきこと、又それは自動車の充電装置で充電可能なこと。リフトの最大荷重量は明記されるべきこと。装置の形態は厳重に検査すること等が含まれています。この基準には装置が故障した場合に備えて、手動装置を組み入れておくべきことは記されていますが、代わりに作動するリフト装置のあることが望ましいとだけ記され、その詳細は省かれています。

リフト機本体の検査は全米規格協会(ANSI)、全米機械検査協会(ASTM)、全米溶接協会(AWS)と機械工学者協会(SAE)の規格に照らして行われるでしょう。そして品質管理は、最終的にはメーカーにまで及びます。メーカーはこれまであまりに急速に拡張を続けてきたため、障害者向に販売する製品の多くが粗悪だったのです。

話は変わりますが、本誌が前号でとりあげたリフトについてつけ加えたい情報があります。ここ半年の間にわたくしたちは、すてきな2組の夫婦にお会いしました。RivingtonとPauline Stoneはともにポリオで車イスに乗っており、教会の会議に出席するためニューメキ



シコ州のセントルイスからやってきました。Bob McCownはポリオで車イスに乗っていますが妻Rannaとネブラスカと南ダコタ州の家族のもとでクリスマス休暇を過ごしアラバマ州の家へ帰る途中、私たちと新年のイブを

祝いました。彼らの滞在中、両夫妻は現在市販されている車イス用リフトについて懸念を示され、その個人的な体験と専門的な意見をギャゼット誌に寄せて下さいました。

## 自分で自動車の設計をしよう

*R. B. McCown*

*R. Christenson*

(Bob McCownは1954年呼吸器系のポリオにかかり四肢マヒです。彼はネブラスカ州のHastings Collageで文学士の資格をとり、スタンフォード大学で理学修士と博士号を修得しました。現在南アラバマ大学で物理学の助教授をしています。Ranna Christensonはスタンフォード大学で理学士を、アラバマ大学で医学博士号を修得し現在、南アラバマ大Medical Centerで産婦人科の実習中です。彼らの住所は、5663 Vanderbilt Drive South, Mobile, Alabama 36608。二人は1973年8月4日結婚し、今2匹の猫を飼っています。)

昨年の夏、私の家の特殊装備したバンが故障し使えなくなり、買い替えなければなりませんでした。ところが私どもの住んでいる近くには、身障者用に特殊装備したバンを取り扱う会社がなかったのでまったく落胆しました。しかし、この危機が私たちにドキドキするような新しい経験に挑戦させてくれたのです。つまり私たち自身でバンを設計し、しかもそれが標準型のバンより安くできたのです。

私たちはキャンピング・カーによく似た高価なMotor homesが、ピックアップ型のトラックの上に乗せられていることに気がきました。もしトラックの後端を切り落しキャンピング・カーをくっつけるなら、そのCamper-pickupという合いの子はバンになるはずで

す。私たちの家から車で2時間たらずのアラバマ州Huntsvilleには、自動車会社が数社あります。ある会社の社長さんが、喜んで私たちの新型Camper-Pickupの設計と製作を引き受けてくれました。

私たちは健常人によって運転されるということの他に、次のような特装を要求しました。油圧式リフト、車内の車イス上から道路がよく見えること。運転がしやすいように幅はピックアップの荷台より広くないこと。車高は立ってもゆったりしていること。適切な保温、暖房(アラスカ州基準による)。車イス固定装置と床からの車イス用シートベルト。安全確保のためのスチールの手すり。真夏にエアコンなしでも十分な換気のできることです。

キャンピング・カーの会社に3度通り、下図を数回反古にしたすえに設計図が完成しました。2、3週間後、0.75トン積みのピックアップ型トラックに手すり用鋼管と、手を加えないままのTommy Gateの油圧式リフトをそえて会社に引き渡しました。トラックについていたベンチ型シートは、その前にバケット型のものにとりかえておきました。

5日後、私たちは完成したバンを受けとりました。その会社では、手すり取り付けのために溶接工を備い、又リフトに鉄板を付け足してそれに傾斜板をとりつけてくれました。これはリフト本体とは別に作られたのです。



**Bob McCown**の特殊装置車と**Tommy Gate**の油圧式リフト。私たちはリフトに鉄板をボルト止めにしてつぎ足し、それに傾斜板をつけましたが、これは車イスが後方から転落するのを防止します。

手すりを含めた総経費は、後部ドアぬきで2000ドル（40万円）でした。

皆さんがどんな車を設計するにしても、次の基準は役立つのではないかと思います。窓は障害者の乗員の目の高さにつけること。高性能のヒーター。キャンピング・カー内の乗員のためのクッション入り座席とシートベルト。夜間の荷積みのため車内・外に灯をつけること。運転手・乗員間の連絡をよくするためにインターホンをつけること。後部ドアはキャンピングカーの左後方につけ、右に蝶つがいと開扉に保つためのフックをつける。運

転手のためリアーウィンドウをつける。車の両側に後部ミラーと凸面ミラーを併用して視界をよくすること。

手すりは直径1 $\frac{1}{2}$ インチ(38mm)の304番のステンレス鋼管10本を溶接して作られました。ステンレスの利用はその高度な技術をこなせる職人のいる所でのみするように、又は地元溶接工に代替になるものを考えてもらって下さい。

この車の長所は、自分で設計でき、新型トラックに改装できること。窓からの見晴らしの良いこと。後部のリフトはどんな駐車場でも使えること。手すりによって安全性が増したこと。低価格。介助者が介助しやすい。多くのバンより小型。手入れや修理に金がかからない。キャンピング・カーが作られている所ならどこでも調達可能なことです。

欠点は、身障者に運転できないこと。リフトが後部にしかつけられない。車高によって駐車場が制限される（私の車は高さ2.7m）。バンより床面積が小さい。障害者は運転手の後ろに座る以外にないこと。トラックにしては燃費のよくないことです。

私たちはdown-home aidからの補助金と、Kimberly Kampers社（309Columbia Avenue, Lawrenceburg, Tennessee）のJimmy Stewart氏の御協力に感謝しています。彼は奇妙な設計図を前にして考え深げに頭をかきながら、すばらしい傑作をものにしてくれました。

Tommy Gateの油圧式リフトはWoodbine Manufacturing Company（Woodbine, Iowa 51579）製です。又同社が市販している1000ポンド用（450kg）リフトは身障者用に作られたものではありません。

リフトの主要な部品は標準タイプのものを使います。ワイヤーロープは飛行場ならどこでも手に入りますし、世界中ほとんどどこでも交換用のものが得られ互換性が完璧です。毎日5時間使用していますが支障は全くありません。私はリフトにつぎ足した鉄板の先端にこのワイヤーと傾斜板をボルトでとりつけ、車イスがころげ落ちないようにしています。

Tommy Gateは市販のどんなバン、ピックアップ、配送用トラックにも使用可能です。扉は後方にだけ取り付け可能で、開閉は手動ですが、開閉用スプリングのついたものを注文しておく方がよいでしょう。私たちは身障の

運転手でも開閉ができるよう電動モーターを取り付けたものを見たことがあります。Tommy Gateは直接メーカーに注文して下さい。価格は送料、取り付け料、傾斜板を含めて700ドル（14万円）です。

## 人工呼吸器

——現在使われているもの、および最近の発展——

W. Sunny Weingarten

最初のタンク型呼吸器がハーバード大学の学生Philip Drinkerによって作られたのは、1929年でした。彼は鉄の肺と一般に呼ばれているものの前身であるこの発明に対して、ほとんど金銭的報酬を受けませんでした。

1937年、John H. Emersonが初の現代型鉄の肺を設計・製作しました。この鉄の肺は前者と同様、患者の頭を除いて全身を、小型モーターで作動する蛇腹式の風袋で陽圧(加圧)陰圧(減圧)をかけられる圧力室の中にとじ込めねばなりませんでした。鉄の肺とは胸全体、胸廓、腹部に一定の圧力をかけ、鼻や口から空気を吸い込ませて呼吸を促進させるものです。

鉄の肺は1930年代、首から下がマヒしたポリオの患者に対して使われたのが最初です。そして、ポリオを駆逐したソークワクチンが使われだして23年目の1959年に鉄の肺の生産は中止されました。

1949年、HuxleyとMonaghanが最初の胸部密閉器型人工呼吸器を患者に使用しました。陽圧・陰圧は真空掃除器に似た、それぞれ独立した装置によって行われ、容器は身体が入り装着可能であれば胸部、胸廓、腹部までも覆えました。より広い範囲を覆えればそれだけ呼吸機能もよくなります。この機種は重さ800ポンド(362kg)の鉄の肺よりはるかに携

帯に便利で容器とホース、圧力装置を含めても100ポンド(45kg)足らずでした。その後しばらくして、彼らは12ボルトの自動車用バッテリーを使い装置を2・3時間動かせるようになりました。'

1950年代の初め、数社が"rocking bed"(電動ベッド)というものを製作しました。その製品は1953年からはJ. H. Emerson社が製作・販売しています。このベッドにのる患者は、呼吸を促進させるために足を30°の角度に上げて寝かされます。頭を30°下げた位置にベッドが電動モーターでセットされると、患者の横隔膜は上がり呼気が楽になります。ベッドが足を下にして30°の位置にセットされると、横隔膜が重力で下がり吸気を助けます。

1950年代中頃になって、最初のintermittent positive Volume ventilators(間欠的に陽圧をかける呼吸器)が病院に限られてですが使われ始めました。この装置は肺炎、中毒、感電、ぜんそく、脊損、神経マヒなど呼吸筋の衰弱やマヒをひき起す患者に今なお使われています。陽圧をかけることによって患者は、鎖骨の上都にある気管切開を通して空気が強制的に送り込まれ呼吸をうながされます。Bannett社がこの病院用機種については当初から最大のメーカーで、Emerson社が少しおくれて生産を始めています。





W. Sunny Weingarten は1949年、7才の時、呼吸器系のポリオにかかり四肢マヒです。彼は鉄の肺を1日16時間おもに就寝時使い、その他の時には陽圧式のものを使っています。彼はリトルリーグの野球チームの運営とコーチをし、ある高校で個人的にギターを教え、週20時間はソーシャルワーク、政治科学、キリスト教文学の読書と勉強をしています。また、宣伝会社の共同経営者で、競争用自動車を数台持ち、最近友人のパイロットと4人乗りの飛行機Cessna Skylane を買いました。

1956年、Thompson呼吸器会社がBantamと呼ばれるポータブル型のPositive Pressure respirator（陽圧型呼吸器）を初めて開発しました。これは重量がわずかに17ポンド（7.7kg）でVolume Ventilatorと同量の空気を気管または口を通じて送り込みます。この当時Thompson社ではPneumobelt（呼吸用ベルト）と一体になった胸部密閉容器型呼吸器を同時に世に出しました。Pneumobeltは胴の廻りにつけたコルセットの内側に空気袋をつけ呼吸を助けるものです。別体の圧力装置で空気袋をふくらませ下腹部を圧迫し、患者の横隔膜を持ち上げ呼吸を促進し、空気袋がしぼむと腹部への圧迫がなくなり、横隔膜は下がり呼吸を促進します。患者は重力が横隔膜を引き下げるのに最大の効果を発揮できるように座位を保ちます。そうしなければ呼吸気は著しく低下することでしょう。

1961年Thompson社はHuxley社のcuiras（胸部密閉容器）と圧力機の販売権を買とり、それ以後“小型の鉄の肺”——陽圧型呼

吸器Bantamの開発の途が開けたのです。

現在アメリカでは、約5000台の様々なタイプの人工呼吸器が約2500名の呼吸器系患者に使用されており、平均一人が二台所有していることとなります。これらの患者は、次の3つのグループ、神経マヒ40%（1000人）、脳性マヒ35%（875人）、脊損25%（625人）に分類されます。

これ以下、文中で示される装置の台数は、家庭で日常的に使用されている数で、病院で一時的に使われているものを除いてあります。

今日、350台の鉄の肺が使用されており、そのほとんどがEmersonタイプです。これらはポリオの神経マヒ者に使われており、脊損者、神経マヒ者の使用はごくわずかです。胸部密閉容器型で日常的に使用されているのは1000台でポリオの500名が使用者。障害者となったばかりの人の中には、不適切な呼吸が呼吸器筋を徐々に弱めるので胸部型を希む者があります。Positive Pressure respiratorsやPositive Volume Ventilatorsは、機能的にすぐれ、小型化されているので、ここ10年以内に胸部型のかなり多数がこれに代えられるでしょう。

約350台の電動ベッドは主に呼吸器系障害のあるポリオ患者に使用されています。これらは通常夜間、睡眠中に使われます。

ポリオ、脊損、神経マヒ者で400個の呼吸用ベルトが使われています。

Positive pressure respirators 2500台、Monaghans 300台、Thompson社のBantams 2500台が口又は気管に直結される形で脊損、ポリオ、神経マヒ者に使われ、Positive Volume Ventilatorsは400台、そのほとんどが神経マヒ者に使われていま。ポリオ患者はこのすぐれた機種に気づくのが遅れたようです。Positive Volume VentilatorsとPositive Pressure respiratorsは鉄の肺と同等の機能を持ち、適用範囲も広くその上携帯に便利です。両機種とも計測方法が異なるだけで送り出す空気の容積は変わりません。

この人工呼吸器の分野は、携帯用の装置がより多く作られ、あらゆる種類の呼吸器患者

に使用されることにより、ここ10年以内に間違いなく最大の成長をとげることでしょう。20年前には、頸部に損傷を負った者は、呼吸器の療法が不適切なためと、矯正手術の未熟から生きのびることができませんでした。現在、Positive Volume VentilatorsとPositive Pressure respiratorsのお蔭で、外傷性の最重度の四肢マヒ者でも生きられるというだけでなく、十分にリハビリ訓練をすれば、種々の自助具を使うことにより電動車イスを運転することもできるのです。

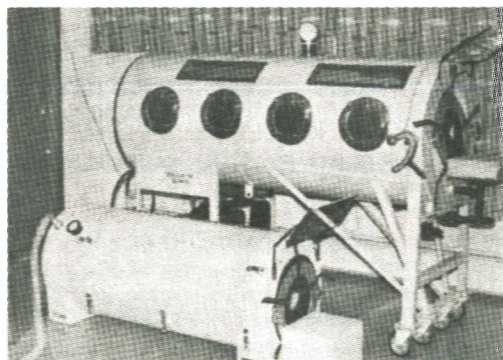
私は1976年の冬に、Life Products, Inc.社 (Boulder Colorado)が設計・製作したLP 3型Positive Volume Ventilatorの試作品を試してみる機会を得ました。テストを十分した上で、1号機を買い入れ、それ以来週平均35時間一年間使用してきました。LP 3型はこれまで作られた内では最初の純携帯型PVVです。これは自動車用バッテリー1個で24時間作動させることが可能で、3000ccの空気を周期的に送り出します。また緊急用バッテリーが内臓されていて、1時間作動するようになっています。呼吸間隔の調節は正面の操作盤ででき、とても便利です。BantamやMonaghan1700と違ってCP 3の呼吸パターンは、非常に自然でなめらかです。私はもっぱらこの装置を2、3日の旅行に数回使いましたが、結果は良好です。Bennettの顔マスク (Bennett Cascade Humidifier) と併用しなければなりません。これは口喉の異状乾燥を防止します。また鼻マスクは日中使用しますが、適切な湿度を保てます。Sears Diehard社の12V自動車用バッテリーはLP 3に使用して約2年保ちますし、LP 3と一緒に車イスに積むこともできます。

私は25年間同じ部屋で寝ているので、小型の鉄の肺を設計し作りました。30日間をテストに費した後、鉄の肺に換えてこれを使っていますがまったくうまくいっています。呼吸筋のきかないので、私は胸部密閉容器型や電動ベッドや呼吸ベルトでは十分な呼吸ができません。それに鉄の肺は携帯できないし、

それにかわる呼吸器もないので私はPortaLungを設計しました。これはタンク型の呼吸器で、風袋はなくモーターが鉄の肺にとりつけられています。Thompson Portable又はMonaghan170Cの圧力装置が陰圧・陽圧をホースで送り込みます。私は去年このPortaLungを使って、3600マイル2週間のカリフォルニアの旅を含み7州、7000マイルを旅行しましたがトラブルはありませんでした。今、PortaLungは主に夜寝る時に使い、旅行や観光の際にはLP 3を使います。PortaLungは私が1949年以來ずっと使ってきた、陰圧で36cm、陽圧で23cmの最大圧をもつEmersonの鉄の肺と同等の機能を果しますし、重量は100ポンド (45kg) でバンカステーションワゴンの中で使用することも十分可能です。郵送料は航空便なら世界中どこでも航空券の約半額、船便ならもっと安くなります。

ここに記した器具のほとんどは、Life Care Services (5505 Central Ave. Boulder, Colorado 80301) で取り扱っています。

LP 3型PVVとPortaLungはLife Product's Inc.社の製品で、問い合わせは私のところにして下さい。それについてお答えすることは私の喜びとするところです。



Sunnyは準携帯用のファイバーグラス製「鉄の肺」を設計し組み立てました。これはPortaLungと名づけられ、注文によって彼が製作しています。(写真撮影 Harley Fehlman)

## 読者のアイデア

### 改良型バッテリー充電器

ボブは一年に一箇の充電器を使いつぶし、6～9ヵ月毎にバッテリーを買いかえていました。バッテリーが50ドル（1万円）、充電器が30ドル（6千円）し、とてもお金がかかったのです。そこで手に入るかぎりのあらゆる銘柄の充電器をつぶさに調べた結果、Heathkitの充電器を注文することにしました。それは自動充電装置を備えたHeathkit Model GP21、10Amp-12Vという型で、ある友人が組み立ててくれました。この品のように試験的に販売されている製品は、きわめて簡単に組み立てられるように作られているので、主婦でさえ組み立てられます。

この充電器は他のほとんどのものとは異なる原理で作動します。たいていの充電器は持続的に電圧をかけ、バッテリーが完全に充電されてからも電圧をかけ続けますが、これは電気のムダであり、バッテリー液を早く蒸発させ充電のたびにバッテリーを少しずつ傷めます。Heathkitは充電していくにつれて充電電圧を変化させます。つまりバッテリー内の充電量を検知しながら徐々に電圧を下げるのです。ですから充電の終るまでに充電電圧はゼロになります。約60秒毎にどれだけ充電されたかを調べ、その時の容量の増加につれて徐々に、ゆっくりと静かに充電し遂に停止するのです。

もう一つのすばらしい特長は、バッテリーのプラス、マイナスを逆につないだりしても、バッテリーも充電器も傷まないことです。充電器が誤りを検知し、それが修正されるまで大人しく待っており、その間何もしません。もし充電中に充電器に触れても何も起きません。以前は充電中は危険で人を近づけられませんでした。何よりも良いのは、バッテリーの寿命が私たちの見るところでは25%も延び、

充電器も4年間は交換する必要のないことです。また新方式の充電器では、液を沸騰させることがないので、それほど液を補充する必要がありません。この充電器は今出回っているどの品よりも格段にすぐれていると信じています。充電時間も他の機種と変わらず、ほとんど空のバッテリーで6～8時間です。サイズは8×6×4インチと携帯にも便利です。

問い合わせは、The Heath Company (Benton Harbor, Michigan 49022) へ手紙で。

他の方式の充電器もありますが、物理学者のBobの意見では、この機種が最上だそうです。

Ranna Christenson, MDとBob McCown, PhDの住所は、5663 Vanderbilt Drive South, Mobile, Alabama 36608.

### マウスティック用ホルダー

私は絵を描くのに、ボールペンのさやを絵筆や鉛筆のホルダーにしてそれを口にくわえて描いています。口当りが柔かく心地よいようにゴム管をそれにかぶせています。

Leo Lucas, 250 Winter Street, Hyannis, Massachusetts 02601.

### じょくそう予防にARTFOAM

20年間治らないお尻のじょくそうと苦闘した末、私はARTFOAMをじょくそうにすぐ接している局所に挿入してみました。ARTFOAMは薄手の工芸品で、ほとんどの工芸品店又はデパートで手に入ります。私は倍の厚みにした方が快適でききめがありました。2ヵ月でじょくそうは治り、再発しません。

Ms. Edna Thorson, Box 255, Grand Meadow, Minnesota 55936.

### 警 報 器

プッシュボタン式で高音を発する船舶用警笛。15オンス、10ドル。Marine Products



Division, Penguin Industries Inc.  
P.O.Box 97

### 棒レバーを押すか引くか して鳴らす警報器

手の掌に入るほどの小型。8ドル, 57g。

Invento Products, Long Island City,  
New York 11104

### 食事用の機械

12本の金属の手の上に48さじ分のそのまま食べられる料理がのせられ、モーターで動くスプーンでCP又は多発性硬化症の方の口に運びます。発明者Garland S, Sydnor, Westminster Canterbury House, 1600 Westbrook Avenue, Apt. 820, Richmond Virginia 232327

### 自分で操従できる電動ホイスト

私は、ポリオで11年間車イスに乗っていたEdie Danabergと1955年結婚しました。私自身は軽度の脊損です。私はEdieの必要にあわせて家の設計をし、彼女を荷物用リフトでベッドから乗り降りさせていました。私が脊髄



Edith Ransonは電動ホイストを使って自分でベッドに乗ることができます。

を傷め手術を受けねばならず、しばらく車イスに乗っていた間、車イスに乗ったままでこのリフトの操作をするのは大変でした。私たちは天井に電動ホイストをとりつけることを夢み、設計図を描き上げました。それをエンジニアの友人が作り、取り付けてくれました。今ではホイストが寝室のベッド上の天井を横切り前後し、Edieはホイストについての小型のコントロール・ボックスのボタンを押すだけでベッドに乗ることができます。Earl F. Ransom, 413 Willow Street, Pennsylvania 18505,

## 車椅子

### 車椅子用透明の盆

Medical Equipment Distributors, Inc. 1215 South Harlman Avenue, Forest Park Illinois 60130.

### 米国製車椅子

電動リクライニングシート、足台も電動で上下可能。Medical Care Products, 1615 University Boulevard West, Jacksonville, Florida 32217.

### 旅行用組み立て椅子

公共交通機関又は劇場の椅子にぴったり合い、携帯用取手つき。YAD Inc, Route 2, Box 78, Ladson, South Carolina 29456.

### 車椅子の固定装置

CIL社の固定装置は市販の重量物固定装置をそのまま使っています。このベルトは5000ポンド(225kg)の重さを支え、物をしめつけられるので、車イスのフレームにかけバックルでゆるみをなくせます。ベルトはバンクの床にボルトで止められた金属製のレールにとり



手漕ぎの三輪自転車、5段変速、2つのブレーキ装置がつき、後輪はサスペンション式、座席と足台は調節可能です。お求めは、World Industries, 16015 West 5th Avenue, Golden, Colorado 80401.

つけられ、とり外しも簡単です。このレールは長さ10フィート(3m)、高さ $\frac{1}{4}$ インチ(6mm)のもですが、もし車イスを一台だけ固定するなら、長さを半分にして車イスの両側に取り付けることも可能です。1台の車イスに2本のベルトを使用して下さい。

Center for Independent Living, Inc, 2534 Telegraph Avenue, Berkeley, California 94704.

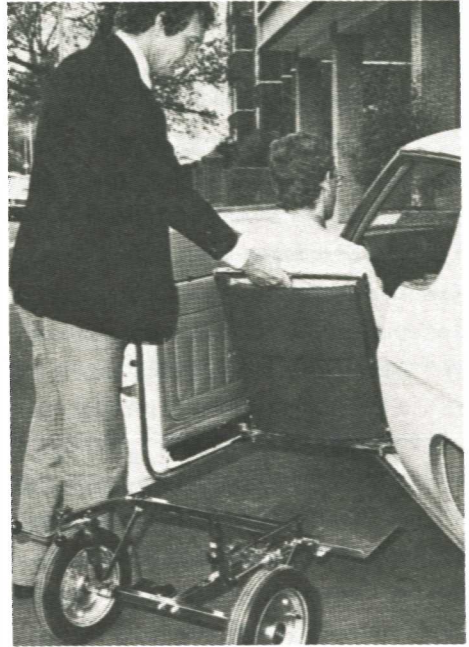
### 車椅子搭載機

EZ-1は車のトランクからの車イスの出し入れをととても楽にします。詳細は下記へ。  
The Wheelchair Carrier Corporation, P.O. Box 9328, Phenix Arizona 85068.

### 英国の小冊子

シリーズの一冊で題名は“Wheelchairs” (車椅子) 5ポンド( )と送料を添えて下記へ。

Equipment for the Disabled, 2 Fordown Drive, Portslade, Sussex BN4 2BB, England.



オーストラリア製旅行用車イス：車イスのシートの下についたローラーがドアの溝とかみ合い、車の床のすべり止めで保持されるので、ドアを閉めるとそのまま助手席にすべり込むこととなります。足台は取り外し可能。  
製作：Crozier Chairs Pty Ltd, P.O.Box 188 Wangaratta, Victoria, Australia 3677.

### ショック・アブソーバー

ショック・アブソーバー  
石ころ道でも快適です。National Handicrafters, Inc. P.O.Box 1513, Decatur, Georgia 30031.

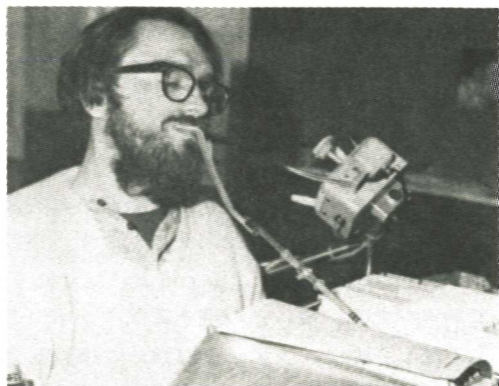
## マウススティック使用者の ための特別設計オフィス

「カリフォルニア州リハビリテーション局のRahcho Los Amigos病院のコンサルタントをしているA.G.Garrisから手紙が届きました。

同封しましたのはArthur Heyerのオフィスの写真で、私の秘書のAngela Marquezが写しました……Arthurは自分の事務所の設計を全て自分でやりました。ここで彼は人手を借りず働き、業務上必要なことはすべてこなせます。彼は同じような重度障害者のためにここで、設計をしているのです。私たちは彼のビデオテープを見せながらカウンセラーの方々にお話しするのですが、これは魔術ではありません。適切な装置と場所と十分な訓練とそれを生かす動機づけが整っているだけなのです。この事例は「マウススティックを使う人に何ができるのか？」という問いへの一つの答えとなるでしょう。」

Arthurは17才の時、不運にも水のないプールに飛び込み、以来C3-4の4肢マヒです。メキシコのGuadalajaraで機械工としての訓練を受けた後、1975年妻Florを併ってカリフォルニアに移住してきました。

彼はRancho Los Amigos病院（500Hut, 7601East Imperial Highway, Downey California 90242）の人間工学室に勤務しています。



Arthur Heyerがマウススティックを使って紙をファイルしたり、とり出したりしています。

そこで彼はモデルハウスを設計し、入院中あるいは退院後の患者が設備を見学し、実験試用できるようにしているのです。このモデルハウスは、彼が運営するProject Threshold Rehabilitation Engineering Serviceの事務所で、ここで彼は一人一人のニーズに合わせた設備を設計しています。

同封したArthurの机の写真をごらんになれば、環境を当人のニーズに合わせるというエンジニアとしての彼の才能がよくお判りでしょう。机はU字型をしていて、大型紙のファイルはUの左側におかれています。彼は傾斜台に登りマウススティックを使ってファイルの出し入れをします。タイプライターは机の中央部にあり、Lazy Susan（回転傾斜台）の上のせられており、これはマウススティックで回転します。彼の携帯用テーブルはU字の右側に置かれており、隣りに電話があります。机の上は字や図を描くために、机の中は貯蔵用に使っています。

彼のV字型のマウススティックは、口にくわえたままで話しをするのに便利だということも注目して下さい。マウススティック用のホルダーは車イスについており、車イスは操縦もリクライニング操作もあごでやります。



彼のタイプライターはLazy Susanの上のっています。



## 野外での小用について

私はあまりに幼くして、6才で、ポリオになりましたので、必要なときにトイレに行くことも覚えませんでした。当然のこと何度かそそをし、我慢するつらさに長時間耐えることを憶え、しだいに外出の予定があるとよくよするようになりました。

20代の後半になるまで、このことに関してはほとんど進歩はありませんでした。ある時私は友人と西部諸州を通してカナダ縦断のキャンプ旅行に出かけました。休憩所の間隔はととても遠く、私たちは野外で小用をする習慣を身につけました。つまり、私たちは車を道路わきに停め、彼女がヤブの中に入っている間に私は車のドアを開け、車の床に下りて下着を下ろし、車の縁越しにしますのです。この開放感は予期せぬものでした。ひどい不法作者だけがこの味を知っています。

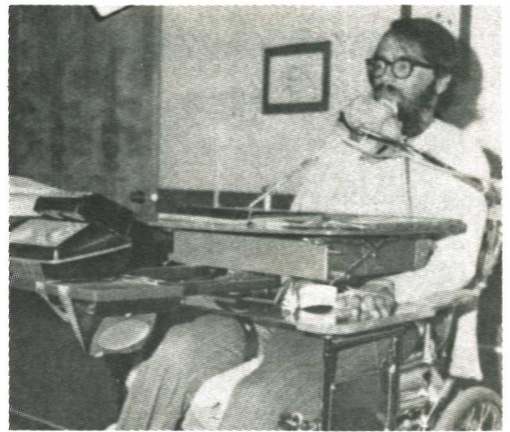
その後、一人で旅行する時私はもっと大胆になりました。車をわきに停め、シートの前方に体をずらし、プラスチックの2カップ料理用カップをお尻にあて、し終わったら車の窓から棄てるのです。何年もの間、私は風光のよい各州のハイウェイや緑の多い郊外の曲り角で、又素適なスーパーマーケットの駐車場で用足しをしてきました。

私はいまだに、そのような原始的な悪癖に少なからず抵抗を感じます。でも率直なところ、これは私をハッピーにしてくれます。それで自責の念も薄らいでしまうのです。

Eleanor Smith, Atlanta Rehabilitation Center, 1599 Memorial Drive, S.E., Atlanta, Georgia 30317.

## 食事用の道具EASY-FEED

この自助具は、テーブルに皿置き台を締め具で止め、のったお皿が廻せるようになっています。お皿の端に食べ物をのせ、口でお皿を廻します。15.50ポンド(7.1kg)  
Newton Aids Ltd, 2A Conway Street,  
London W1P 58E, England.



携帯用のテーブル、彼は車イスをあごで操作します。

## SAAB車の身障者用改造部品

特別設計の手動運転操置と回転・横ずらしのできる座席を SAAB SCANI OF AMERICAが取り扱っています。住所は, Saab Drive, Orange, Connecticut 06477 又は Scancar, Ltd, 860 Progress Avenue, Scarborough, Ontario Canada.

## 関節炎患者のための小冊子

あなたの地域の Arthritis Foundation にお問い合わせ下さい。次のような本があります。Self-Help Devices for Arthritic Patient. Living More Comfortably With Arthritis, Home care Programs in Arthritis.

## トイレトペーパーの代用品

私の母が選んでくれたプラスチックの棒の先にスポンジの付いた家庭用掃除道具を関節炎のある手で使って後始末ができます。彼は Hi-Kopproducts 社の "Scrub Pal" を使っているのです。彼はその柄を電気ストーブの上で熱して曲げ、エポキシ樹脂性の接着剤で 8 インチ (13cm) の薄い板を十字型の柄になるように取り付けています。詳細は本人にお問い合わせ下さい。

Lawrence J.Meinen,Route 3,Box268,  
Chippewa Falls,Wisconsin 54729

## INDEPENDENCE FACTORYからの お知らせ

この組織は自助具の考案・製作をしているボランティアが集った非営利団体です。あなたのかかえる問題をお知らせ下さい。料金は無料です。なぜなら私たちも問題を解決することによって勉強できるのですから……………

私達が製作し売っている自助具の価格表と数々の考案を3冊の手引き書にまとめた本があります。本の題は“How To Make It Cheap” (いかに安く作るか)です。1・2巻は1.50ドル(送料別),3巻2.50ドル(同左)

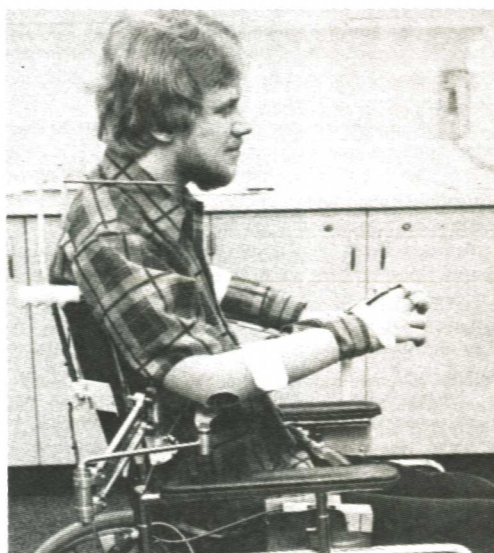
Fred D.Carroll,The Independence Factory,  
Box597,Middletown,Ohio 45042.

## スウェーデン式上腕保持機

1977年6月オンタリオ州北部で事故が起りました。大鹿が私の車の屋根の上に飛び降りてきてぶつかったのです。車の屋根は落ち、私は首を折りました。トロント総合病院で2ヵ月過ごした後、実家のあるピッツバーグへ飛行機で運ばれハマービルリハビリテーションセンターに入院し、8ヵ月間訓練を受けました。

私の面倒を一番よくみてくれたのは、南アフリカから来たMiss.Christa Mayerという作業療法士でした。Christaはそこに四肢マヒ者についての本の共同執筆者としてきていたのでした。彼女は私のリハビリテーションを、スウェーデン式上腕保持機を使うことから始めました。そしてリハが進むに従って、私の自立をはかるため新しいことを考えてくれた。

事故が起こる前、私はウェストバージニア大学(WVU)心理学科の2年生でした。センターにいる間、私はWVUの一教授の指導のもとに自習プログラムをたててもらい、学位をとるための勉強を続けることができました。ソーシャルサービス指導員と私を担当したソーシャルワーカー、職業指導員の力もあ



Terry Mooreは外傷性の四肢マヒでスウェーデン式上腕保持機を使っています。

って、私はハマービルの患者の障害の受容についての研究をまとめることができました。WVUから来てくれた教授はレポートを採点してくれ、そして私は6単位の履修証明をもらいました。

センターを出てから、私は2人の友と一軒の家に住んでいます。一人が料理をつくり、もう一人が皿を洗います。毎朝看護婦さんが私の体操をしに来て、学校へ行く仕度をしてくれ、夕方には医療管理をしに来てくれます。

私はWVUに復学したかったのですが、大学は車イスでの利用ができません。そこでピッツバーグ大学で勉強を続けることにしました。しかし学位はWVUでもらえる予定です。

援助を願い出ることは特に相手が見知らぬ人の場合、易しいことではありませんでしたが、今ではもし私が口を開きたのみさえすれば、求めて叶えられないことのないことを知っています。

Terry Moore,3254 Southpark Road,  
Benthel Park,Pennsylvania15102.

(訳 中西正司)

---

# フォトニュース

---



馬術療法：セントルイスのイースターシール協会の後援する非営利団体では1975年から、あらゆる年齢層の身心障害者を対照に馬術を教えている。Laura CarpenterがWeldon Springにある自分のThree Creek農場を寄附し、(馬と付属品も)彼女自身も教えている。3人の療法士(Susan B. McCrackin, PT, Kathy Garrity, PT, OT, とDixie Sleight, OT)が患者を能力別に分け、個人レッスンを受け持つ教師を助けている。

問い合わせ先：Therapeutic Horsemanship,  
Route, 1 Valley Road, Pacific, Missouri  
63069.



Margaret Mary BailorとRichard Alan Goodwinは1977年11月26日結婚した。Dick (C-5-6)は全米パラプレジア協会のセントルイス支部の副会長であり、Goodwill Industriesにおける雇用促進プログラムの協力者である。





1977年8月セントルイスで初めて、一般バスに車椅子用リフトを取りつける運動が行われた。1977年12月までに運行中のバス900台の内157台に取りつけられた。

問合わせ先：Ms. Deborah K. Phillips,  
Program Development—E/H Section, Bi-  
State Developing Agency, 3869 Park Ave-  
nue, St. Louis, Missouri 63110.



1978年1月、四肢まひのBill Dais(Harry S. Truman Restorative Centerに住む)は Forest Park Community大学に入学し、電話を通じて2課目履習することになった。大学から教授2名とカウンセラーがBillを訪れ、電話のリモートコントロール装置を調べた。

(左から右へ、Eb. Helbig, PhD. Bill, Kay M-MacCarthy, OT, Jim Tuscher, カウンセラー, John J. Martin 教授) Billは1976年にあき地でフットボールの試合中に負傷した。保険金と寄附金の5万ドルは、Craig病院での数ヶ月にわたるリハビリテーション、呼吸で操作する車椅子、電動タイプライター、テレビ、リモートコントロール装置等に使われた。(写真, J. Scott Laurie)

—リハビリテーション交流セミナー'78, '79より—

## I. 重度障害者の独立生活

(司会) 永井昌夫 (国立身体障害者センター)

### (1) はじめに

初めにテーマの説明をしたい。ここでいう重度障害者とは、単に一種一級の身体障害者を指している訳ではない。他の人の介助なしでは社会生活どころか身の囲りさえも不可能な人々のことを指す。裏を返せば、ケアがあれば人格に相応した生活が期待できる人たちのことで、従来は、超重度障害者または患者の段階にあるとして、顧みられなかった一群の障害者である。

次に、ここでいう独立生活とは、単に、入院や施設入所あるいは在宅で療養が続けられるという経済的見地を指すものではなく、むしろ、病院・施設・家族の手から離れて生活することを指している。ただ、他の軽度障害者のように、一人で身の囲りができる人たちではないので、可能最少限の人手を要しながら社会生活を営むことになる。換言すれば、家族や医療チームによるケアから、社会的なケアに移行させることを指している。更に別の言葉でいえば、身体的独立よりもむしろ心理的・社会的独立の方を指していることになる。

このような指針は、リハビリテーションの哲学から考えて、何ら特別の社会復帰形態ではない。したがって、本来は重度障害者の独立生活と銘打たなくとも、単に障害者の自立でよかった筈である。それなのに、わざわざ従来のリハビリテーションと分けて論じなければならない理由は、これら重度障害者が、ついでリハビリテーションの軌道に乗ることを得なかったからである。諸外国では、はるか以前より、重度障害者ごとリハビリテーションの考え方を適用してきているとあってよい。

なぜ我が国で、このような、いわば“落ちこぼれ”が生じてきたか。多分、リハビリテーションの意味が狭く変わってきたからであろう。こんにち、リハビリテーションという言葉が、人口に膾炙されるようになったことは慶ばしい限りであるとはいえ、果たして正しく定着したかどうかにかんして幾つかの疑念が残ることを否めない。たとえば、リハビリテーションとは機能訓練であって、それにより身の囲りの自立ができるようになることであると考えられていること。これでは、訓練が困難な者にはリハビリテーションが適用されないことになってしまう。

おそらく、専門職の不足、リハビリテーションサービスが体系化しないことなどによる、PR不足が災いしているための誤解に基づくものであろう。また、行政主導に俟つのみならず、障害者とその周辺による自立への積極性が欠けていたため、職種の開拓や福祉機器の開発につながらなかったこと。あるいは、障害者を受け容れるような社会の態度が不十分であったため、住宅・交通・教育・結婚・職業・ボランティア制度を拡充させ得なかったためでもあろう。

ここで、身障者のリハビリテーションについて振り返って考えてみよう。本来は身体障害に基づく身の囲りなどの能力障害や、対人関係を始めとする社会的不利を埋めることであった。このギャップに対し、技術・補助機器・技能・設備・制度でカバーするように努めてきた筈である。障害者側から近づききれない場合は、社会からの歩みよりが要請されてきたものである。逆にいえば、身体機能が充分改善されてしまえばギャップは解消されることになる。

ところが、身障者とは、どんなに訓練をしても機能的制限が残る人たちのことである。だからこそ社会心理的な面でギャップを埋めることが重視されている所以である。それなのに、機能の改善によって

能力障害、社会的不利が自動的に解消しうることを期待し過ぎている現状ではなかろうか。現在われわれが扱っている患者が、もはや身体的進歩の余地がほとんどないにも拘わらず、“もう少しよくなってから退院します”とか、“歩けるようになってから”といているのを、余りにもしばしば耳にしている。むしろ、早めに社会に出ることがリハビリテーションではなかったのか。

このような有様では、身体的機能制限ばかりか能力障害も重度の者に対して、果たして社会的不利を埋め切れるかという問題が残されてしまう。別の言葉でいえば、身の周りが自立しなければリハビリテーションできないことになる。現に、多大な介助が要求されるため、医学的管理は最少限ですむ者ですら、病院・家庭・施設から出られぬ事態が現出している。とくに、職業上の能力がありながら、この独立—身体的というより心理・社会的独立の意味の方が重要—の得られない者が多いことは余りにも悲惨である。

この人達が重度障害ゆえにプライバシー、自主性、意欲、能力を抑えられていることは自由の侵害に等しい。家族にとっても、ケアを社会に受け持って貰えばどんなに負担が少なくなるか計りしれない。また、社会にとっても有用なメンバーが増えることになろう。

では、どのような解決法があるであろうか。スウェーデンのフォーカスソサイエティ、オランダのヘットドルフや英国のホステル、米国の諸制度（Housing and Home Services for the Disabled, 1977参照）などが挙げられる。これを二つに分ければ、ハウジングというハードウェアと、ホームサービスというソフトウェアになる。前者には、屋内における移動を主とする補助機器、設備などがある。これによって人手による介助を最少限にすることが望まれるが、コストパフォーマンスの上からも、助成金の制約からも、必要最少限の機械化でよいと思う。だからといって、楽になり過ぎたり便利になり過ぎたりしてはいけないといっている訳ではない。余ったエネルギーは、職業、勉学、趣味、スポーツなどに生かせばよいのだから。

後者のソフトウェアとしては、他の健常者あるいは身障者と一緒に住むこと、身障用住宅と一般住宅とを混在させたコンドミニウム、ヘルパー派遣制度、ボランティア制度、付添い費用の補助、あるいは付添い費を課税控除対象とするような税制上の考慮などが考えられる。更にいえば、障害者に雇用されている人のための保障まで考えなければ不備の誘りを免れない。

これらのことが解決されるとしたら、その恩恵は計り知ることができない。これまで、軽度障害者、あるいは身体的改善効果の著るしい者ばかりに当たっていたリハビリテーションの陽が、重度障害者にさすことになる。誇りや生き甲斐を再び持つ人が、重度者にまで行き渡って始めて本当のリハビリテーションといえよう。ひいては、病院内の重症患者のケアにもこの効用が図られることであろう。

もちろん、こうして保障の凹凸が消える一方、新たな不公平が持ち上がってくる懸念も否定できない。たとえば、すでにケアの分まで保障されている人びとには、二重の恩恵となってしまうかも知れない。これからも益々きめ細かく検討し、一つ一つ解決していかなくてはならないであろう。

すでに米国では、一日に何時間も鉄の肺に入らなければならない重度四肢麻痺のエド・ロバーツが、リクライニングの電動車椅子に乗りながら、カリフォルニアで福祉関係の枢職に就いているし、昨年来日したドロシー・テッサンは、呼吸補助器、車椅子、二人のボランティアに助けられながらマスター論文を書き上げているという。重度障害者の独立生活が可能な国では、職業や教育にもリハビリテーションの成果が大であるという例になると思う。

我が国でも、以上述べたことについて解決が可能な筈である。それには、医学、工学、社会、心理などの専門家や行政関係者の協力、一般社会人の理解、障害者自身の意欲が必要とされるが、本日はこの交流セミナーという機会を捉え、手初めに情報交換を致したいと思う。ハードウェアに関しては、リハ



リハビリテーション工学から林玉子女史のご意見を伺い、ソフトウェアに関しては、ソーシャルワーカーの小原義夫氏にご報告いただき、次いで一つの実例として、職業リハビリテーションの西村秀夫氏にご発表願うことにする。

## (2) 重度障害者の独立空間

林 玉 子 (東京都老人総合研究所)

リハビリテーションサービスの発展に伴い、身体障害者は各側面のリハビリテーションサービスを受けることにより、その残存能力が高められてきている。工学分野においても、電子、機械、建築等諸分野の専門技術、学問を動員して、リハビリテーションの各段階のニーズに応じ、種々の援助が行われている。その結果、損傷した機能の代償を有効に果たしうる精度の高い各種制御装置、義肢補装具、自動具などが開発され、さらに建築的障壁の排除運動も合わせて、多くの技術レベルの諸援助によって、障害者の日常生活面での自立の範囲を広げてきている。例えば、重度障害者でも、必要な技術的、人的援助さえ受ければ、「正常」(一般と同じ)な生活ができることが、スウェーデン、オランダではすでに立証されている。このように、今日、自立空間を必要とする重度障害者の範囲は拡大され、自立の意味も、「人間としての生きる営みを自分の意志で決定し、責任を負う者はすべてその場を得るべき」という高い理念を含んでいる。従って、そのための自立空間を如何につくるか、我々はその重みをあらたに心にとめるべき要求に曝<sup>さら</sup>されている。

近年、我が国においても、健常者中心の街づくりから、障害者も含めた街づくりへと、住み良い環境の整備を進めている。幾つかの先進的な地方自治体では、建築的障壁を排除する街づくりの要綱を実施している。しかし、その内容は果たしてそれでよいのか。又、東京都でも、障害者のなが年の運動により、日常生活面において物的人的援助を必要とする、障害の重い者のためのケア付き住宅の建設が実現しつつある。しかし、その住居を設計する過程、技術的な配慮は果たして十分なのか、の問題が残されている。

現段階において、建築の立場より、原点にもどって、物的環境のつくり方、あり方に関して、検討することは非常に大切であると痛切に感ぜざるを得ない。たしかに、建築、人間工学分野では、障害者の協力を得て、物的環境の改善について、種々の研究を行って来た。その成果は、障害者の生活改善に直接、間接的に役立っていると思われる。しかし、対象としているものはほとんど、上肢健全な車いす使用者、又は外出が可能な条件の良い障害者であることは否めない。今後は、対象者を電動車いす使用者、日常生活動作に介助を必要とする者、中枢神経系の原因により障害を受けている者へと拡大すべきであろう。この様な重度障害者のニーズはより多種多様であり、日常生活面においてもその適用範囲がより狭いということがいえよう。

建築面での援助のポイントは、①固定的になりがちな建築的手法内に可動的なシステムを取り入れ、その技術を開発すること。②重度障害者の残されたわずかな能力を有効に役立たせるには、建築工学と他の工学分野、つまり、人間工学、電子工学などとの協力態勢が不可欠である。このような協力態勢は、近年リハビリテーション工学と称して、一つの学際分野を形成しており、外国では多くの成果を上げている。しかし、我が国においては緒についた段階であり、電動装置、制御装置、補助器具、自動具などはほとんど輸入品しかなく、我が国の生活事情、人体寸法などに合わないため使用しづらいし、その上価格も高く、身障者には手がとどかないなどの問題がある。しかし、重度障害者にとっては、まず、このレベルの援助からスタートし、次に建物のレベル、さらに都市のレベルへと継続した、組織化された援助があって始めて独立生活が可能になるといえる。③重度障害者の独立空間の諸設計条件を如何に把

握するかについては、勿論、つくる側における、積極的に生活主体者を理解する態度から始まるが、生活主体者である障害者からの問題提出、および、積極的な協力がなくては、真に住みよい、又は、住める空間はできない。又、多くの設計条件の設定は、むしろ、生活主体者が行うべきである。そのためには、多種多様な生活主体者により構成されている、障害者間の連帯感、および、生活主体者をつくる側との信頼感を深め、積極的に取りくめる条件づくりが肝要である。④生活は経験することにより始めて日常的なものになる。リハビリテーション工学分野の諸技術を駆使して、配慮された住空間で生活することにより、自立の意欲は一層深められよう。同時に、ここでの生活体験による諸資料を積みかさねることにより、より多くの重度障害者の技術的な援助の問題点が明らかになりうる。そのために、重度障害者の狭い適応範囲に対応して、自由に調整できる空間、又は、多種多様な実生活様式の諸条件を満たした、モデル住宅が必要である。

以上、重度障害者の独立空間について、つくる側より、二、三の問題提出をした。物的環境が、真に重度障害者の生活環境になりうるためには、広義の人的環境をも含め、人間同志の相互信頼、理解の上で始めて完成すること、“仏つくて魂入れず”の物的環境では、何の意味もないことを最後につけ加えたい。

### (3) 医療ソーシャルワーカーの立場から

小 原 義 夫 (国立療養所箱根病院)

私の勤めている箱根病院は、脊髄損傷、脳血管障害、成人筋ジストロフィ、その他神経難病等、重度障害者のためのリハビリテーション病院である。現在当病院に入院中の140名の患者のなかで、四肢機能障害を伴う超重度障害者は約50名(33%)になる。当院における最近の調査では、入院患者の約半数は、医学的リハビリテーションは一応ゴールに達していながら、社会復帰を阻む種々の要因があって、やむなく病院にとどまっていることが明らかになった。これらの患者の多くは、箱根病院転院以前において、リハビリテーション機能を有しない医療機関を転々としながら、長期にわたって入院生活を余儀なくされてきた人たちである。当院にみられるこのような状況は、我が国におけるリハビリテーション諸施策の、著るしいちおくれを如実に示すものであろう。

そして、このことが、重度障害者の社会復帰への意欲を阻害し、その家族の生活をも窮地に追いこんでいく結果をまねいているばかりでなく、この国の医療経済面に与えている損失も多大であると言えよう。そこで、今後、我が国における重度障害者の社会復帰の促進をはかり、その独立生活の確保に向かうために、次の諸施策の推進を切望する。

- ① 医療機関等に閉じこめられている状態の重度障害者の実態の把握
- ② 医学的リハビリテーションの充実強化
- ③ 医学的リハビリテーション完了後における重点施策

ア. 重度障害者のための住宅対策の促進

イ. ホームヘルパー制度の充実及びケア付住宅の設置

ウ. 在宅重度障害者の健康管理システムの確立

エ. 中間施設の設置 (なるべくリハ病院の隣接地に設置し、ホームヘルパー、障害者、家族等の実地

訓練教育及び住居設備、職業、趣味等の研究開発施設を併設すること)

オ. 社会復帰後、働いて社会に貢献している重度障害者の、生涯生活保障のための諸施策 (例えば、老齢年金受給資格年限の短縮、税制上の特別配慮、ホームヘルパーの提供等々)

カ. 重度障害者に対する各種障害年金の極端な凹凸を是正し、重度障害者の生活不安を取り除くた

めの生活保障年金制度を確立すること（重度障害者の独立意欲を阻害している生保の適用を要しないような、体制をつくっていくことが必要である。）

以上、医療ソーシャルワーカーの立場から愚見を申しのべたが、今後、重度障害者に、より豊かな独立生活を確保していくためには、障害者と健常者がお互いに英智を結集して、常によりよき方向へと努力をつみ重ねていくことが必要であろう。そして、これからの重度障害者のための諸施策は、“働けないから、働かないからの保障よりも、働くための保障”に、より重点をおかなければならないであろう。

おわりに、当院が一昨年調査した、神奈川県を中心とした都県における、重度障害者のための公営住宅の状況、および、スウェーデンにおけるケア付住宅サービスについての要点を下に示す。（表1、2）

表1 わが国における重度身体障害者の公営住宅の現況（昭和51年10月）

区分	都県名	神奈川県	東京都	千葉県	静岡県	山梨県	埼玉県
世帯者用		198	50	30	10	0	4
独身者用		0	0	0	0	0	0

現在、独身者用の車椅子住宅はまったく考えられていない。

表2 スウェーデンにおける重度障害者のケア付住居サービス（要点）

目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 重度障害者を社会からかく離して収容保護することではなく、一般社会のなかで生きがいのある生活が保障されるように、住居サービスを中心とした諸施策を進めていくことである。</li> </ul>
事業の運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 重度障害者住居サービス協会本部を中心とし、地方実行委員会（14地区）によって運営されている。</li> <li>・ 1964年の全国調査の結果住居サービスを必要とする重度障害者は1,000人であった。</li> <li>・ 現在各地区に建設が進められており、すでに300人以上のものが入居して生活している。</li> </ul>
財源	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国および地方自治体の助成金</li> <li>・ 赤い羽根、ラジオ、テレビの協力による募金</li> <li>・ ライオンズクラブその他の寄付金等</li> </ul>
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害者がいつまでも病院や施設に閉じ込められることもなくなり、自分自身のホームをもつことができ、人間らしい生活が保障されるようになった。</li> <li>・ 費用は病院の<math>\frac{1}{2}</math>、施設の<math>\frac{2}{3}</math>位ですみ、経済的にも有利である。</li> </ul>

#### (4) 自立を扶ける介助

西村 秀夫（北海道リハビリ一）

身障者の独立生活を保障する要素として、①それぞれの身体条件に適した住居と補助具、②身障者の利用し易い交通機関、③文化的、健康的な生活を保障するに足る年金、④自立を扶ける必要最少限の介助、があげられる。以下、介助の姿勢が自立に及ぼす影響について資料を提供したい。



北海道は、脳性麻痺の身障者400人を収容する「身障者福祉村」の建設を進めている。この「福祉村」が、自分たちが経験した在来の施設のように、身障者の人間としての自立を妨げるものとならないことを求める、入村希望の身障者の運動が起こっている。「いちご会」と称するこのグループは、病棟型の療護施設を変えて、10人前後の多様な身体条件の人びとの共同生活を可能とする、茶の間中心の個室群、「ケアつき共同住宅（正しくは、ホステル）」とすることを主張している。この主張は、道当局の設計にもかなりとり入れられて来ているが、常時の介護を要するような身障者は療護施設に収容すべきであるという、当局者の考え方は容易に変わらなかった。ケアつき住宅については、スウェーデンのフォーカスアパートなどの先例もあるが、具体的な証拠を以て反論するために、「いちご会」は、今年3月1日から31日の間、札幌市内の民家を借りて、重度の脳性麻痺者を主体とする合宿を行った。

この合宿の特色は、身障者が企画し、一切の責任を負って自主的に生活したこと、「最大限の自力、最少限の介助」を原則とし、介助者は「よく見て待ち、求められた介助のみをする」姿勢をとったこと、介助者は「いちご会」の主旨に共鳴したボランティアであり、たのしく充実した共同生活を実現しようという意欲が全体にあったことになる。

合宿は無事に終わった。重度の身障者たちは、交替で個室の生活を体験した。同じ屋根の下に介助者がいるので、不安は全くなかった。介助の量は予想以上に少なくてすむことが判った。そればかりでなく、「最大限の自力」を原則として努力するなかで、相互に啓発されて、これまでの能力の限界を越えるということが起こったのである。

合宿を始めるに当って、中心になった人びとが申し合わせたことは、「この合宿では自分のほんとうの気持ちを率直に話しあうようにしよう」ということであった。幸いにしてこの人たちの間には、それを可能にする条件があった。31日間の合宿の間には、意見の不一致や誤解もあったが、それは率直な話しあいの中で、深い亀裂とはならずのりこえられた。こういう関係が、自立した生活の主体として尊重され、責任を負っていることから来る身障者の喜びに加わって、合宿の生活を活気に充ちたものにしたのであろうと思う。

スウェーデンのフォーカスアパートでは、介助のために要する費用は、療護施設の場合の $\frac{2}{3}$ 、病院の場合の $\frac{1}{2}$ ですんでいるというが、ここにも同じような原因があるのではないと思われる。ある療護施設では、重い障害を負った人たちにも、その身体条件に応じて作業ができるようにしたところ、それまでエスカレートする傾向があった介護の要求が、減少してきたということをきいている。

収容施設の実態は、外からは見えにくいものである。しかし、収容されている身障者たちの大部分が、自分の家に住み、自立して生活することを願っていることはたしかである。収容施設は、身障者を保護するためにつくられたものである。収容されている人びとは保護の対象として見られ、生活の主体としては見られにくいのである。保護の必要が大きいと見られる人の場合ほど、その傾向は著しくなる。在宅の身障者の場合も同様であろう。

身障者は独立生活を求める。しかし、地域社会が彼らの重荷を共に担うことをしなかったから、彼らは家庭にとじこもり、あるいは施設に収容されて、保護をうけるほかなかったのである。独立生活の要件がかりに整備されたとしても、身障者を、たとえどのように障害が重くとも、生活の主体として尊重し、共同社会の一員として協力しようという意識が地域社会に生まれていなければ、独立生活の喜びは得られないだろう。そういう意識はどこから生まれ、どのようにして育つのだろうか。

「いちご会」の合宿の経験は、自立を扶ける介助の関係が身障者を活気づけ、生活の主体としての存在を明らかにすることを示している。重い障害にもかかわらず、かけがえのない生活の主体として生きている人間の存在にふれるとき、身障者を生活の主体として尊重する意識が生まれるのではないだろうか。

それゆえ介助者の役割は重要である。介助者に求められるのは、体力と技術のみではない。人間に対

する深い理解と豊かな感受性こそ、求められる資質ではなからうか。

## (5) 討 論

仙台愛子（横浜市老人リハビリテーション友愛病院）：合宿体験者の年齢はどの位か、また民家を提供した側から苦情はなかったか。

西村：年齢層は24.5歳から30歳位だと思う。合宿所は積極的に提供されたもので、苦情よりむしろ世話のやり過ぎを懸念していた。しかし、家は貸すが手は貸さないという態度を貫いて載き、雪の中の一軒家という状況とも相俟<sup>あひま</sup>って、独立性を保つことができた。

野村実（東京コロニー）：障害者は自然に依頼心が強くなると思うが、自立心を育てるにはどのような方法を講じているか。

西村：私の所は授産施設なので、労働の場を持っているという点で、自立心に欠けている者は比較的少ない。これが欠けている人にどうしたらよいかははっきりとは判らないが、私個人としては、対話によって芽を育てることではないかと思う。実際は、経営に追われているので彼らの正直な気持ちを聞く時間がないのを残念に思っている。私の場での経験からは、経済的見地を抜きにしても、労働そのものが生き甲斐を与えているように見受けられる。この点について、障害者の立場からの意見も伺いたい。

八木下：一人の障害者として発言したいが、問題は日本の障害者が本当のことをいえない立場にあるという点に尽きる。正直にいうことは、存在や生活パターンへの脅威となりかねない現状である。先月、スウェーデンに行って障害者やその家族と話す機会を得たが、いうべきことをはっきりとやっているようで、別世界のように感じた。独立生活も、住環境、社会環境ともに達成され、したがって、行動性も自由に与えられている。しかもなお、それ以上の要求さえかちとろうとしている。一方、帰国してみると、日本の障害者は住む所も働く所もなく、施設内でいたいこともいえない有様である。これは、社会機構の差に基づくものと思われる。住宅と年金に改善がみられれば、発言力も増大しうるのでないか。少なくとも、労働の場が確保されれば、本当のことが話せると思う。恐らく、あと二、三年はかかるのではないか。

カタリーナ・トメ（チェシア財団国際代表委員）：岡由起子（日赤語学奉仕団員）訳：重度障害者の家はスウェーデンだけではなく、国際的な運動となっているものもあり、ここではチェシアホームについて説明を加えたい。

チェシアホームは国際的な機構で、現在36カ国で、それぞれの社会制度に従って、既存の機構に組み込まれるような形で活動している。すべての障害者に、自立性を動機づけ、独立生活を奨励している。つまり、入院や大規模の施設生活ではなく、ケアを提供したり、お互いに助け合うような小さなユニットを設けたり、ハーフウェイハウスの形で身障者と健常者を混在させたりすることを図っている。この目的は、障害者ができるだけ一般人と同じ“正常の生活”をすること、仕事をしうるようにすることである。我慢して生活するのではなく、幸せを追求しうるように望んでいる。チェシアホーム内の規則をどうするか、誰をメンバーとして受け入れるか、どのように運営するかなど、すべて住人によって構成された委員会が議決権を持っている。職員に対する拒否権さえ発動しうる。障害者が主体性を持つことによって、普通の生活をしうることが強調されている。

## (6) まとめ

林女史にお願いしたハードウェアは、電気、ガス、水道、電話などの関係者の協力が不可欠であると思われる。ここでは、障害者の最大公約数について述べて載いたが、実際は多種多様の障害と生活パタ

ーンがあって、個別的に合わせる必要が残る。とくに、住空間内で独得の独立性を持ったゼロレベル生活の人たちを戸外の生活とどう結びつけるかというご指摘は考えさせられる。女史の案になる、移動パーティションのモデルルームにも成果を期待したい。

小原氏には、ソフトウェアの制度や運営の面に触れて載いたが、これも社会の態度如何にかかっているといえる。林女史が、物的環境でさえ使い方次第であるといわれたように、ハードとソフトは判然と区別できるものではなく、ともに“魂”を入れることが急務である。社会人と障害者とに分けたり、まして、与える側と受ける側とに分けたりするのではなく、障害者を含めた社会が、お互いに自己実現への努力に対する連帯意識を持つことが肝要であろう。西村氏の紹介した、「いちご会」での事例でも主張する所は同じで、相互に尊重するような社会意識の変革が切望されていた。

このあと、会場より幾つか意見が出され、各分野の専門家間に交流を図るのみならず、現場からの発言、障害者側からの希望、ひいては海外における論点とも交流が持たれたことは、このセミナーの意図する意義を一層深めたといつてよい。

しかし、問題点が浮き彫りにされた点も見逃してはならない。社会の理解と両輪をなす障害者の意欲について、野村氏より鋭いご質問があり、単なる補助や保障では解決されない面が問われた。働けないからではなく働くための保障をする、助けるのではなく自立をするのを助けるといつても、その裏づけとなる、障害者の意欲を高める専門職の不備が露呈された。八木下氏が洩らした、“本当のことをいえない”事情も、意欲に対する阻害因子であろう。確かに公けに論じられていない部分に問題が隠されているようである。

偶然参席された、ノルウェーからのトメ嬢によれば、国情に合わせてチェシアホームができているようなので、社会の差を以て先きゆきを悲観することはない筈である。達成可能な目標として引き続き努力したい。

問題点は上記のテーマ内に止まらなかった。本分科会では、職業的能力がありながら介助量が多大なため自立できない者の、住空間内の独立に絞ったにも拘わらず、他の面にも及ぶことになった。発言者、質問者ともに、住宅と社会との結びつきを等閑視する訳にはいかなかったのである。また、身の周りの自立ができて職業的機會などの社会的不利が大きく取り残されているという、別の組み合わせの障害者も話題になった。更にまた、独立生活をしてみたらそれ程介助は多くなく、むしろ機能的改善がみられた例では、身体面で訓練の余地があったのに、それ以上の重度障害者扱いをしていたことにも問題があったという見解を払拭し得なかった。

結局、医学的リハビリテーションでさえ不十分であったり、逆に、プラトーに達している者になお過剰期待を抱かせたりする現状を打破する要が明らかになった。まして、心理・社会的見地の立ち後れは言を俟たない。にも拘わらず、先進的な課題に挑んだ分科会であった。そして、すべての障害者の問題、すべての人の問題としてリハビリテーションを考えることが、基本であることを確認したのである。

終りに、ご協力を載いたボランティアの方々に厚くお礼を申し上げる。



## II. 障害者の大学教育

(司会) 小島 蓉子 (日本女子大学)

### (1) はじめに

日本における総合リハビリテーションの真空域としての、障害者の大学教育の問題を検討するのが本分科会の主旨である。障害児の義務教育については、多くの問題を孕みながらも、1979年4月をもって、中等教育まではすべての障害児に対して保障されるようになった。肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、精神薄弱の何れに対しても、すでに高等部が設置されて来ている。

障害児の中にも、大学や専門教育を受けることが、専門的学識をふまえての将来の生活の拡大の職業的、社会的基盤になるが故に、大学教育を志すものが多く、我が国の高校生の約4割にもものぼっている。こうした若者たちの高等教育へのニーズが、等しく障害をもつ高校生たちにはないわけではけっしてない。いやむしろ、障害学生にとっては何でも巾広く職業選択が出来るというわけでないからこそ、法律とか化学とか美術とか、これならばやっていけると思われる分野の仕事の基礎をみっちり大学でやりたいというのである。この願いは、一般学生ほど一般的ではないとしても、障害学生にとってはある場合、もっと生活にかかわる切実な意味をもっている、ということが言われる。

しかし、我が国では、リハビリテーションの医療、義務教育、雇用が、立法及び行政の権限内で拡充されていく中で、障害者の大学教育は教育の仕上げとしての意味では文部サイド、専門職雇用への基盤の位置としてならば労働サイド、の関心であっていいはずであるが、何れのサイドの対応からもスッポリ除外されているのが、我が国の総合リハビリテーション視点からの問題である。

現在、障害学生の高まるニーズに対し、どの行政も一切の関心と、取り組みを行っていないので、障害学生のニーズを受け入れる当面の機関としての大学は、孤立無援状態で、障害学生のニーズに個別に試行錯誤で対応しているのが現状である。どの分野の課題ときめられなかったためか、障害大学生の進学の問題について、日本のリハビリテーションに関する正規の機会論じられたことは、日米リハビリテーションセミナーの時の、ジョン・ジョーダン博士と筆者とのやりとり以外、筆者の知る範囲では全くなかったと思われる。だからこそ、この我が国の、医療に始まり、教育、社会、職業にわたる総合リハビリテーションの流れの中の、真空域のエアポケットに正面からとり組もうとするのがこの部会のねらいである。

教育システムは、教育の提供者である教育者と、教育の活用者である学生側、そして、その両者を結ぶ教育のための研究教育活動を媒介とする、師弟間の人間関係と、それが展開される場がなければ成り立たない。よって、この部会は、障害者大学教育の問題を、学生の側、教育者の側から指摘し合って、建設的な問題克服の方向性を見出すために、次のような人々の発表を中心として討議を進行させた。

① 障害者にとっての大学教育の意義と困難性 都障害者福祉センター 大 漣 憲 一

② 障害学生のとらえた大学教育の問題点

証言1	頸髄損傷	元上智大生	中西正司
証言2	視覚障害	慶大卒日社大生	岡田伸一
証言3	脳性マヒ	早大卒日社大卒	曾根原純
証言4	聴覚障害	東洋大生	天野泰子

③ 障害学生受入れに対する一般学生及び教師陣の反応

ア. 大学受入推進学生サークル活動に参加して 日女大生 三平玲子

イ. 大学側の努力と問題点 日本社会事業大学専任講師 佐藤久夫

④ 海外の大学の一事例としてのウィスコンシン大学より学ぶこと

## ⑤ 討議のまとめ

## (2) 障害者にとっての大学教育の意義と困難性

大 渡 憲 一

我が国において、これまで、大学教育は、障害者のリハビリテーション体系の中に組み込まれていたであろうか。

もちろん、これまで、障害を持った数多くの人たちが大学教育を受けて、社会に巣立ち、活躍している。しかし、このことは直ちに頭書の命題を証明しているとは言えない。

障害を持った者が大学に入学しようと思えば、多くの場合、受験勉強中のさまざまなハンディキャップを克服して学科試験で合格点をとった上に、更に、支障なく講義を受講して卒業に要する単位を習得できるであろうと、大学側によって判定されることを必要とする。そして、入学後は、講義の受講、参考書の講読、レポートの作成、試験の受験等を2カ年ないし4カ年にわたり、主として障害を持った学生本人の努力によってやり遂げなければならないのである。

換言すると、障害の態様に関係なく、一般学生と変りない大学生活を送り得るもののみを大学が受入れていくという、極めて消極的な姿勢が殆どである。これらのことを示す調査を二つ紹介する。

その1は、サリドマイド被害者のための団体である「(財)いしずえ」が、全国の短大、大学を対象に行った、「障害者の大学受験に関する調査報告(1)」である(回答471校)。これによると、無条件で受験を受付けるところが、大学85校(39.2%)、短大79校(31.1%)あるのに対し、条件つきのところは大学115校(53.0%)、短大141校(55.7%)あり、障害者の受験は受け付けないところ、大学10校(4.6%)、短大14校(5.5%)ある。そして、「条件つきで受け付ける」場合のその条件として、障害の程度をあげているところが、大学34校、短大55校、学部・学科を制限しているところが大学7校、短大6校となっている。「障害の程度によっては受験を受け付ける」と答えたところの、「その程度の内容」は、学科によって異なるが、「受験に支障のない程度」「実験・実習・実技に支障のない程度」「受験時に特別な配慮なしに可能な程度」等となっている。また、受験制限をしているところは延30学科あり、幼稚園・小学校教員養成課程、保育科、実験・実習を伴う学科等である。

その2は、「聴覚障害者のための高等教育機関の設立を推進する会」が、「高等教育機関に学ぶ聴覚障害者の学生生活と卒業後の職業に関する実態調査の報告(2)」をしている。これによると、「学生生活上最も苦勞したと思う点」は、「コミュニケーション」「学習内容の難しさ」等で、教科では外国語、セミナー、一般教養をあげている。「講義の受講法」は、「板書をノートする」「友人のノートを見ながら受講する」「テキスト・参考書を読む」「補聴器を用いて聞く」等となっており、また、「受講後」も「学友に教えてもらったり」「ノートを整理し」たりに相当の時間を費している。これに対し、「特別な配慮をする先生」が「有る」のは43%、「ない」のが34%で、「配慮の方法」としては、「板書を多くする」「読話しやすいように話す」「個人指導をする」「授業前に講義要旨を配布する」等となっている。

以上二つの調査が物語っているように、一般学生と同様の条件下で受験できるもののみが入学でき、入学後もさまざまな困難を経験しながら学生生活を送っているというのが現状であろう。

しかるに、大学教育は、障害の有無に拘らず保障されなければならないという理念があるが、実際には、大学へ行きたくても、障害のゆえに行けないものも数多くいる。障害を持つものにとって、大学教育はいかなる意味を持っているであろうか。この間に対する答としては、次のようなことがあげられよう。

- ① 教養を身につけ、人生をより豊かにする。
- ② 一般の大学進学率が向上しているのに、社会に遅れないためにも大学教育を受けたい。
- ③ 障害の重いものは、知的職業にしか生きられない。
- ④ 高校教育までを特殊教育諸学校で受けたものにとっては、インテグレーションの最後の機会である。

これらの意味から考えると、大学教育という場を障害者リハビリテーションの一環としてとらえ、障害を持った者が大学教育を受けやすくするための方策を、あらゆる面から講じていく必要がある。

#### 引用文献

- (1) 財団法人いしずえ：大学進学の手引き。P.5～P.9, 1978
- (2) 聴覚障害者のための高等教育機関の設立を推進する会：高等教育機関に学ぶ聴覚障害者の学生生活と卒業後の職業に関する実態。P.6～P.18, 1977

### (3) 障害学生のとらえた大学教育の問題点

#### 証言 その1

中西正司

私は10年前、大学3年の時交通事故に遭い、頸髄損傷になった。以後6年間在宅にあり、その後リハを受けADL自立を果たしたので、大学復学を望み大学当局の快諾を得た。しかし当時入所中の都センターでは、リハの最終目標は職業復帰にあると考えられており、大学教育は直接職業に繋がれぬとの理由で、協力を拒まれた。そこで、自力で復学しようと考えた。自宅よりの通学は車の運転ができず不可能なので、学寮に入ることが最善と思ったが、学寮には荷物用エレベーターしかなくてドアの開閉ができず、その結果復学を断念せざるをえなかった。

とりわけ私のような四肢マヒ者にとって、大学教育を受けたいという欲求は強く、一般の生産活動に従事することは不可能なこともあって、知的職業に就かざるをえない追い込まれた必要性を感じる訳である。現在私は、頸損連絡会という四肢マヒ者の団体に参加しているが、そこでも、来春大学受験をめざしている車イスの高校生が何人かいる。彼らは、一体どの大学の受験を許してくれるだろうか、又、建築上の配慮が期待できる大学はあるのか等、受験に対して大きな不安を感じている。そこで私達は、他の団体の協力を得て、「車イスの大学案内」を作成しようと考え、関東近県150校においてアンケート調査をした。大学当局で予想もしなかった質問内容だったせいか、回収率は悪かったが、それでも、五校(法政大・都立大・筑波大・上智大・中大)を除いては、全ての大学が身障学生の受入れに対して消極的な姿勢であることがわかった。受験さえ拒否する大学に対しては、高校生も、怒りよりは落胆を感じたようであった。今、大学当局は、身障学生の受入れに際してどのような配慮が必要なのか見当がつかず、必要以上に恐れを抱いているふしもある。私は、建築上の問題は、学内で人的介助さえ受けられればネットワークにはならないと考える。拒否理由の大半がここに集中している訳であるから、この点さえ大学当局に納得させる機会が与えられれば、大きな前進がはかれるように思われる。

#### 証言 その2

岡田伸一

軽度の視覚障害(障害者手帳なし)。日社大・研究科在学中。10年ほど前に、薬の副作用によって、両眼中心部に網膜変性が生じたため、「読む」ことが非常に困難である。

#### 読書方法

- ① 自分の眼(強力な照明下で、スピードは晴眼者の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 、長時間は無理)。
- ② あるボランティア・グループによるテープ朗読サービス(点字未習得)、その他の器具は使用せず。



上記のように、私にとっては「読む」ことが最大の困難であるが、実際の大学における勉学では、授業そのものは、黒板、テキスト、プリント類は読めないが、「聴く」ことで大半カバー可能なため、ほとんど苦にもならない。問題なのは、レポートの準備をも含め、自主的な研究が思うように出来ないということである。すなわち、必要な資料、文献のチェックが困難——図書館でカードをひいたり、文献を手にとって内容を調べるのが容易でない——であり、また、読書量に制約がある。ただ、私にとって幸いなことは、クラスメートをはじめ、図書館員等の大学職員の方々が、自発的に、あるいは、こころよく応じ、私の手助けをしてくれることである。これは、私には単に、「眼を貸す」というだけでなく、大きな励しになっている。

この個人的経験から、私は、障害者に対する真の大学の門戸解放は、障害者の大学生活における、周囲の人々の温かい、かつ、自然なサポートなしには考えられないように思う。さらに、この条件の有無は、障害者が学内で真の友人を得るか否かを含め、大学生活をエンジョイできるか否かにも、大きな影響を及ぼすように思われる。

### 証 言 3

曾根原 純

〈学歴〉51年3月早大政経卒、53年3月日社大研究科(1年制)卒。

〈障害〉脳性マヒ(アテトーゼ) 体幹及び言語障害。手帳3級。

小学校より普通教育を受けてきたが、高校までは別に学習上の不利は感じなかった。それは、体育などのできないものはできないとして割切ることができたからかもしれない。大学入試の時も、普通の人の同じ条件で合格した。大学に入ってから、試験の形式が論文となり、時間の不足を感じるようになった。そのため、事前に、先生方にかなり読みにくい答案となることへの了解を求める手紙を、事務所と相談の上で書いた(しかし試験がレポートとなることが多く、余り関係はなかった)。友人や先生方とのコミュニケーションは、早大の時は割にスムーズだったと思っている。

体育については、実技を講義に振り替えた。早大では、毎年120人程度体育実技を制限され、そのうち50人強が私と同じように講義に振り替えている。少なくとも早大に関する限り(多分他大学でも)、体育ができないということは、受験拒否や不合格の理由とはならない。

移動の不自由さは、建物によって大きく異なる。中には階段に手すりのない建物もあった。(ついでながら、明治大学和泉校舎の、三つの校舎のうち一つだけにスロープがつけられていたことは、私としては理解に苦しむ。)

社会的な問題については、まじめに授業に出席することが精一杯で、ほとんどが考えられなかった。社大の研究科に入ってから、少しはまともに社会的な問題を考えるようになった。障害者には、障害者問題について考えることをできるだけさげようとする傾向があるらしい。私も例外ではない。

### 証 言 4

天野 泰子

現在、大学、短大で学んでいる聴障学生は全国で150人位いる。大学というものは、学問を探究する場である。よく言われている事だが、“大学を利用する”という事は、自分が研究している分野における疑問を大学に於て解決を求め、興味のある科目を自ら選ぶという事で、自主的に学べるという事が大学のメリットであろう。ところが、私達は、聴覚に障害を持っている為に講義が聞けないという事が起りうる、他人の助けを借りないと講義の内容がわからないのである。それは、「聞く権利」が損われていると言って良いと思う。又、ゼミの討論に於て、聴障学生はスピーディな論義について行けず、討論の熱が伝わって来ない。これは、健聴者(耳の聞こえる人達)のペースで討論がなされているからであろう。

本来、大学の講義を主体的に利用すべきであるのに、間接的に講義を聞かなければならないとすると、大学は誰の為にあるのかとわからなくなってしまう。大学は、あくまでも民主的であるべきだと思う。聴覚障害者は、社会的障害が甚だ大きい。私達学生が、社会の一員として、大学という集団の中で主体的に学習する事が出来るためには、当然コミュニケーションの保障が必要である。手話通訳者、筆記通訳者、ワイヤレスマイクなどがあげられるが、現状では、自分で手話通訳者を準備し、友達に通訳を頼み、個人的に大学に機器の設置要求をしなければならない状態にある。障害を補う為の措置を、個人の責任で、負担で行わなければならないのだろうか。私達は、「教育権」を保障する立場から、手話通訳者などの設置や、機器などの設置の制度化が望ましいと考えている。障害者に対する物理的な教育条件を整える事は、ひいては、一般学生にとっても学びやすい大学になるのではないだろうか。

#### (4) 障害学生大学受入れに関する一般学生及び教師陣からの反応

##### ① 大学受入推進学生サークル活動に参加した経験を通して思うこと 三平玲子

今回この分科会に際し、私がサークルを通してかかわってきた、視覚障害者(以下視障者)への門戸開放運動について振り返ってみたい。私のいる日本女子大学での運動は、1976年、本学(英文・国文科)に2名の全盲者が受験希望を出したことに始まる。大学側は、一般教養自然科学系列の実験、および、体育の履習が困難であること、大学内の設備不備を理由に、この2名の受験を認めなかったのである。それに対して、学生有志のサークルに属する学生達は、拒否理由が正当な理由ではないこと、障害の有無にかかわらず教育を受ける権利は保障されねばならないこと、障害をもつ人々と共に学ぶことが健常者にとっても大きな意味をもつ等の点から、大学側にまず視障者への門戸開放を要求したのである。

その運動をすすめていく中で、私達が特に強調してきたことは、大学側が考えている様な大げさな改善がなされなくとも、ほんの少しの配慮がなされるだけで、現状のままの大学でも、そこで十分学んでいける障害者がいるということ、そして、大学側は彼らを受入れるために、現状において最大の可能性を考えて欲しいということであった。

全ての障害者が学ぶのに理想的な環境を作るのは、制度的保障が成立すれば当然のことである。しかし、制度の存在しない我が国では、大学の環境が整うのは何年先かわからず、その日を待ってから障害者を受入れるのだとすることは空手形に等しい。よって、最も現実的なあり方は、現在「学びたい」という要求をもつ障害者を受入れていく中で、障害者と大学側と一般学生が、共によりよい環境を作り上げていくことが必要なのではないだろうか。

##### ② 大学側の努力と問題点

大学の教員サイドからは次のようなフロアーからの発言がなされた。

まず、日本社会事業大学の佐藤久夫講師は、同大学では身体障害をもつ学生のために、入学試験は障害にかかわらず受験資格を認め、視力障害や上肢不自由者については、必要に応じて点字受験や1.5倍までの時間延長を行っていること、入学後の大学生活については、視力障害をもつ学生のための対面朗読の保障(対面朗読室、テープレコーダー、テープ、及び、1週間につき7時間で1時間400円の謝礼支払い)、トイレの改造、授業料相当額の学内奨学金の支給、などを行っているとした。一方、障害をもつ学生や学生自治会の側では、こうした学内措置の努力を評価しつつも、最近、視力障害者が受講中の教室での教授が、板書事項を「これ、それ」などの指示語を使って説明するような不注意が目立ってきたこと、せっかく設置された大学付近の盲人用信号器が機能していないまま放置されていること、障害をもつ学生の就職援助に熱心に取組まなくなっていることなどの点をあげて、教員の姿勢を批判してい

る、とも述べた。最後に、入試の門戸開放や大学における勉学などについては、学内措置で相当改善解決可能だが、卒業後の就職は、一大学の努力ではきわめて困難であり、この点が、障害者の大学教育保障そのものを制限する方向で、大きな壁となってくることが予想されると指摘した。

次に、身体障害者雇用促進協会職員で、上智大学非常勤講師も兼務する手塚直樹氏は、たしかに大学側には、入学させたはいいが処遇が適当でないことから問題が生じるのではないかと、受入れ不安のあることを認めながらも、次の3点の問題を提起した。

ア、障害をもつ学生はアルバイトができないうえ、教材への出費が多いなどの困難をかかえているから経済保障が大切、とくに、日本育英会の奨学金制度の検討が重要である。

イ、「精神遅滞者にも大学教育を」との声がある。これを単に非現実的だといってしまうのではなく、大学の社会的機能を明確化した上で、この要求に真剣に回答を与えるべきである。

ウ、企業には障害者の法定雇用率が定められた。この延長で、大学にも障害者用の一定枠が要求されることにもなりかねない。

東京大学の上田敏講師は、国立大学こそ障害大学生の受入れをと思うが、公私の大学の受入率はどうかと質問した。これに対して、受入率は公私の差でなく、障害者の能力の生かされる範囲にかかわる学科別の方が大きな決定要素で、障害学生は理科系に多いとのフロアからの情報提供がなされた。

国際キリスト教大のFred C. C. Peng教授は、費用面では、例えば視力障害をもつ学生1人につき、受験に際しては数名の点訳者を確保し、入学後はテキストの点訳のために、機器のレンタル料支払いやボランティアへの依頼など、私立大学にとっては相当の負担であること。身体障害学生や精神遅滞学生などに一定枠をふり当てる制度をつくった場合に、アメリカで、黒人のための医学部定員を設けて逆差別が問題となったのと同じような問題が生ずる恐れがあると指摘した。また、障害者ばかりが少数派ではないから、日本ではアイヌを含めて、いわゆるマイノリティグループ一般の問題の検討をしていかないと、少数派の中に優遇グループが生れたり、その結果多数を犠牲にした少数者への偏好が生れて、それがかえって、障害者の社会受入れをさまたげる傾向も生み出すことに警告を発した。

以上の討議から明らかにされたことは、第一は、障害大学生の学生生活上の問題であり、第2は、大学を含む社会全般の障害大学生受入れに関する問題である。

学生サイドとしての難関は、受験資格が与えられるか否かの問題、受験資格が与えられた際の条件(入学後態度をひるがえして建物改造要求など出さないことの誓約、点字図書、読書サービス自己負担など)、そして以下のような、障害の種類に応じた在学中の問題である。視覚障害者にとっては、情報のinput、本や資料を読みたい時にかなりの量を読むことの面に困難がある。CPにおいては、思考内容のoutput、口頭発表能力の部分に困難性がある。聴覚障害の場合は、communication様式について、個人レベルでは、手話等により特別な聞き方、話し方などで自己完結しているが、書くこと以外は他の人とは別のコミュニケーションの仕組みであるので、通訳なしの授業やゼミに参加するには不便があることなどが明らかになっている。

一方、大学サイドの問題としては、今日ではかなりの大学が障害学生に相当の関心を示しながらも、全面的な門戸開放にふみ切っていない。その理由は、ア、高校までの教育システムを作り上げた以上、精神遅滞児側からも大学進学論が出されないとも知れない今日、大学側は大学の機能について、障害者の要求に対応するだけの受入に関する議論の深まりを持っていない。イ、大学教育については、まだ障害者の要求であり、また大学側の努力目標ではあっても、障害者と大学双方を支え、調整する法律がない以上、障害者の大学進学が法的権利にはなっていない。ウ、企業の雇用にかかる経費及び人的な備え



の援助については法律を整備して考えるようになった社会が、大学の障害者受入れには全く無感覚で、教育行政のバックアップは、今日のところ皆無である、等のことが明らかにされた。

そこで次に、海外の大学では障害者受入れはどう行われているか、小島蓉子教授による事例研究が行われた。

#### (5) 海外の大学の一事例としてのウィスコンシン大学から学ぶこと

小島 蓉子

1973年の筆者の調査によれば、ウィスコンシン州立大学システムに於る大学院教育の中心地であるマディソン校には、3万3千人の大学生が学んでいる。また、その中の375人は、心身あるいは社会的なハンディキャップを負った学生であることが明らかにされた。この中の20人は完全な四肢マヒ者で、頭脳と首から上の機能——聞くこと、話すこと、記憶すること、ヘッドにとりつけたスティックによるタイプ打ちや、口による押ボタンによる車イス運転など——だけが学問の武器という、車イス利用の、身体的には最重度の学生である。

これらの障害大学生の大多数は、大学において学問することが本人たちの職業生活への準備として最もふさわしいと、職業リハビリテーション局によって判定され、州がスポンサーとなって大学進学へと進路指導されてきた人々である。彼等には、連邦と州共同出資のリハビリテーション費の中の職業訓練援助費から、学費、交通費、介助者費用等が、在学期間中交付されている。卒業後は、大学での準備段階が生かされた専門職への就職あっせんを受けている。

大学のキャンパスの中には、これだけ多くの州リハビリテーション局のクライアントが在学しているので、大学側が建物と事務職員を負担し、州側が駐在カウンセラーを派遣した共同事業として、障害学生カウンセリングセンターがキャンパス内に開所され、障害学生のガイダンスを行っている。

障害学生のための、州の職業リハビリテーション局のランチとしてのこの障害学生カウンセリングオフィスにいる職業リハビリテーションカウンセラーは、高校や個人や病院などから移送、紹介されたクライアントに、大学進学への適性評価を総合リハビリテーションに委託して行い、あらゆる角度から大学生生活が本人の職業発達の線上で妥当という結論がえられれば、州リハビリテーション費を奨学金として交付し、州が障害学生の学内によるリハビリテーションのスポンサーとなるのである。州が、大学をリハビリテーションのステップとして活用する場合は、あくまでも本人の学業成績が大学教育の水準以上であることが立証されねばならない。立証されれば、どの様な重度な障害者でも入学が認可され、生活に物理的な配慮が必要な場合には、大学寮の障害学生用の一階の部屋に優先入居があっせんされるのである。

アメリカの大学では、障害の故にアカデミック水準を加減して、障害学生を大目にみるということはない。障害のために必要な学業援助はあらゆる手段を通して行いが、その結果の学業成績の評価に際しては、一般学生と対等の基準で臨むのである。障害学生を受入れても、それによって学問の水準をくずさないことが大学の倫理だからである。

人間の能力開放の道は様々である。学問によるもの、その他の肉体的労働によるもの、作業技能によるもの、等々多岐にわたるが、あくまで学問による人間の発達とその結果としての社会的、職業的身分の向上を学問的全人的教育訓練を通して計るのが大学の使命である。よって、障害者人口の全てが逆に大学教育に適格者であるとは言えないことは、普通人に於る大学合格者の選抜と同じ原理である。州援助類型の内訳でみると、大学進学援助は、アメリカの全リハビリテーション対象者の9.5%（1972年統計）である。しかし、大学教育による援助もリハビリテーションの流れの中でとらえられる発達保障線

上にあり、それがリハビリテーションの法律並びに行政のシステムの中に組み込まれている点では、一貫性のあるリハビリテーションの実行を物語るよい事例国である。障害大学生が大学に入学できる条件づくりへの保障は、アメリカでは、すでに1954年、職業リハビリテーション法の改正以来うち立てられて来た。このことは、25年前から大学教育も障害学生の法的権利となったということを理解する上で、大切なことである。

連邦政府は、アメリカ基準協会 (American National Standard Institute) に依頼して、1961年にアメリカ建物基準を採択した。以来、学校であれ図書館であれ、議事堂であれ、国庫負担の建物はすべからず無障害であることを条件として、公共建築物障害撤去の義務を、広く国中に普及させて来た。そして更に、公民権法 (Civil Rights Act, 1964) が公布されると、機会均等の運動は、少数派に有利な法的支援を、教育制度や建築の面でも実質化されるようになって来たのである。

だが、アメリカの大学への解放運動は、こうした法があったから始められたのだろうか。否、大学解放は、法や行政の権限に引きずられて、いやいや乍らなされたものではない。法の存在など意識されないほど熱気のある学内の動きが、具体的に大学教育を障害者学生に開放して来ているという事例は、自らが一大学生として過したキャンパスの中に見ることが出来た。

筆者が、アメリカ中の、職業リハビリテーション学科をもつ76の大学の院生すべてを調査して、望ましい大学の要素は何かを見出そうと試みたところ、その一つに、「障害学生を受入れるだけの大学としての抱容力」という要素が検出された。大学当局も学生も、こうしたあり方に向かって進んで来たが、今日もそのプロセスであるということが分かる。

この事例のウィスコンシン大学の内部組織を、筆者が調査しているうちに、障害者の大学受入れを推進する力には、三つの流れのあることが判明した。

一つは、大学理事長直轄下に1960年頃より設置された、「障害学生リハビリテーション委員会」であり、身障学生にも満足のいく大学環境を、専門の教授を動員して大学管理者側の責任で創り出しているという努力である。

第二の力は、環境整備を要求する「障害学生連盟」の活動である。障害学生は1960年代の中ば頃から急増し、1967年には、障害学生自らが車イスによる全校の物理的障害の点検をして、大学に意見具申をしている。

第三の力は、州政府のリハビリテーション局の、大学内出張所を担当するカウンセラーを中心にして、大学、大学生代表者は勿論のこと、高校の先生や地元関係者を網羅して組織された、連絡調整運動機関であるところの「障害大学生援助特設委員会 (Ad Hoc Committee)」である。

これら三つの実行力の流れが、障害者の大学進学を助長し、受入れ状況を改善し、更に、大学教育の、障害者の生活開拓についての効果を高める上に作用しているのである。またこれらの力の単位は、障害者の中の、大学教育が意味をもつと思われる有資格障害者の大学進学を援助するという、大目的に於て一致はしていても、それぞれ、グループによる独自の運動の進め方や方法は、自ずと異っている。

本日のわれわれの部会に於てさえその片隣が伺われたように、大学生側は、日本の大学が、本件に関しては、現在の所行政の支援から切りはなされている状況などについては関心はなく、管理者の立場で物考えることはないから、簡単に、大学受入れの壁が関心だけでとり払われるべきだと考え、又、大学組織側にも教育対象を決定する権利がある事は考えずに、学生の要求の面のみを正当化する。

一方大学側は、大学というシステムの調和の中で、大多数の非障害学生とのバランスも考えながら、無理しないで徐々に障害学生に答えていこうとするものである。

この様な態度の相違が現れるのは、各々の立場が違い、それぞれの立場の人々のもつ大学教育観が異なるからである。

表1にあげるウィスコンシン大学内部の運動の力動源について、筆者の行った分析は、その事柄をよく示している。

日本の障害者に対する大学解放運動の歴史は浅い、いやこれからだといえる。立場を異にしつつ部会に参加したすべての人々は、障害学生に大学教育への機会を解放していこうとする、大目的の上では、一致をみたということが明らかとなった。しかし、各々の立場により主張は異なるのだということも明らかとなった。学生諸氏が要求する理想は、日本の行政の大学進学に対する無策さを打ちやぶること、教師の例は大学運営、障害学生の利害と必ずしも一致しない一般学生のニーズも考える故に、現実の

表1 主要な活動3団体の関係

サブ・システム	1.理事長直属リハビリテーション委員会	2. 特 設 委 員 会	3.身障学生連盟
目 的	身障学生の満足に足る環境を提供すること	身障学生に対しよく機能する環境とサービス網を作りあげること	フォーマルな組織に影響と刺激を与えること
役 割	サービス提供者	援助の供給伝達者	援助の受益者、相互扶助
組 織 の 性 格	フォーマルな組織	任意の公的組織	自発的(任意)組織
機 能	総長に対する提案や勧告の提供 手続きおよび指導要領の設定	1. 官僚主義を打破することにより、効果的に仕事を遂行するメンバー間の協調的協力体制を維持すること 2. 問題領域の検討と解決案の発見	メンバー同志の相互援助 世論形成
メンバー構成	フォーマルな組織からの代表による構成 1. 学監オフィス 2. 教授 3. 学生相談センター 4. 身障学生相談センター 5. 学生保健センター 6. キャンパス設計相談所 8. 行動障害学部 9. 身障学生連盟	次の部署からの代表による構成 1. 駐車場事務所 2. 学生生計相談所 3. レジデンスホール 4. ハイ・スクール関係者 5. キャンパス計画・相談部門 6. キャンパス保安部門 7. 学生保健センター 8. 学 事 課	ウィスコンシン大学在学中の障害学生ならば誰でも
価 値	管理的安定性、人的物的な意味でのキャンパスの調和的発展	実際の地道な改革	理想主義的で反応の速い改革
関 心 事 項	財政と規則	実際の技術的解決	ソーシャルな活動と組織内での満足感・同志的結束
調 整 者 (コーディネーター)	理事長指名の担当者	身障学生相談事務所所属のDVRカウンセラー	学生代表

様々の制約を受けることは覚悟しなければならないことも指摘された。我々の当面の課題は、障害者の大学受入れに対して冷淡な無関心層に、この問題を理解させることを行いながら、大学行政及び大学に、覚醒をうながす努力を続けなければならないということである。

我々が到達するところは、目醒めた障害学生の理想と、障害学生に対して無関心な今日の大学の現実との、中間点にあると思われる。



## (6) まとめ

テーマについて真に関心ある参加者約30人が、90分間を、文字通り、一瞬の息つく余地もない活発な発言をして下さった部会であった。学生側も、教授陣も、自らの主張を行い、各々の立場からだけでは見えない、他の側面の考え方のあることを相互に教えられた。また、障害者の大学問題は、未だ日本では対応策の真空地帯である時、本部会でこの様に問題点と課題をはっきり浮き上らせることが出来たことは、画期的でもあろう。

しかし、「90分の短時間では、発言する時間および頻度が少なく、もっと議論を続行させてくれればよかったのに」という人々の欲求不満も残った。

よってこの部会を出発点に、今後の社会啓蒙の進め方を考え、研究を深化させ、障害学生をバックアップし、大学行政や大学当局に意見を伝達する道を具体的に考えるため、更にこのメンバーを中心とする研究会を、来年のセミナーを待たず続行させていきたいという願いが、会の終了後も会場に残って話合った何人かの同志によって提案された。

“Small is beautiful.” (小さいことは美しきこと=W.ハーグリーブス氏、英国CP協会部長)ということばを引用して開会したのがこの部会であった。それは、本セミナー中最も小家族で最も障害者自身の発言の多かったものだったが、果して、熱心で勇気ある発言と、問題提起をして下さった方々により、まことに充実したひと時となり、1978年セミナーの、small but compact な激論が進められたことを、仲間と共にかみしめた部会であった。

## 資料

1. 小島蓉子「アメリカにおける障害学生のための大学教育」『健康環境システム研究4、講演集』健康環境システム研究会、1976
2. 小島蓉子「障害大学生内外関係文献資料一覧」1978

# Ⅲ．調査報告——障害者団体のニード

村田 稔（弁護士）

## 1. はじめに

本調査はリハビリテーション交流セミナー79の実行委員会がアンケート調査したものであり、私が担当責任者であった。私の本職は弁護士であるが、今回はひとりの身体障害者として、いわゆる障害者サイドから発表をしたい。

## 2. 調査の目的

調査対象者に対する依頼状の中に「私はかねがね、いわゆるリハビリテーション専門家といわれる人達が障害者や障害者団体の本当の要求や希望をつかみきっているかどうか疑問をもってきました。この機会に皆さまのご協力を得て是非とも専門家の方々にわれわれ障害者の本音をぶつけてみたいと考えております」と書いた。これが調査の目的である。

## 3. 調査対象および調査方法

調査対象は主として、全国社会福祉協議会福祉部作成・発行の心身障害児者関係団体名簿（135団体）から私が任意に116団体を選び、封書によりアンケートへの回答を依頼した。封書は116通のうち未着でもどってきたものが7通あり、残り109通が団体各位に到着したと思われる。そのうちアンケートへの回答をいただいたものが27通であった。回収率が低かった原因はアンケートが〇×式ではなく、記述式となっており、また、設問の内容からも書きにくい面があったためではないかと思われる。

## 4. 調査項目

- (1) あなたの団体（グループ）は、どのような人達の集まりですか。
- (2) あなたの団体は法人ですか、それとも、法人格のないいわゆる任意団体（グループ）ですか。
- (3) あなたの団体（グループ）の活動目的の主なものをあげて下さい。
- (4) あなたの団体（グループ）が、現在もっとも重要な課題としてとりくんでいる事項を具体的に書いて下さい。
- (5) 前項4の課題を解決するために、あなたの団体（グループ）は具体的にどのような方法をとろうと考えていますか。
- (6) あなたの団体（グループ）は、障害者の福祉行政に対していま何を望みますか。
- (7) あなたの団体（グループ）は、一般社会の人達に対していま何を望みますか。
- (8) あなたの団体（グループ）は、いわゆるリハビリテーション専門家の人達に対して、いま何を望みますか。

- ① リハビリテーションの専門家全般に対して
- ② 医師に対して
- ③ 理学療法士に対して
- ④ 作業療法士に対して

- ⑤ 言語治療士に対して
- ⑥ ケースワーカーに対して
- ⑦ 福祉関係の大学教授等大学研究者に対して
- ⑧ 施設職員に対して
- ⑨ 福祉事務所職員に対して
- ⑩ 職業安定所職員に対して
- ⑪ その他の分野（具体的にあげて下さい）の人達に対して

## 5. 調査の結果

アンケート結果を紹介する前に二つだけおことわりをしておきたい。その一つはタイトルが「障害者団体のニーズ」となっているが、「団体」にあまりこだわらないでいただきたい。本来は障害者のニーズとしたかったのであるが、調査上のテクニックのためにこのようになった。「ニーズ」はここでは注文ぐらいに考えてほしい。従ってタイトルは「障害者サイドからの注文」ぐらいに考えていただきたい。

もう一つはアンケートは記述式になっていることである。アンケート用紙はB4版で4枚綴になっており、ありがたいことに大変熱心な回答をいただき、4枚に所狭しとばかり書いてあり、中にはカナタイプでピシシ打ってあるものもあり、全部読み終えるのに私は約2時間を要した。

返答の持味を生かすため、私が変に言葉で言いかえることはなるべく差し控え、できるだけアンケートに書かれた言葉そのままに紹介したい。

### (1)～(5)の回答について

まず、アンケートの(1)ないし(3)の設問は回答をいただいた団体の性格をある程度つかむためのものであった。

(4)および(5)の設問は、団体が当面している課題と(6)に出てくる福祉行政への注文との間に何か関連があるのではないかと考えてきいてみたのであるが、回答いただいた中からは、当然のことながら(4)および(5)はかなり団体固有の問題が多く、(6)との関連は特に見られなかった。従って(1)ないし(5)の具体的な回答は紙面の都合もあり割愛させていただく。

### (6) 福祉行政へ望むこと

障害者の福祉行政に対しての注文のうち、代表されるものとしては、「厚生省等さまざまな障害者をめぐる審議会、委員会のメンバーは行政にとって都合のよい人、10年1日のごとき同じ人々、官製のような団体の人々がそれもどの会でも同じような人々が顔を連ねている。勇気をもって実践的、開拓的な障害者を登用すべきであり、何の組織ももたないひとりの障害者の意見にも耳を傾ける場をつくること。」次に「障害者の福祉行政は多省にわたり、単に厚生省や労働省だけでは全体プランができない機構にある。各省の連携が必要だとか、内閣や総理府に中心となる機関を作るべきだとかの意見も10年20年前からある。しかし、これらはいまだになされることはなかった。このような状態の中で障害者はどんどん増え、そしてまた老いて行く。私達は行政機構の欠陥だからといって無為な時間の通りすぎて行くことを許すことはできない。障害者問題の直接の所管はやはり厚生省であろうから、厚生省はその中心となって、障害者福祉の総合的なプロジェクトチーム作りを他の行政機関に呼びかけ、総合的な障害者福祉行政の長期計画づくりをすべきである。」

ここで具体的な注文のベスト3をあげてみる。第1位は「生活できる年金制度」、第2位は「住宅確



保」、第3位は「働く場の確保」となっている。

ユニークなものを2,3紹介してみよう。「大人として扱うこと。重度障害者の手当の多くは、親、扶養者に向けて出されている。本人に支給されたい。20才を過ぎたら自分の意思で出歩く人が多い。年金を充実してほしい。重度者が自立をする場合、生活保護である。生活保護を受けるには、扶養者の扶養義務放棄のサインがいる。それだけで自立に踏みきれないケースも多い。」次に「地域社会の中で、小さい団体や施設にならない共同生活のグループに助成金を出してもらいたい。外国では、5,6人でも施設として認められていると聞く」、「電動車イスの補装具化の完全実施（現在のものは非常に不満足）、電動車イスの多様な使用に対応するため現在の速度規制（おおむね4km）を最高速度6~10kmに引き上げること」というのがある。

また文部省に対して「養護学校義務制に関連して就学指導委員会の充実。特に進路について障害者や親の意見が反映されるようにしてほしい。」

#### (7) 一般社会の人達に対して望むこと

「国民の何パーセントかは障害者であるという厳然たる事実を認識し、地域社会で障害者を受け入れるコンセンサスを作してほしい。」「背の高い人、やせた人、頭のよい人、のろまな人、眼鏡をかけた人、ツエをついた人、車イスに乗って生きる人、足が1本であろうと、手話がなが手であろうと、お互いそれで生きている。皆、街の中で一緒に生きているのです。だから、同じ人間として平等に扱ってほしいのです。ただそれだけです。」

次に「もし自分が、自分の子供が、あるいは親が障害者であったらどうするかという発想を持ってほしい。」次にこんなものもある。「障害者との接触。マスコミ、本、街中、目、耳、頭での知識は豊富だと思う。だが、行動に現われてきていない。自分達が手を出したら相手（障害者）に悪いんじゃないか。そんな人にかかわったら面倒になるからと考えているようだ。ともに接触してみて、その結果において結論を出してほしい。」

#### (8) リハビリテーション専門家に対する要望

##### ① 専門家全般に対して

「もっとドロによごれること」とある。「リハビリテーションの仕事は夜空に輝く金星をあおぎ見るような気持ではできない。ドロ沼に沈んだ真珠を求めるところは少ないが、価値あることであることを知ること。」次に筒条書風のものを見てみると、「余り学問的視野で障害者を見ないで下さい」、「障害者を単に治療やリハ訓練の対象として把えるのではなく、治療訓練が今後の日常生活にどの位役立つのかを当事者である障害者とともに考えながらリハを進めてほしい」、「障害者を1個の人格として扱う事を忘れてもらいたくない」、「やってやる、なおしてやる、言うことを聞かなければ帰してしまうぞ式の間人間無視はこまる」、「専門のワクの中に閉じこもらないでほしい」、「リハ専門家の人員が少なすぎ障害者の生活の中まで入りきっていない。特に地方の中・小病院は少なく、手軽に障害者がアドバイスを受けられるような体制を望みたい。」

次にはもっと具体的なものになる。脳性マヒの方々から専門家への注文である。

「現在までのリハビリテーションは無いもの、失われたものを補うことに重点がおかれていたのではなかろうか。すなわち、器具、機械によって補うとする方式が大勢をしめていると考えられる。脊損や頸損関係はそれでいいと思う。CPに対してはもっとほかの角度で考えてほしい。失われたものではなく、生かす方法を知らないものという方式にきりかえてほしい。小さいときから訓練、訓練で限界だといわれていたCPがちょっとしたヒントと工夫をアドバイスされて楽々と限界をこえてしまっている。

CPに対しては研究がもっとなされるべきと思う。」また、他の脳性マヒの人はこうもいっている。「脳性マヒなどの幼い時から障害を負った者に対してはリハビリテーションではなく、ハビリテーションの考え方をしてもらいたい。すなわち、成長期に障害のためあるいは特殊な環境におかれるため、または過度の保護のため、正常な（誰でもする）体験や社会的経験、また社会資源の活用から遠ざけられやすい状態におかれ、それが不足または無の状態の者にはそれらを新たに獲得する必要がある。あらゆる場面でできるがざり自己決定させ、正常な間違いを体験できるよう配慮してもらいたい。そして、自分の置かれる社会的立場を正しく認識し人間として独立できるように近づく努力を目指してほしい。」

次にこれは電動車イス使用者の方からユニークな注文がある。「リハ専門家は、電動車イス使用による機能低下をことさら言いたて、電動車イス使用に消極的な態度を示すものが多いが、電動車イス使用による機能低下の具体的なデータ等を提示されたことは一度もない。多少の機低能下があろうと、移動に困難な障害者が他人に依存することなく、自分の意思で目的とするところに行くということが、障害者の自立にとって欠くことのできないものであることを正しく把握、今後は電動車イスの開発や生活の中での利用方法というものを、使用する障害者と共に考え、より有効な電動車イスの活用のために専門家としての声を出して欲しい。」

もう一つ、二つ紹介してみる。「スポーツや自動車運転をリハに活用してほしい」、「障害者の運動に対して正しい認識をもち、共に運動を進めるという協力の姿勢をもってほしい。」最後に、あたかもいろいろな注文を総括するかのようになり、こんな手厳しいのがあったので紹介したい。「本来、リハビリテーションの専門家というのは障害者自身ではないだろうか。このリハビリテーション交流セミナーについても、これを企画・立案し、主催しているあなたがたはほぼ全員が障害者ではない。交流セミナーにおいて、このようなアンケートが行われなければならないという状況、そこには、リハ専門家の中に障害者と一体となっているという日常の基盤がないからではなかろうか。障害者は常に観客であり、主体となって動いている人たちは障害者をめぐる人々であるという状況を作り出しているリハ専門家の考え方、意識を変えていただきたい。このような交流セミナーの運営の主体に障害者が多数参加していける場こそ必要であり、このようなあり方を創り出していく姿勢をリハ専門家に強く望むものである。」

## ② 医師に対して

医師に対しての注文はあまり多くない。「リハビリの医師は真摯な方が多い。しかし、病院内の診療にとどまらずもっと障害者の運動に参画して伝道者としての役割を果たしてほしい。」次に、医師の方々あとで出てまいります理学療法士の方々と作業療法士の方々とに共通の注文として、「障害者の話を聞いて納得のゆく説明がなされず、一方的な命令でしかない」また、「時として言葉が乱暴で、障害者をどなりつける人がいる。」

脳性マヒの方からかなり具体的な注文として、「脳性マヒ者の筋肉の緊張および不随意運動による頸椎および脊髄の摩耗変形に対する総合的研究と対策、ならびに外見的に軽いとみられる脳性マヒ者がある一定期間職業についた場合の疲労の蓄積および回復のバランスをくずし、多くの場合過度の緊張の結果として屈筋伸筋のバランスがくずれ、身体の各部の関節に異常をきたし、知覚神経の異常や運動神経にも同様の現象がみられることに対する研究と対策をおねがしたい」というのがある。次に頸損者の方から、「頸損者にとって医療は切りはなせないから“泌尿器”と“外科”といった専門分野だけでなく、身体のこと全般についての相談が出来るシステムを医師と障害者の協力で作りたい」というのがある。

あとは、この設問の趣旨とは異なり、すなわちリハビリの医師に対する注文ではなく、一般のお医者さんに対する注文があり、かなり切実なものなのであえてご紹介する。「障害者が病気にかかった場合に往診に来てくれない」、「重度障害者を扱う医師が少ない。主に眼医者と歯医者」、「歯医者は2階が多く、車イスでは利用が困難なのでなんとかしてほしい」というのがある。

### ③ 理学療法士に対して

先ず「障害者の前にそびえ立ってはいけない。障害者と共に汗すること」というのがある。次に、「訓練が生活の中でどうかされるかが重要である。障害者が社会生活をより自由に行うための訓練であることを常に認識すべきであり、単に訓練のための訓練に終始することはさけるべきである。生活の自由を増すためには、機械力の導入、物的ケアの重要性をもっと認識すべきである。」こんなものもある。「方法が障害者に合わないときは無理をしないこと。」また CP の方より具体的な注文がある。「現在の理学療法は、健全者が獲得した身体機能を失った場合にその回復を目的として治療が行われるが、脳性マヒ者のように獲得できなかった人達についてはあらゆる体験が出来る条件づくりとしての理学療法をおねがしたい。」次に、これは障害者から理学療法士の方々への注文ではなく、理学療法士の方々になりかわって、国の施策への注文として、「人数が少なすぎる」、「PT の人達がより勉強できるよう社会制度上における立場の確立をのぞむ」というのもあった。

### ④ 作業療法士に対して

先ず「職業との結びつきを放棄してはいけない。作業療法は職業とは関係ないなどとはもっての外」「地方独自の産業（職業）に適應できる作業療法をおねがしたい」など職業との結びつきを切望する声が多いようである。また、こんなものがある。「以前私もこの療法を受け、その時はやる気がなく何でもこうした事が将来につながるのかと反発したことがあった。しかし、現在はそこで得たことが基礎となっていることを思い知らされている。そこで、当人が希望を自覚できるような療法が望ましい。」次に作業療法士の人々がどこにいるのかわからない。障害者が専門的意見を受けたいと思ったとき、どのように連絡をすればよいのか」というのがある。また、脳性マヒの方から、「脳性マヒ者のように成長期に手を使わないため、手の発達が遅れたり、変形や筋の拘縮がみられる場合、これまでの OT はほとんど通用しない。単純作業の努力主義を見直し、障害者自ら意欲的に治療訓練に参加できる治療技術の開発をぜひおねがしたい。」ユニークな提言につきのようなものがある。「苦しい訓練の中で OT の存在はリハビリの花である。どうか、社会制度上において作業療法士の方々の確固たる立場の確立をのぞむ」といつている。この提言をされた方には、OT の方々の中には女性が多いという前提があるわけである。

### ⑤ 言語治療士に対して

先ず「幼児期の訓練をもっともっと進める必要を感じます」というものがある。「地域の中で就学前の障害幼児などが、とくに言語治療士の方の指導を必要としています、施設に行かないと専門的意見が得られません。もっと地域にチームを作って入ってきてもらいたい。」こんなものもある。「学と名のつく理論のみをふりかざしても、語れないものが語れるようにはならないということを知ること」、「対人恐怖をとりのぞく言語治療をお願いしたい。部屋の中でちょよちょよやっても社会適應にはほとんどつながらない」、「海外の新しい言語訓練の導入を」、「民謡を歌うことは療法として効果がある」というのもあったので参考までに紹介しておく。

### ⑥ ケースワーカーに対して

先ず、「ワーカー自身の未熟な経験を尺度として障害者に多くのことを強要している。こうした中からは、障害者の自立が生まれるどころか、それをつみとり反発を呼びおこすことが多い。障害者のおかれた社会での地位を理解し、その立場からものを考え発言してほしい。」次に、「重大な役割をもっていることを自覚してほしい」、「障害者の生活にもっとかかわってきてほしい」というものもある。それから、さきほど OT の方を花にたとえた方がいたが、今度はケースワーカーを「リハビリのエンゼル」だといっている。そして、「リハビリ後のアフターケアが君たちの役目だから、エンゼルよ、羽ばたいて障害者と共に日夜とんでる街に出よう」と付け加えられている。最後に、こんなものがある。「施設内で他の職員、特に介護にあたる人とのチームワークを乱さぬこと」と書いてあった。



### ⑦ 社会福祉関係の大学教授等大学研究者に対して

このあたりから俄然注文が多くなり、しかも、注文の内容がほぼ一致していることに注目いただきたい。先ず、カナタイプで打たれた方からの注文である。「理論方面だけでなく、実地に同じレベルで1年か半年位もくもくと車イスを押してから学問にとりくむ姿勢がほしい。学生たちにはやらせる態度はあっても教授でそういう取り組み方をしている方は20数年お1人しか存知あげない」とある。次に、短いコメントがたくさんの方からあるので読みあげる。「机の上の理論だけで福祉を考えてもらいたくない。人間不在の福祉は有害無益」、「机上の理論よりも現実からの理論づけを」、「研究のための研究だけでなく、実践を体験してほしい。研究だけで福祉を語ってはならない」、「理くつだけでなく、行動力のある学生を育てる教育をしてほしい」、「外国理論の翻訳教育は困る。日本の現実を直視し、日本の障害者の立場に立った実践教育を」、「自分だけでわかっている、私達障害者には遠い話としか聞こえてこない。障害者に身近な問題をとりあげてほしい」、「地域の中に入り、障害者の意見をきくこと」、「ボランティアは大変あいまいなので、しっかりした定義を考えてほしい」、「地方の福祉行政に対して問題提起をすべきだと思う」というものもある。先程来、花だエンゼルだと言ってきた人は、ここでは、「福祉の花がロジックだけで咲いた試しはない。福祉の花は行動からしか咲かない。教授先生たちは、実習として24時間障害者と共に街で行動してみたいかか」といつている。

### ⑧ 施設職員に対して

「仕事がいやなら、そこにしがみついていることは福祉のためにならぬ」、「自分の生活を守るためだけなら他の職場を求めてほしい。」次に「“障害者は神様です”が、時によって思わぬほころびかたをするように見える。だから、障害者のそういうときのショックが大きく施設不信感につながる。なるべく同じ態度で接してもらいたい」、「障害者1人1人を人間として扱い、障害者個々の可能性を生かせるような生活日課を工夫してほしい。」また、若い職員に対しては、「大学卒業したての職員は自らの未熟さを棚に上げ、大学で習った学説をふりまわしたり、40才にもなる障害者を子供扱いしたり、職員と障害者を無意識のうちに別世界の人間と考えてみたりしている。友人の立場を確認してほしい。」こんなものもある。「施設内の障害者が市民活動に参加したい場合など、もっと積極的に手となり足となってほしい」、「社会に開かれた施設づくりを。施設内だけでどんな施策を行っても満足するものは得られない」というのもあった。

### ⑨ 福祉事務所職員に対して

この方達に対する注文が最も多かった。次々と読みあげていく。「あまりにも事務的な人が多すぎる。面倒をみてやっているといわんばかりの職員が多すぎる。職員が上で私達が下という接遇の態度。窓口の人達、福祉司の人達は新しい制度をもっと勉強すること。最近障害者も情報キャッチが早いですよ。」それからユニークなのがある。「行政の側に立った横柄な言葉や態度がはなにつく。福祉事務所の中にいる障害者（たいがい軽度）が相談に行く障害者（重度）に侮蔑的で、相談どころではない」とある。特に後半部分は、障害者自身がよく耳をかたむけるべきである。「お互い人間同志という立場に立っていただければそれでよい」というのがある。それでよいというところにこの人の万感がこめられている。「行政と障害者との間に立っている者という認識がうすい」、「ルールは人の為にある」というのがある。「すぐ福祉法第何条をふりかざす」とか、「未確立の分野の制度づくりにとりくむこと」、「法規にうとい人に対するお世話係という事に配慮を」というものもある。

次に福祉事務所の職員の方々と職業安定所の職員の方々とは共通の注文があるので、ここに述べておく。先ず「お役所的な発想の中だけで行動せず、障害者の中に入ってきてほしい」、「身障団体の役員には親切だが、身障者個人には不親切」、「問題を正面から受けとめ、障害者をたらい回しにしないこと」というのがある。

#### ⑩ 職業安定所職員に対して

これから紹介するのは、ある障害者が自分の体験を書かれたようである。「就業条件が悪いと障害者なんだからガマンしろとくる。これは職安職員の問題というより職安そのものの職業あつ旋能力の問題だと思う。私の経験では、自分たちのあつ旋能力を棚に上げて、なかなか職につかないと障害者のせいにする。逆に所轄外の職安では、「まあ、あせってもしようがないから気長にやるんですな」とくる。これらはどう考えても職安職員の問題というより労働行政そのものの問題のように思います。」次にこんながある。「窓口の援護係が1年位で変るのはこまる。専門的知識がなく、その場だけの対応で信頼がもてない。このような状態を放置して十分な教育をほどこさない労働行政に問題を感じる」、「社会に対して障害者雇用を理解すべきことをPRし、社会の人々を教育すべきではないか。」

#### ⑪ その他の分野の人達に対して

最後になるこの項目の回答の中で、障害者から障害者に対する注文があるので是非とも紹介をしておきたい。「障害者は自らかかえる障害者問題から目をそらせて自分だけいい子になるな」、「結局、障害者ひとりひとりが誰かやってくれるのを待つのではなく、リハビリ専門家に、行政に、政治家に声を出して呼びかけるしかないのではないか、そのためには、障害者自身に自覚と責任ある発言をするための恥かしくない考え方を確立していくべきである」、「リハビリテーションを受ける側である障害者もありがたさを知りながら、負けてなるものかという気持をもつべきである。」

### 6. おわりに

以上がアンケートの回答のあらましである。障害者サイドからの言いたい放題でかなり耳ざわりだったかと思われる。しかしながら、障害者のいうことは聞かなくたって大体わかっていると白けないでいただきたいと思う。こういうことはテレビのコマーシャルと同じである。繰り返すことに意味があるのである。

## 編集後記

★まず、第6号の発刊がこのように遅れましたことをお詫びいたします。今号には「REHABILITATION GAZETTE 国際版」の'77年と'78年の記事が入っています。

★『25人の女性身障者の雇用経験』はアメリカ、メキシコ、南アフリカの事例ですが、日本では障害のない女性でも大変だと言われる妻・母・職業人の三足のわらじを、重度障害の身で立派にこなしている人が多いのに感心しました。“不可能というのは、時間がかかること”、“忍耐と挑戦し続ける能力があれば何でもできる”という言葉のなかに、運命に打ち勝っていく人間の強さを感じ、思わず頭が下がりました。

★『機関誌の家における20年間』は本誌の親雑誌である「REHABILITATION GAZETTE 国際版」の発刊のいきさつや歴史について書かれたものです。この「リハビリテーション・ギャゼット」も、第10号まで出すことを当面の目標とし、その次には20号を目標にしたいと思います。来年のことを言うと鬼が笑うといいますが、鬼千匹にたとえ笑われても、目標は高く持ちたいと編集委員一同、念じています。

★日本の情報は、一昨年と昨年の「リハビリテーション交流セミナー報告書」から再録しました。すでに一度公表されたものですが、本誌の趣旨に沿った内容であり、翻訳の部分との比較により日本の状況を位置づけるものとしても役立つと思われます。

★なお、本誌は第1号からずっと〈社会福祉法人 東京コロニー〉で印刷されています。内輪話で恐縮ですが、くせ字や赤字の沢山入った原稿を実に思いやりを持って判読し、間違いの非常に少ないゲラ刷りにしてくださっています。紙面を借りて日頃のお詫びと感謝の念を表わしたいと思います。(斉藤)

## リハビリテーションギャゼット編集

### 委員会日本語版スタッフ(ボランティア)

#### 〈編集〉

※永井昌夫 国立身体障害者  
リハビリテーションセンター  
調 一興 社会福祉法人 東京コロニー  
岸本舜晴 編集者  
丸山一郎 日赤語学奉仕団OB  
斉藤明子 編集者

#### 〈翻訳〉

井上久美子 秘書  
山本 恭子 秘書  
竹中 滋子 秘書  
安藤 幸枝 雑誌編集者  
染矢 朝子 主婦  
以上、日本赤十字社語学奉仕団員  
今村恵津子 言語治療士  
一方井柞子 主婦  
橋詰美智子 主婦  
※中西 正司 翻訳者

(注) ※印は障害のある方です

#### 〈表紙〉

清水忠男 デザイナー

#### 〈連絡先〉

〒171 東京都豊島区南池袋 2-8-18  
コーポ高砂 506号 斉藤方



リハビリテーションギャゼット No. 6

---

1980年7月1日発行

編・訳 リハビリテーションギャゼット編集委員会  
発 行 社会福祉法人 **東京コロニー**  
東京都中野区江原町2-6-7  
電 話 (03) 953-3541 (代)

---

印刷・製本 コロニー印刷

